

流山市下花輪荒井前遺跡

—高度浄水施設建設関連埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成22年12月

北千葉広域水道企業団
財団法人 千葉県教育振興財団

ながれ やま しも はな わ あら い まえ

流山市下花輪荒井前遺跡

—高度浄水施設建設関連埋蔵文化財発掘調査報告書—



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第649集として、北千葉浄水場高度浄水施設建設工事に伴って実施した流山市下花輪荒井前遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代および奈良・平安時代集落に伴って多くの土器などが出土するなど、この地域の歴史を知るうえで多くの貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成22年12月

財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 赤 羽 良 明

凡　例

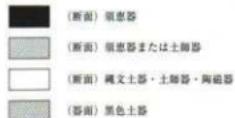
- 1 本書は、北千葉広域水道企業団による高度浄水施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県流山市桐ヶ谷字荒井146番地に所在する下花輪荒井前遺跡（遺跡コード 220-064）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、北千葉広域水道企業団の委託を受け、財團法人千葉県教育振興財団が実施した。委託業務名は、発掘調査から整理作業までが「21s第4号高度浄水施設建設に係る埋蔵文化財発掘調査業務委託」、報告書の印刷・刊行が「同委託（その2）」である。
- 4 発掘調査から整理作業及び本書の執筆・編集は、上席研究員井上哲朗が担当した。
- 5 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、流山市教育委員会、北澤滋氏の御指導、御協力を得た。
- 6 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
流山市発行 1:2,500「流山地形図」30・31・34・35・39・40（平成18年版）を1/5,000で接合。
国土地理院発行 1:25,000地形図「流山」(NI-54-25-1-2)（平成17年版）
参謀本部陸軍部測量局発行 1/20,000迅速測図「流山村」「我孫子宿」（明治17年版）を1/25,000で接合。
- 7 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和50年1月撮影のものを使用した。
- 8 本書で使用した座標値は世界測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北であり、周辺地形図（第1・4・5図）以外の標高は淀川基準水面（Y.P.）を基準とする。
- 9 上層遺構・遺物の図中の土層・遺物等の表現の凡例は、以下のとおりである。なお、下層遺物の凡例は各図中に掲示した。

上層遺構内散布物等



上層遺物種類

- 土器
- 土製品
- 石製品
- 金属製品



本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と成果.....	2
第2節 遺跡の位置と環境.....	6
1 地理的環境.....	6
2 歴史的環境.....	6
第2章 検出された遺構と遺物.....	13
第1節 旧石器時代.....	13
第2節 縄文時代.....	18
1 炉穴	18
2 壺穴住居跡.....	19
3 土坑.....	23
4 包含層出土土器・土製品.....	23
5 石器・石製品.....	30
第3節 奈良・平安時代.....	33
1 壺穴住居跡.....	33
2 包含層出土土器.....	51
3 石製品.....	51
4 金属製品.....	51
第4節 中・近世.....	52
1 土坑.....	52
2 井戸.....	52
3 柱穴群.....	52
4 溝.....	54
5 遺物.....	54
第3章 まとめ.....	56
第1節 旧石器時代～古墳時代.....	56
第2節 奈良・平安時代以降.....	58
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 調査区と周辺地形	3	第24図 SI001	34
第2図 上・下層確認トレンチ・グリッド配置図	4	第25図 SI002 (1)	35
第3図 上層遺構全体図	5	第26図 SI002 (2)	36
第4図 遺跡の位置と周辺遺跡	8	第27図 SI003	38
第5図 遺跡周辺地形図（明治時代）	11	第28図 SI004 (1)	39
第6図 第1文化層	13	第29図 SI004 (2)	40
第7図 第2文化層	14	第30図 SI005 (1)	41
第8図 第3文化層ブロック遺物分布図	16	第31図 SI005 (2)	42
第9図 第3文化層ブロック出土石器	17	第32図 SI006	43
第10図 SK007・008	18	第33図 SI007	45
第11図 SI009	20	第34図 SI008	46
第12図 SI010	22	第35図 SI011	46
第13図 SI012 (1)	22	第36図 包含層出土奈良・平安時代土器	47
第14図 SI012 (2)	24	第37図 奈良・平安時代石製品	47
第15図 SK005	24	第38図 奈良・平安時代金属製品	47
第16図 包含層出土縄文土器 (1)	26	第39図 SK002~004・006	53
第17図 包含層出土縄文土器 (2)	27	第40図 柱穴群 (SB001)	55
第18図 包含層出土縄文土器 (3)	27	第41図 溝断面	55
第19図 包含層出土縄文土器 (4)	28	第42図 中世遺物	55
第20図 包含層出土縄文土器 (5)	29	第43図 隣接調査区合体図	57
第21図 縄文時代土製品	29	第44図 包含層出土の特殊な附加条縄文 拓影及び 復元原体	58
第22図 縄文時代石器 (1)	31		
第23図 縄文時代石器 (2)	32	第45図 奈良・平安時代土器重量組成グラフ	59

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	9	第4表 奈良・平安時代土製品観察表	50
第2表 旧石器時代石器属性表	17	第5表 奈良・平安時代土器重量組成表	59
第3表 奈良・平安時代土器観察表	48	第6表 奈良・平安時代竪穴住居別土器傾向表	60

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真（1975年撮影）	1 トレンチ（土手、SI001）
図版2 調査前状況（南から）	17 トレンチ（SI005）
調査前状況（北から）	19 トレンチ（SI007）

	10トレンチ (SD001)	調査風景 (1)
図版3	下層第1文化層 (2C-91) (南から) 下層第2文化層 (1B-42) (南から) 下層第3文化層 (4B-22他) (東から)	調査風景 (2) SI006全景 (南から) SI006土層、遺物出土状況 (1)
図版4	SI009、SK007・008全景 (南から) SI009上層遺物出土状況 SI009下層遺物出土状況 SK007炉半裁 (南から) SK008炉半裁 (北西から) SI010全景 (南から)	SI006遺物出土状況 (2) SI006カマド袖断面 SI006カマド掘方 SI007全景 (南から) 図版10 SI007土層、遺物出土状況 SI007カマド袖断面
図版5	SI012全景 (南から) SI012土層、遺物出土状況 SK002全景 (東から) SK005全景 (南東から) SK005遺物出土状況 SI001全景 (南東から) SI001遺物出土状況	SI007カマド掘方 SI008全景 (南西から) SI008遺物出土状況 SI011全景 (南から) SK002・003・004 (南から) SK003・004 (東から) 図版11 SK006全景 (南から)
図版6	SI001炭化物・焼土検出状況 SI001カマド内遺物出土状況 SI002全景 (南から) SI002土層、遺物出土状況 (1) SI002遺物出土状況 (2) SI002カマドA内遺物出土状況 SI002カマドB断面 SI002カマドB内遺物出土状況 SI002カマドB掘方	SK006土層 柱穴群 (SB001) 他 (南から) 溝プラン他 (南から) SD002・003 (トレンチ) SD001・002 (トレンチ) 図版12 旧石器時代石器 (表面) 旧石器時代石器 (裏面) 図版13 遺構出土繩文土器 (1) 遺構出土繩文土器 (2) 図版14 包含層出土繩文土器 (1) 包含層出土繩文土器 (2) 図版15 包含層出土繩文土器 (3) 包含層出土繩文土器 (4) 図版16 包含層出土繩文土器 (5) 繩文時代石器・土製品
図版7	SI003全景 (西から) SI003土層、遺物出土状況 SI003カマド袖断面 SI004全景 (南から) SI004土層、遺物出土状況 SI004カマド内遺物出土状況	図版17 繩文土器、奈良・平安時代土器 (1) 図版18 奈良・平安時代土器 (2) 図版19 奈良・平安時代土器 (3) 図版20 奈良・平安時代土器 (4) 図版21 奈良・平安時代土器 (5) 図版22 奈良・平安時代土製品・石製品・金属製品 中・近世陶磁器類
図版8	SI004カマド袖断面 SI004カマド掘方 SI005全景 (南から) SI005土層、遺物出土状況 (1) SI005遺物出土状況 (2) SI005カマド内遺物出土状況 SI005カマド掘方	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

北千葉広域水道企業団は、千葉県北西部地域の増大する水需要に対応するため、千葉県及び7市2町（その後の合併により現7市）の共同事業による水道用水供給事業体として昭和48年に発足し、北千葉浄水場（松戸市）・北千葉浄水場（流山市）等が建設された。しかし、その後の都市再開発などで更なる需要が見込まれると共に水質の向上を図るために、平成14年に北千葉浄水場敷地内に高度浄水施設の建設が計画された。

高度浄水施設建設にあたり、平成20年7月11日付北水企技第108号で北千葉広域水道企業団企業長より「埋蔵文化財の取り扱いについて」の協議文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では、平成20年7月29日付教文第140号23で、開発区域内の既調査・既掘削範囲を除く範囲の旧石器時代以降遺物包蔵地の協議が必要とする旨の回答を行った。その後、平成21年7月に北千葉広域水道企業団及び流山市教育委員会の立ち会いによる県教育振興部文化財課の試掘踏査を踏まえ、取り扱いについて協議した結果、2,556m²の範囲について事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、財團法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することになった。平成21年11月30日付で平成22年度整理作業を含んだ委託契約が結ばれ、12月に事前の現地協議を行い、発掘調査は平成22年1月～2月に実施した。調査の結果、想定以上の遺構・遺物量であったことから、整理作業は平成22年6月1日付で当初予定の4月～7月から4月～8月までに変更契約し、印刷・刊行は7月20日付で9月～12月までとした別契約（その2）を締結した。

本書で報告する下花輪荒井前遺跡の調査組織及び発掘調査・整理作業の期間・内容・担当者等は、以下のとおりである。

平成21年度 調査研究部長 及川淳一、西部調査事務所長 橋本勝雄

調査期間 平成22年1月6日～2月26日

調査内容 調査対象面積2,556m²

上層確認調査286m²、上層本調査2,556m²

下層確認調査160m²、下層本調査64m²

調査担当者 上席研究員 井上哲朗

平成22年度 調査研究部長 及川淳一、副部長兼整理課長 西川博孝

整理期間 平成22年4月1日～8月31日

整理内容 水洗・注記～原稿執筆・編集、移管整理

整理担当者 上席研究員 井上哲朗

2 調査の方法と成果（第1～3図）

発掘調査

調査に入る前に、休憩用テント・物置・トイレ等の諸施設を1月6日に調査区北東側に設営した。

上層確認調査は、北北東～南南西に長い調査対象範囲に合わせて、主に重機により幅2m・長さ4m～8mのトレンチを掘削した後人力で清掃し、1月中旬にかけて、対象面積2,556m²の内、286m²分を実施した。その結果、調査区北側を中心に縄文時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡9軒をはじめとして、土坑・ピット・溝のプランや遺物が確認され、縄文土器は前期を主体として全城から出土した。溝は中央部で検出されたが、周辺の畑・道路区画に沿う方向であり、一部精査の結果、表土直下の畑造成土が入り込み浅いこと、近世陶磁器が出土したこと等から、近世以降の畑・道に伴うものと判断した。北東側隣接区の昭和47・48年度調査（下花輪第II遺跡）の結果同様、遺構が全体に分布することが想定されたため、千葉県教育委員会と協議の上、調査対象面積全域を本調査範囲とした。

基準点測量は、1月中旬に業者委託で実施した。北千葉浄水場内の基準点から、調査区全体を覆う様に世界測地系のX=-14,050m・Y=6,520mを北西端の基点として20m×20mの方眼を大グリッドとし、南北5列（1～5）100m・東西4列（A～D）80mの20大グリッドを設定した。また、大グリッド内には100分割した2m四方の小グリッドを設定した（第2図）。標高は、北千葉浄水場内で基準とする淀川基準水面（Y.P.）を使用したため、通常の東京湾基準水面（TP）より0.84m高い数値となる。

表土除去は、1月後半に重機により、基本的には調査区南側から北側へ、さらに周囲から北東部にかけて実施し、追いかけるように清掃（鏽簾がけ）によって、遺構プランを検出し精査（本調査）を開始した。遺構番号は、竪穴住居跡SI・土坑SK・溝SD・不明遺構SXとし、精査開始の順番で番号を付したため、南部からほぼ時計回りとなった。排土は調査区に隣接する2か所に搬出した。

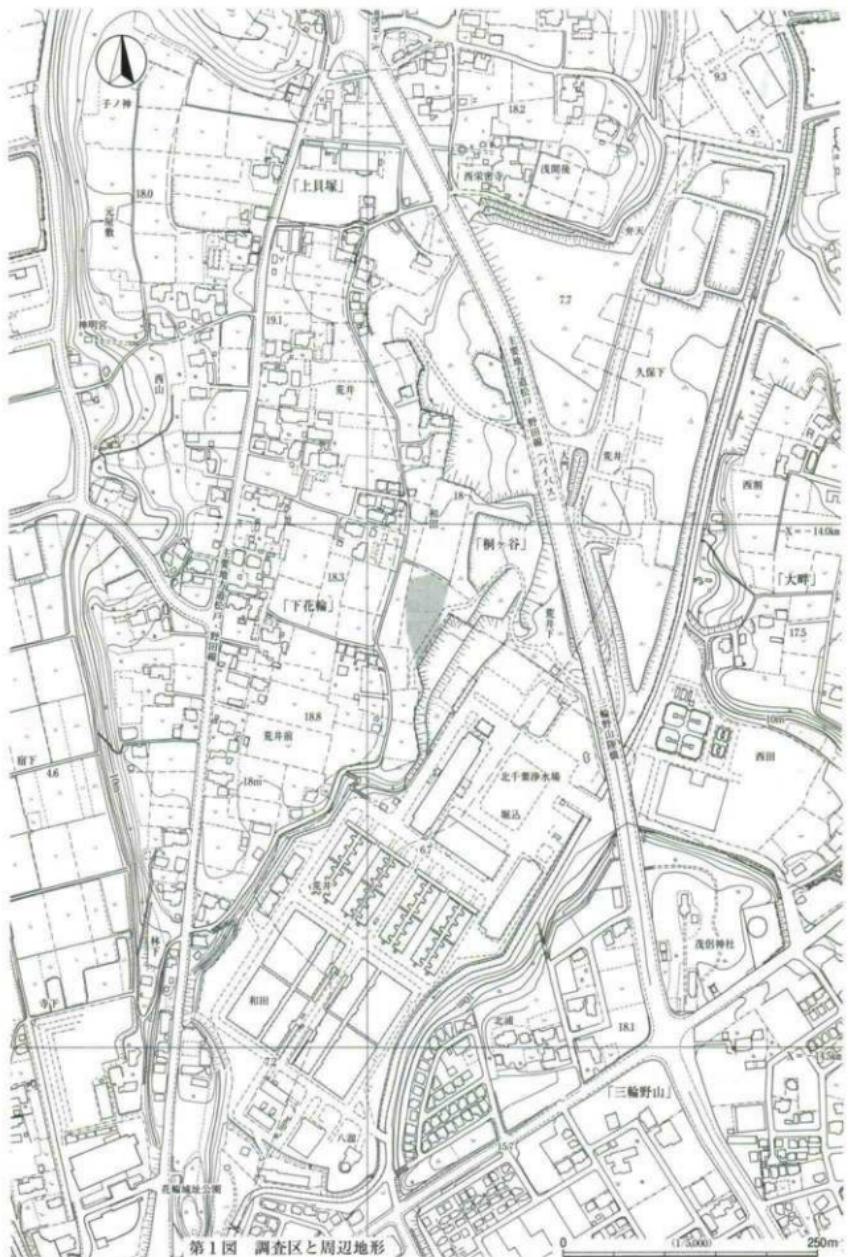
上層本調査は2月末まで実施し、検出された遺構は、縄文時代竪穴住居跡3軒、炉穴2基・土坑3基、奈良・平安時代竪穴住居跡9軒、井戸状遺構1基・土坑2基・柱穴12基であるが、その後の整理作業の中で、遺構時期等の解釈は一部変更となった。

下層確認調査は、1月中旬～2月後半にかけて、上層遺構にかかる箇所では上層確認トレンチ内に設定した2m四方のグリッドを主に、上層本調査と併行して開始した。対象面積の約2%にあたる13か所にグリッドを設定したが、北部と南部の2箇所で旧石器が出土したため、さらに約2%追加して計26か所（約4%）のグリッドを入れた（104m²）。結果、中央部でも出土した。1点のみ出土した北部と中央部の2か所は周辺を若干拡張した（56m²）が石器分布の広がりはなかったため、確認調査段階で終了し、数多く出土した南部の周囲64m²を本調査範囲とした。

調査終了後の埋め戻しの予定は現状復帰であったが、想定以上の遺構数と全域表土除去となつたため排土量が多く、期間・費用等がかかること、調査後の工事はさらなる掘削が予定されていたこと等から、協議の上、2月末に上層遺構・下層グリッド等を上層確認面まで埋め、3月初めに施設等を撤去した。

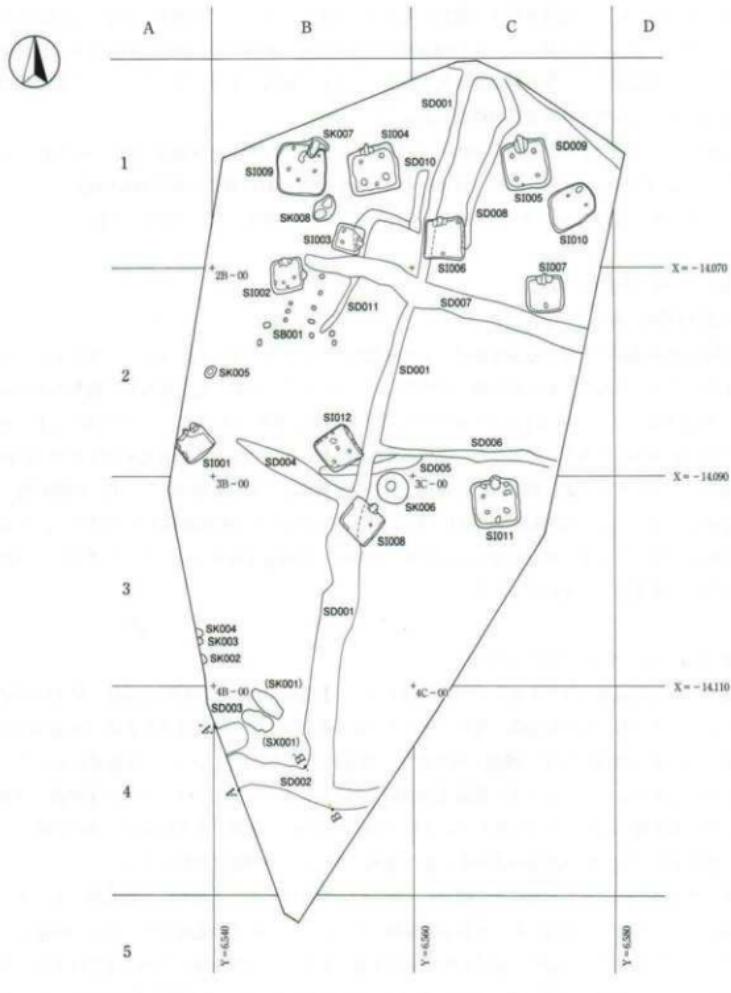
整理作業

作業工程は概ね次のとおりである。4月：水洗・注記・分類・記録整理、5月：遺物接合・復元、6月：遺物実測・トレース・遺構図版、7月：挿図・遺物写真撮影、8月：遺物図版・原稿執筆・移管整理、9月～12月：入稿・校正・印刷。なお、旧石器時代から縄文時代の遺物に関しては、西川博孝整理課長、新田浩三上席研究員他の協力を得た。



第1図 調査区と周辺地形





	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11									
20		22								
30			33							
40				44						
50					55					
60						66				
70							77			
80								88		
90									99	

() = 欠番

0 (1/500) 25m

グリッド凡例

第3図 上層遺構全体図

発掘調査段階で付けた遺構番号は、混乱を避けるため遺物注記をはじめ踏襲したが、整理作業の進捗により、調査時に縄文時代土坑としていたSK001を、隣接する風倒木痕跡SX001と同様のものと判断したことにより両者共次番とし、奈良・平安時代としていた井戸状遺構・土坑・柱穴群を中・近世とした。よって、本書では下記のとおりの遺構の時期・番号とした。

縄文時代：早期炉穴2基（SK007・008）、前期竪穴住居跡3軒（SI009・010・012）、前期土坑（SK005）。

奈良・平安時代：竪穴住居跡9軒（SI001・002・003・004・005・006・007・008・011）。

中・近世：井戸（SK006）、土坑（SK002～004）、柱穴群（SB001）、溝（SD001～011）。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（第4・5図）

下花輪荒井前遺跡の所在する流山市は、千葉県北西部に位置し、東京湾に注ぐ江戸川左岸にあり、対岸は埼玉県である。西側は広大な沖積地（古奥東京湾）が、東側は下総台地と樹枝状に開析された谷津が広がる。本遺跡は、江戸川に北北東から流れ込む支流に台地が開析された北-南西方の谷津（下花輪支谷）と東京低地の間に南方に突出した、幅40m前後・標高18m～19mの舌状台地のやや東寄りに位置し、下花輪支谷を東に見降ろす。谷津内には現在北千葉浄水場施設があり、比高は12m程、西側低地との比高は14m程である。なお、東方約1.5kmには、東に手賀沼に流入する大堀川が開析した谷津、江戸川に流入する坂川が開析した谷津（坂川低地）が入り組んでいる。周辺部は近年、つくばエクスプレスの開通に関連する急激な都市開発が進行中である。

2 歴史的環境（第4・5図、第1表）

周辺で主に発掘調査された遺跡について概観する¹⁾。本遺跡では、主に旧石器時代、縄文時代早・前期、奈良・平安時代、中・近世の遺構・遺物が検出されているので、第4図及び第1表は、前記の時期を含まない遺跡、つまり縄文時代中～晚期、弥生時代、古墳時代のみの遺跡については割愛している。また、図・表中の遺跡番号は、①流山市下花輪支谷周辺、江戸川に面する南方の②三輪野山遺跡群、③加地区・平和台地区遺跡群、④北方の中野久木・富士見台地区、⑤内陸（東側）の青田地区、東初石地区、市野谷地区、野々下地区、⑥坂川流域の古間木・思井地区、⑦松戸市幸田地区の順である。

まず、本遺跡が位置する下花輪支谷周辺の遺跡について概観する。下花輪荒井前遺跡（1）は、今回の調査区の北東に隣接する部分は旧下花輪第Ⅱ遺跡²⁾として、民間企業の宅地造成に伴い、昭和47・48年に調査され、竪穴住居跡（縄文時代前期6軒、晩期1軒、弥生時代後期4軒、古墳時代後期4軒、奈良・平安時代11軒）、中・近世土坑約60基（地下式坑2基・粘土貼土坑2基・方形竪穴遺構か3基等）、井戸2基、奈良・平安時代蔵骨器2基、中・近世溝3条が検出された。縄文土器は、早期茅山式、前期関山式、黒浜式、晩期安行Ⅲ式土器が出土している（第3章まとめ 第43図）。

西側に隣接する下花輪西山遺跡（3）では、中世火葬跡が、北方300mの下花輪第Ⅲ遺跡（現：桐ヶ谷浅間後遺跡（5））³⁾では縄文時代土坑10基が、北方600mの上貝塚貝塚（7）⁴⁾では、旧石器時代Ⅲ層槍先形尖頭器ブロック、縄文時代後晩期貝塚、竪穴住居跡、中・近世土坑群が検出されている。また、下花輪支谷の対岸北東600mの大畔台遺跡（19）⁵⁾では、竪穴住居跡（縄文時代前期黒浜式期1軒、古墳時代前期4軒）、中世地下式坑1基等が検出された。本遺跡の南東対岸に突出する台地上は三輪野山遺跡群（22～

29)⁶⁾で、縄文時代後期の三輪野山貝塚（26）⁷⁾をはじめ、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中世の集落が検出されている。

次に、時代順にやや広域で概観する。旧石器時代は、上貝塚貝塚（7）⁸⁾・若葉台遺跡（14）⁹⁾・桐ヶ谷新田第1遺跡（15）¹⁰⁾・三輪野山北浦遺跡（22）¹¹⁾・三輪野山貝塚（26）・加地区遺跡群（30～34）¹²⁾・西初石五丁目遺跡（66）・市野谷遺跡群（68～70・72・76）¹³⁾・思井堀ノ内遺跡（93）¹⁴⁾等で石器が出土している。上貝塚遺跡では7ブロック、三輪野山北浦遺跡では6ブロックがⅢ層～Ⅶ層にかけて検出された。

縄文時代は、貝塚や集落が数多く検出されている。早期は、桐ヶ谷南割遺跡（8）¹⁵⁾・三輪野山北浦遺跡（22）・三輪野山第Ⅲ遺跡（23）¹⁶⁾・三輪野山道六神前遺跡（25）¹⁷⁾・三輪野山八重塚（28）¹⁸⁾・加地区遺跡群（30～34）・宮本遺跡（41）等で、撫糸文系・沈線文系・条痕文系土器が出土しており、三輪野山遺跡群や加地区群では炉穴が多く検出されている。前期は、縄文海進によって奥東京湾が形成されたが、特に黒浜式土器及び集落が殆どの遺跡から、地点貝塚も若葉台遺跡（14）・三輪野山北浦遺跡（22）で検出されており、同型式期の集中地域である。また、松戸市幸田貝塚（95）¹⁹⁾は関山式期の集落が検出されている。中～晚期の遺跡は減少するが、中野久木谷頭遺跡（52の東側）²⁰⁾では中期後半の大規模な環状集落、後期は花山東遺跡（18）で集落、上新宿貝塚（13の北側）²¹⁾・三輪野山貝塚（26）は後期の集落及び馬蹄形貝塚、三輪野山貝塚では晚期集落が検出されている。

弥生時代の遺跡の分布は稀薄であるが、三輪野山北浦遺跡（旧三輪野山第Ⅱ遺跡）（22）で中期須和田式土器、北東に隣接する下花輪第Ⅱ（現：下花輪荒井前）遺跡・加村台遺跡（35）²²⁾で宮ノ台式期の住居跡が検出されている。

古墳時代は、前期から中期では大畔台遺跡（19）・三輪野山第Ⅲ遺跡（23）・三輪野山北浦遺跡（22）・市野谷宮尻遺跡（68）²³⁾・市野谷入台遺跡（69）²⁴⁾・市野谷向山遺跡（76）等、後期では分布域が広がり、下花輪第Ⅱ遺跡・三輪野山遺跡群・加町畑遺跡（34）²⁵⁾・加村台遺跡（35）・前平井堀米遺跡（40）・西平井二階畑遺跡（46）等で集落が検出されている。なお、古墳の分布は稀薄である。

奈良・平安時代は、遺跡数が増大し分布も広がり、沖積地や谷津の出口付近に面した多くの台地縁辺部で集落が検出されている。特に、加地区遺跡群（30～34）や思井堀ノ内遺跡（93）等、本遺跡より南から坂川下流域にかけて大規模集落が多く、加地区遺跡群では古墳時代後期から10世紀初頭の土器編年が試みられている。また、三輪野山地区には式内社に比定される茂呂神社が、平和台地区（市役所周辺）には下総国分寺と同系瓦を出土する流山廢寺（43）が存在する。

中世は、市野谷入台遺跡で竪穴建物跡が、思井堀ノ内遺跡（93）²⁶⁾では13世紀～14世紀の在地領主層の館や方形周溝区画墓が検出されている。後期は、近辺では下花輪第Ⅱ遺跡で土坑群、下花輪西山遺跡（3）で火葬跡、上貝塚貝塚で中・近世土坑墓、大畔台遺跡で地下式坑等が検出されている他、本遺跡の立地する台地先端部には花輪城跡（4）²⁷⁾が存在する。地下式坑・掘立柱建物・土坑群を伴う台地整形区画は、三輪野山第Ⅲ遺跡（23）・三輪野山宮前遺跡（24）・加町畑遺跡（34）・前平井遺跡（39）・前平井堀米遺跡（40）・中中ノ台遺跡（45）・西平井二階畑遺跡（46）²⁸⁾・西平井根郷遺跡（47）²⁹⁾・市野谷宮後遺跡（24）・中中屋敷遺跡（89）・思井上ノ内遺跡（92）・思井堀ノ内遺跡（93）等と、奈良・平安時代同様の地域でみられるが、特に西平井地区から思井地区に集中する。なお、千葉県内でも地下式坑が集中する地域で、特にT字型が多い点、原始・古代以来、武藏国方面との関係が強く想定される地域である。

近世は、明治期の迅速図に集落等が表示されていることからも、発掘された集落は図表には入れていな



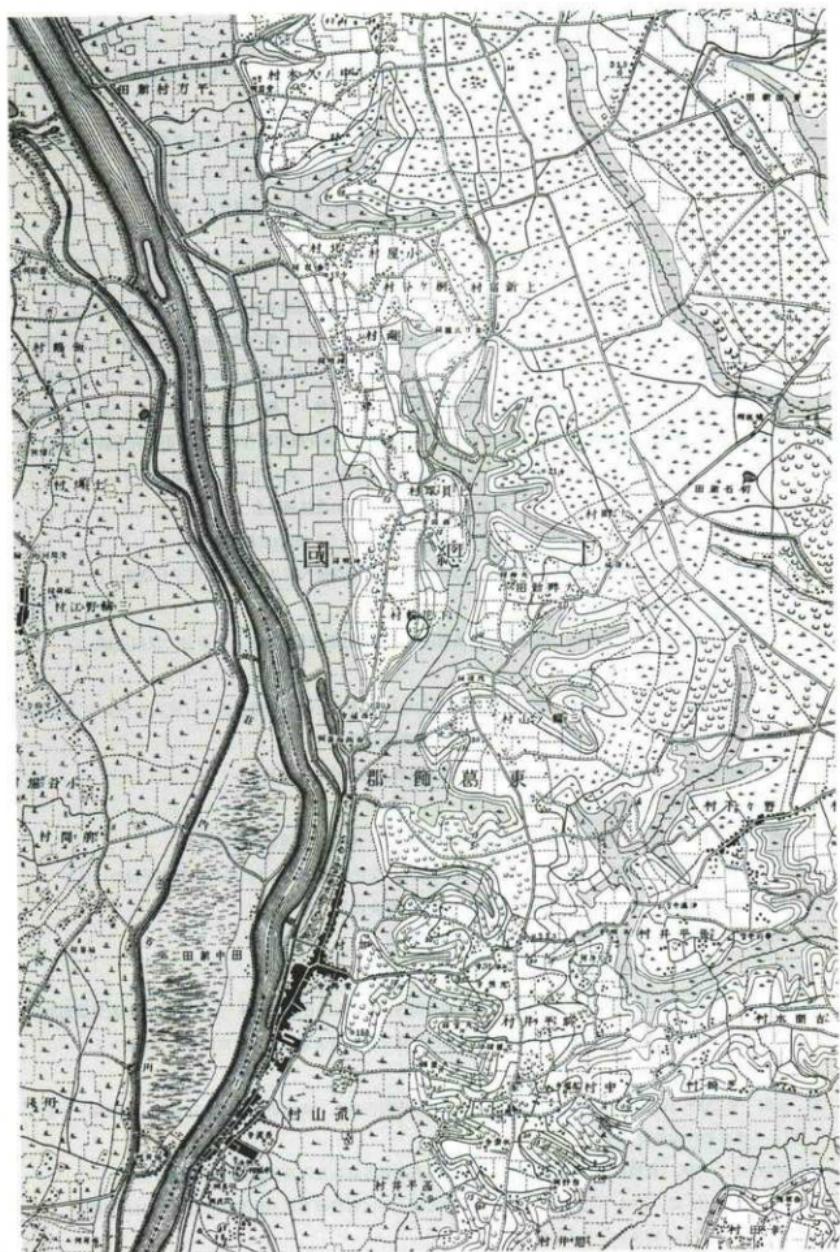
第4図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/25,000)

第1表 周辺跡遺跡一覧表（太字は一部発掘調査済。旧石器、縄文早・前期、奈良、平安、中世、近世（城、塚等））

番号	場所	遺跡名	主な時代	主な遺構／遺物等
1	武山市29	下花輪荒井道跡 (旧下花輪第Ⅱ)	旧石器、縄文(早~晩)、弥生(後)、古墳(後)、奈良、平安	住居(縄文前、晩、弥生後、古墳後、奈良・平)、縄文炉穴、中世土坑群/縄文土器(燃系文、黒浜、開山・黒浜、加曾利E、安行Ⅰ)
2	150	下花輪荒井道跡	縄文(中・後)、平安	縄文土器(加曾利E、安行Ⅰ・Ⅱ)
3	209	下花輪西山道路	縄文、古墳、平安、中世	住居(古墳、平安)、中世火葬跡
4	88	花輪城跡	中世	曲輪、土堀、空堀
5	28	側ヶ谷南側後遺跡 (旧上花輪第Ⅲ)	旧石器、縄文、平安	縄文土器(黒浜、加曾利E)
6	27	上貝冢大門道跡	縄文(前・施)、平安	縄文土器(黒浜、塙之内)
7	26	上貝塙貝塙	旧石器、縄文(後~晩)、中・近世	貝塙、住居、中・近世土坑墓/縄文土器(奈良文、黒浜・浮島・諸説、加曾利E、称名寺・塙之内、加曾利B、曾谷、安行Ⅰ・Ⅱ、安行Ⅲ・千綱)、板碑
8	24	側ヶ谷南側道跡 (旧上貝塙貝塙)	旧石器、縄文(早~中・後・晩)、古墳(後)、平安、中・近世	住居(縄文前、古墳後)/縄文土器(夏島・三戸、黒浜、加曾利E、安行Ⅰ・Ⅲ、千綱)、板碑
9	131	小屋南側道跡	縄文(中・後)、平安	縄文土器(加曾利E、安行Ⅰ)
10	126	北南側道跡	縄文(中・後)、平安	縄文土器(加曾利E、加曾利B、千綱)
11	125	北大久保道跡	縄文、古墳、平安	
12	127	上新宿後遺跡	縄文(前・施)、平安	縄文土器(黒浜、加曾利E)
13	129	上新宿向宿道跡	縄文(前・中)	縄文土器(黒浜、加曾利E)
14	130	若葉台遺跡	旧石器、縄文(前・中)	縄文土器(黒浜、加曾利E)
15	135	側ヶ谷新田第Ⅰ道跡	旧石器、縄文、平安	野馬塙
16	195	西御石三丁目道跡	縄文(前~晩)	住居/縄文土器(黒浜、安行Ⅲ)
17	136	西御石桜塚道跡	縄文(前~後)	卯穴、野馬塙/縄文土器(黒浜、加曾利E、称名寺)
18	203	花山東	旧石器、縄文、奈良、平安	卯穴
19	80	大町台道跡	縄文(前)、古墳(前)、中世	住居(縄文前、古墳前)、中世地下式坑道/縄文土器(黒浜)
20	152	大町中ノ前道跡	縄文(早・前)、中世	縄文土器(茅草、黒浜・浮島、加曾利E)
21	151	大町西側道跡	縄文(早・中)、古墳(後)、平安	縄文土器(茅草、加曾利E)
22	78	三輪山北道跡 (旧三輪山第Ⅱ)	旧石器、縄文(早~後)、古墳(前~後)、奈良、平安	住居(縄文前、古墳前、後、奈・平)、中世地下式坑道/縄文土器(北綾文・奈良文、黒浜(主)、諸説、浮島、溝跡、五箇合子、下小野・阿玉台、加曾利E、称名寺・加曾利B、安行Ⅱ)
23	29	三輪野山第Ⅲ道跡	縄文(早~後)、古墳(前・後)、奈良、平安、中・近世	住居(縄文早・古墳前後、奈良・平安)、卯穴、中・近世台地整形区画/縄文土器(奈良文(主)、黒浜、称名寺)
24	154	三輪野山宮前道跡	縄文(前・施)、平安、中・近世	住居(縄文前、後、奈・平)、窯冶跡、中世台地整形区画(地下式坑、火葬跡) / 縄文土器(奈良文、黒浜(主)、諸説、浮島、加曾利E、称名寺・卯穴、安行Ⅰ)
25	211	三輪野山道六津道跡	縄文(早・前・後)、古墳(前)、奈良、平安	住居(縄文早・後、古墳前、奈・平) / 縄文土器(黒浜・諸説、称名寺)
26	31	三輪野山貝塙	旧石器、縄文(後~晩)、中・近世	馬鹿形貝塙(縄文後)、住居(縄文後・晩)、卯穴、縄文土器(早世、称名寺・塙之内・加曾利B、安行Ⅰ・Ⅲ、安行Ⅳ)
27	153	三輪野山八幡前道跡	縄文(前・後)、平安	住居(縄文前・後、平安)、卯穴、縄文(黒浜・諸説、浮島、溝跡、加曾利B)
28	185	三輪野山八幡塙	縄文(早~後)、古墳(後)	縄文穴、住居(古墳後)/縄文土器(奈良文(主)、開山・黒浜・浮島・諸説、加曾利E、安行Ⅰ・Ⅱ)
29	197	三輪山八幡塙第Ⅲ道跡	縄文(早)、平安	住居、卯穴、縄文土器(野鳥)
30	188	加北谷津第Ⅰ道跡	旧石器、縄文(早~後)、奈良、平安	住居(縄文前・後、奈・平)、卯穴、縄文土器(燃系文、奈良文、黒浜・諸説、浮島、加曾利E、称名寺・加曾利B)
31	189	加北谷津第Ⅱ道跡	旧石器、縄文(早・前・後)、奈良、平安	縄文土器(燃系文・奈良文、開山・黒浜・諸説、浮島・溝跡、加曾利E)
32	187	加若宮第Ⅰ道跡	旧石器、縄文(早~後)、奈良、平安	縄文穴、住居(奈・平) / 縄文土器(奈良文、黒浜・浮島、称名寺)
33	190	加若宮第Ⅱ道跡	旧石器、縄文(早~後)、奈良、平安	縄文穴、住居(奈・平) / 縄文土器(燃系文、奈良文、黒浜・浮島、阿玉台、称名寺・加曾利E、飛鳥)
34	186	加町領道跡	旧石器、縄文(早~後)、古墳(後)、奈良、平安、中・近世	住居(縄文前、古墳後、奈・平)、縄文穴、中・近世地下式坑等集落/縄文土器(奈良文、黒浜、称名寺・塙之内)
35	90	加村台道跡	弥生(中)、古墳(後)、平安、近世	住居(弥生、古墳後、奈・平)、近世本多源陣跡
36	212	加野谷地塙谷ノ道跡	縄文(前)、奈良、平安、中・近世	住居(奈・平)、地下式坑柱、等、野馬塙
37	215	市野谷地塙谷ノ道跡	古墳(後)、平安	住居
38	225	後平中道道路	古墳(後)、奈良、平安、中世	住居(奈・平)、中世漢他
39	32	前平舟塙跡	縄文(前・中)、平安、中世	住居(古墳前・後、奈・平)、中世台地整形区画(掘立柱建物・地下式坑) / 縄文土器(燃系文、溝跡、加曾利E)
40	226	前平舟塙米道跡	古墳(後)、奈良、平安、中世	住居(古墳前・後、奈・平)、中世台地整形区画(地下式坑) / 縄文土器(田戸下層)
41	204	宮本遺跡	縄文(早)、平安	住居、卯穴、縄文土器(茅山)
42	184	大原野北道跡	縄文(早)、古墳(後)、平安	住居(古墳後、奈・平)、縄文土器(田戸下層)
43	47	瀬山寺道跡	奈良	軒瓦
44	170	平和台跡	縄文(中)、古墳(平安、中・近世	住居、卯穴、火葬跡、諸治跡/縄文土器(阿玉台・加曾利E)
45	168	中ノ台道跡	奈良、平安、中・近世	住居(奈・平)、中世台地整形区画(地下式坑、土坑墓)
46	228	西平舟・船塙道跡	縄文、古墳(後)、奈良、平安、中世	住居(古墳後、奈・平)、中世台地整形区画(地下式坑)
47	207	西平舟根原道跡	古墳、平安、中世	住居(平安)、中世台地整形区画(掘立柱建物・地下式坑、土坑墓) / 和銅、短刀、板碑

番号	縣分布図 番号	遺跡名	主な時代	主な遺構／遺物等
48	115	中野久木日暮第3遺跡	古墳（後）, 平安	
49	17	中野久木貝塚	縄文（早・前・中）	縄文土器（黒浜・加曾利E・称名寺）
50	198	美原二丁目遺跡	縄文（前・中）	縄文土器（関山・加曾利E）
51	123	中野久木西ノ内遺跡	縄文（前・中）, 平成	
52	18	中野久木道路	縄文（早・前・中・後）, 古墳（中）	住居, 円形周溝墓
53	139	中野久木糸の台遺跡	縄文（前・中・後）	
54	20	富士見台第8遺跡	奈良・平安	住居, 積鍵炉
55	132	北瀬御前塚跡	縄文（早・前・後）, 平安	
56	201	小屋神明脇道路	縄文（前・後）	
57	124	北京山跡	縄文（中・後）, 平成	
58	21	小谷貝塚	縄文（中）, 平成	縄文土器（加曾利E）
59	116	貴田第3遺跡	平安	
60	117	貴田第2遺跡	縄文（中）, 平成	縄文土器（阿玉台・加曾利E）
61	120	東柳石三丁目第5遺跡	縄文（早）, 古墳（後）, 平成	縄文土器（夏島）
62	121	東柳石三丁目第5遺跡	縄文（早）, 平成	縄文土器（加曾利E）
63	122	十六夫第2遺跡	縄文（前）, 平成	縄文土器（浮島）
64	145	十六夫第1遺跡	縄文（中・後）, 平成	縄文土器（加曾利E・安行1）
65	147	東柳石六丁目第5遺跡	旧石器, 縄文（後）	
66	202	西御石五丁目遺跡	旧石器, 縄文（早・後）, 古墳（前）	住居（繩文前・古墳前）／縄文土器（奈良文・黒浜・浮島・興洋・下小野・阿玉台・加曾利E・称名寺・城之内・安行1・II・安行2）
67	208	三輪山向原古墳	縄文（前）, 弥生・古墳（後）	穴宍, 方墳
68	218	市野谷宮尻遺跡	旧石器, 縄文（早・後）, 古墳（前）	住居（繩文前・古墳前）／縄文土器（田戸下層・黒浜・諸穂・浮島・興洋・下小野・五箇ヶ台・加曾利E）
69	210	市野谷入台遺跡	旧石器, 縄文（前・後）, 古墳（前・中）, 余基・平安・中世	住居（繩文後・古墳前）, 余基（平）, 中世窓穴建物／縄文土器（前期初頭・黒浜・興洋・加曾利E・称名寺・城之内・加曾利E・安行・城院安行）
70	219	市野谷幸久保遺跡	旧石器, 縄文（早）, 中・近世	中世窓穴建物／縄文土器（茅山）, 中世灰骨
71	221	大久保遺跡	縄文（前）	縄文土器（黒浜）
72	222	市野谷・坂元遺跡	旧石器, 縄文（早・後）, 中世	住居（繩文前・後）, 中世地下式坑道／縄文土器（黒文（主）・関山・浮島・黒浜・加曾利E・称名寺・城之内・加曾利E・寛永）
73	223	市野谷立野遺跡	旧石器, 縄文（前）, 古墳（後）	縄文土器（黒浜）
74	220	市野谷立野後遺跡	縄文, 古墳, 中世	住居（古墳前）, 中世台形整形区画
75	156	市野谷中島遺跡	旧石器, 縄文（前・中）, 平成	縄文土器（黒浜・加曾利E）
76	39	市野谷立野遺跡	旧石器, 縄文（前・中）, 古墳（前・中）	住居（古墳前・中・平安）／縄文土器（黒浜・加曾利E）
77	40	市野谷柄内第1遺跡	縄文（前・中）, 古墳（中・後）	縄文土器（黒浜・加曾利E）
78	81	野々下貝塚	縄文（前・中・後）	地点点塗, 白居
79	41	野々下山中道跡	縄文（前）, 平成	縄文土器（黒浜）
80	42	野々下方道跡	縄文（前・中）	縄文土器（黒浜・加曾利E）
81	43	野々下大屋敷遺跡	縄文（後）, 平成	住居（奈・平）, 中世地下式坑道／縄文土器（安行1・II）
82	44	野々下相模第1遺跡	平安	
83	45	野々下相模第2遺跡	古墳（後）, 平成	
84	160	古岡本芳賀殿第3遺跡	古墳（前・後）, 平成	住居（古墳前・後）
85	158	古岡本芳賀殿第1遺跡	縄文（前・中）, 平成	縄文土器（黒浜・加曾利E）
86	214	古岡本寺塚	近世	塚
87	159	芝崎大園跡	縄文（前・中）, 古墳, 平成	縄文土器（黒浜・浮島・加曾利E）
88	36	古岡本山王第1遺跡	縄文（前）, 平成	縄文土器（浮島）
89	167	中中屋敷遺跡	縄文（前・中・後）, 平成	中世台形整形区画（池下式坑・土蔵跡）／縄文土器（黒浜・阿玉台・称名寺）
90	216	中中屋敷塚	近世	塚
91	191	古岡本第1塚	近世	塚
92	229	恩井上ノ内遺跡	古墳（前）, 奈良・平安, 中世	住居（奈・平）, 中世台形整形区画（火葬墓）
93	169	恩井上ノ内遺跡	旧石器, 縄文（早・後）, 古墳, 中世	住居（繩文早・前・奈・平）, 中世貯蔵・方形容積区画・台地整形区画／縄文土器（黒文・沈縄文・奈良文・関山・黒浜・諸穂・浮島・興洋・加曾利E・称名寺・城之内・加曾利E）
94	193	恩井上ノ内遺跡	縄文（早・前）, 古墳, 近世	塚, 縄文土器（茅山・浮島）
95	松戸市1	幸田貝塚	旧石器, 縄文（前・中・後）, 古墳	馬蹄形貝塚, 住居, 穴宍, 方形容積土器（田戸下層・茅山1・茅山・花枝下層・木島・関山・黒浜・浮島・阿玉台・加曾利E・城之内・安行1・II）

いが、野馬土手はラインで表示した。坂川下流域には塚が点在し、加村台遺跡内の市役所周辺地区は本多藩陣屋³¹⁾が比定されている。



第5図 遺跡周辺地形図（明治時代）(1/25,000)

- 注1 遺跡の概要は、下記の発掘調査報告書等によるが、特に注のない遺跡については、千葉県教育委員会
1997『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）－』及び千葉県教育庁生涯学習部
(現：教育振興部) 文化財課「千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報」等による。
- 2 下津谷達男 他 1973『流山市大畔台・下花輪第二遺跡調査概報』下花輪第二遺跡調査団、瓦吹 堅 1988
「下花輪第二遺跡」「東葛上代文化の研究」古宮・下津谷両先生還暦記念祝賀事業実行委員会
- 3, 4, 8, 11, 16 岡田光広 他 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』
(財) 千葉県文化財センター
- 5 注2の下津谷達男 他 1973に同じ。
- 6 小栗信一郎 1989『千葉県流山市三輪野山遺跡群－昭和63年度確認調査概報－』流山市教育委員会 他
- 7 大内千年 2001『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書－流山市三輪野山貝塚・宮前・
道六神・八幡前－』(財) 千葉県文化財センター、今泉 肇 2004『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵
文化財調査報告書（2）－流山市三輪野山貝塚・三輪野山宮前遺跡・三輪野山八幡前遺跡－』(財) 千葉県文
化財センター、小栗信一郎 他 2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』流山市教育委員会 他
- 9 田村 陸 他 1986『常磐自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書V』(財) 千葉県文化財センター
- 10 朝比奈竹男 1979『千葉県流山市桐ヶ谷新田遺跡』桐ヶ谷新田遺跡調査会
- 12, 26 増崎勝仁・川根正教 他 1989～2000『加地区遺跡群I～IV』流山市教育委員会
- 13 栗田則久・木島桂子 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2－西初石五丁目遺跡－』
(財) 千葉県教育振興財団
- 14 伊藤智樹・新田浩三 他 2009『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4－市野谷二反田遺跡－』
(財) 千葉県教育振興財団 他
- 15 伊藤智樹・栗田則久 他 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2－流山市思井堀ノ内遺跡
(旧石器時代～奈良・平安時代編)－』(財) 千葉県教育振興財団
- 17 宇佐美義春 他 1988『千葉県流山市三輪野山第Ⅲ遺跡』流山市教育委員会
- 18 注7の大内千年 2001 に同じ。
- 19 増崎勝仁 他 1982『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡』三輪野山八重塚遺跡調査会
- 20 八幡一郎 他 1971『幸田貝塚第1次調査概報』『松戸市文化財調査小報4』松戸市教育委員会 他
- 21 川根正教 1989『中野久木谷頭遺跡B地点』流山市教育委員会 他
- 22 岡田光広 1995『流山上新宿遺跡』千葉県教育委員会
- 23, 29, 31 下津谷達男 他 1978『加村台遺跡』流山市教育委員会
- 24 栗田則久 2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書1－市野谷宮尻遺跡－』(財) 千葉県教育振興財団
- 25 伊藤智樹・新田浩三 他 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3－市野谷入台遺跡－』
(財) 千葉県教育振興財団
- 27 天野 努 2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1－流山市思井堀ノ内遺跡（中世編）－』
(財) 千葉県教育振興財団
- 28 増崎勝仁 1996『花輪城跡』『平成7年度流山市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 29, 30 北澤 滋 他 2004『流山市西平井・鰐ヶ崎地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査概報1』
流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室 他

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代

Ⅸ層からⅢ層にかけて3枚の文化層が確認され、石器総点数は24点である。

第1文化層は、第1ブロックが相当し、Ⅸ層に生活面をもつ。単独出土である。

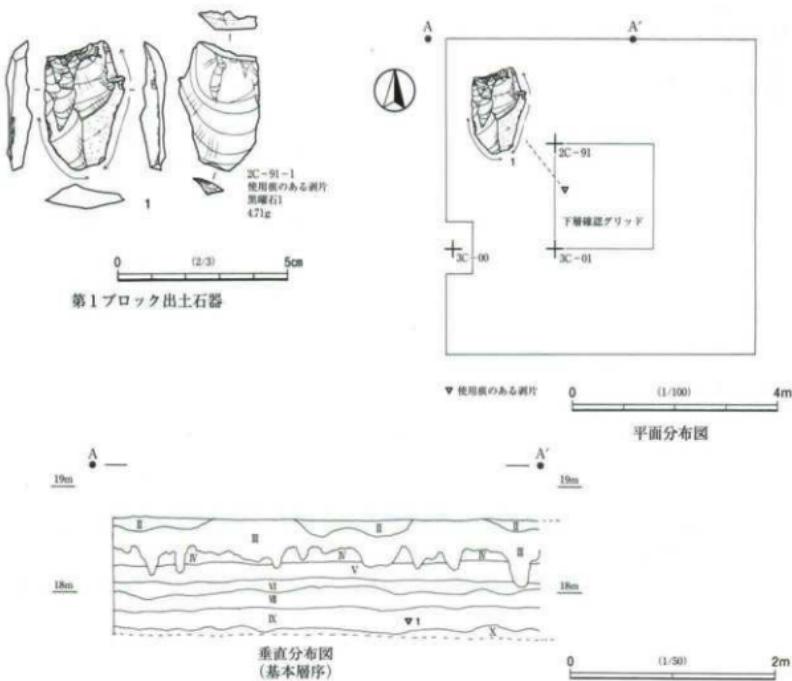
第2文化層は、第2ブロックが相当し、Ⅳ層下部～V層に生活面を持つ。単独出土である。

第3文化層は、第3ブロックが相当し、Ⅲ層に生活面をもつ。総計22点出土した。

基本層序は第6・7図のとおりである。Ⅱ層は新期テフラ層である。Ⅲ層はソフトローム層である。下部に向かってソフト化が進行している。Ⅳ層はハードローム層である。V層は第1黒色帶である。VI層はAT（姶良丹沢火山灰）がブロック状に含まれる。VII層は第2黒色帶上部である。Ⅷ層は第2黒色帶下部である。IX層を細分することは出来なかった。X層は立川ローム層の最下層である。

第1文化層（第6図、第2表、図版3・12）

単独出土であるが、出土層位が明確であるため、第1文化層として捉えた。調査区の中央部の2C-91



第6図 第1文化層

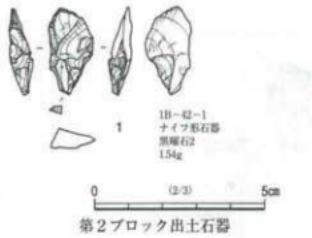
グリッドから単独出土した。確認調査グリッドで出土したため周囲を拡張したが、周辺からは石器は出土しなかったため、確認調査で終了した。出土層位はⅤ層である。

1は使用痕のある剥片である。半透明で夾雜物が少ない良質な黒曜石が用いられている。打面と背面右下部に自然面が残されている。おそらく角礫状の母岩が用いられていると思われる。頭部調整が入念に施され、本資料を含む縦長剥片を数枚剥離している。右側縁と左側縁下半に微細剥離痕が観察される。末端部は折れているが、折れた後にも微細剥離痕がみられる。

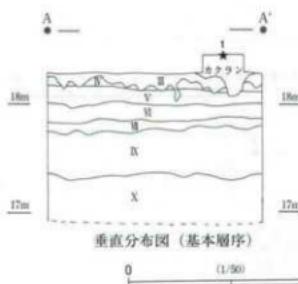
第2文化層（第7図、第2表、図版3・12）

単独出土であるが、切出形の形態をしたナイフ形石器であることから、第2文化層として捉えた。調査区の北西部のIB-42グリッドから出土した。確認調査で出土したため周囲を拡張したが、周辺からは石器は出土しなかったため、確認調査で終了した。擾乱層からの出土であるが、本地域周辺で出土しているナイフ形石器の類例から、推定生活面をⅣ層下部からⅤ層と捉えた。

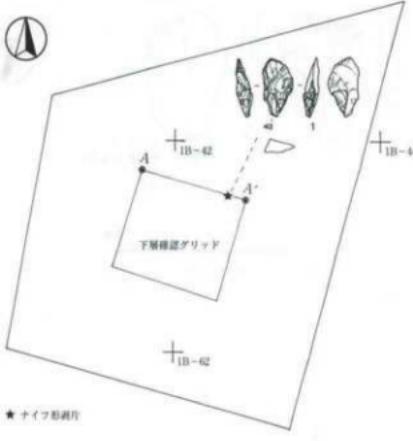
1はナイフ形石器である。不透明で夾雜物を多く含む漆黒の黒曜石が用いられている。幅広の剥片を素材として、素材を横位に用いて左側縁と右側縁下部に急角度のプランティング加工が施されている。切出形の形態を呈する。



第2ブロック出土石器



垂直分布図（基本層序）



平面分布図

第7図 第2文化層

第3文化層（第8・9図、第2表、図版3・12）

総計22点出土した。器種組成は、二次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片1点、剥片17点、碎片1点、礫1点である。石材組成は、玉髓（メノウ含む）10点、頁岩8点、チャート2点、珪質頁岩1点、砂岩1点である。出土層位はⅢ層上部である。

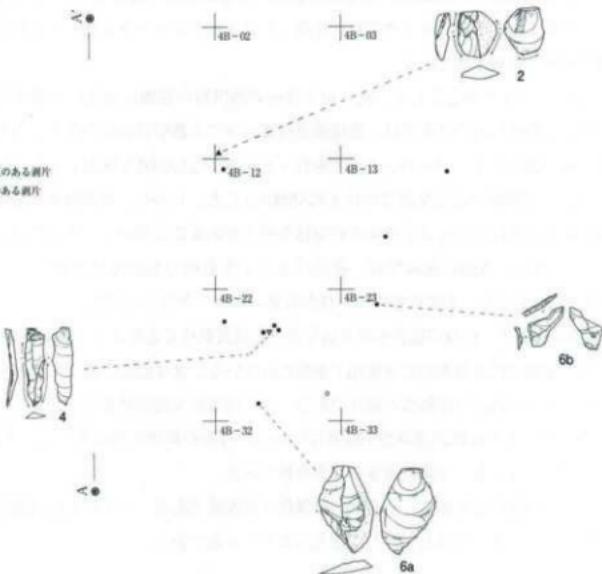
調査区南部の4B-22グリッドを中心として、約4m×3mの梢円形の範囲に散漫に分布する。上層確認トレンチとそれにかかった落ち込み2か所は、遺構確認面清掃中に土器や旧石器が出土したため精査を実施したが、壁面の凹凸が激しくオーバーハンプする形状・覆土等からSX001を風倒木とし、凹凸がやや少なく、縄文土器が出土した隣接する穴を縄文時代土坑SK001とした。しかし、整理段階でSK001覆土に奈良・平安時代土師器片が含まれていたことや両者が同様な覆土であること等から、本書ではこれらの落ち込みを欠番とした。ただし、本節の記載では、攪乱出土を示す意味でも記号は踏襲し、トレンチやSX001・SK001から出土したもの、石器の形態や石材から第3ブロックとして捉えた。

1は、打面調整が入念に施され、石核の底面を取り込むような縦長剥片を素材としている。側面は「し」の字状の形状を呈する。末端部に背腹両面に調整加工が施されている。2は幅広の剥片を素材として左側線部に調整加工が施されている。3は幅広の剥片である。2と同様に末端が蝶番状の形状を呈する。4は使用痕のある剥片である。4・5は頭部調整が顕著に行われ、打面が線状の形状を呈し、側面は「し」の字状の形状を呈する。6（a+b）は縦長剥片の接合資料である。

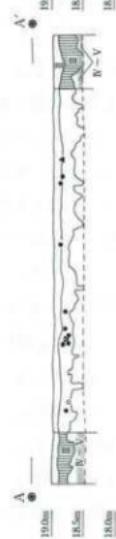
定型的な製品が出土していないことから、石器群の位置付けは困難である。いずれも打面幅が狭いことが特徴としてあげられる。1・4・5は石刃として捉えることも可能である。



- ▲ 二次加工のある調片
- ▼ 使用痕のある調片
- 調片
- 磨

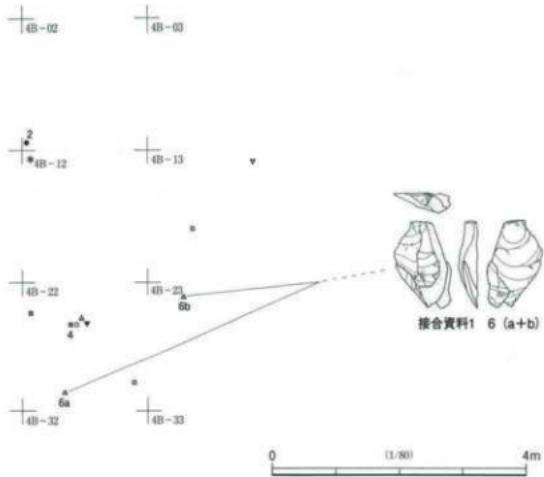


〈器種別分布〉

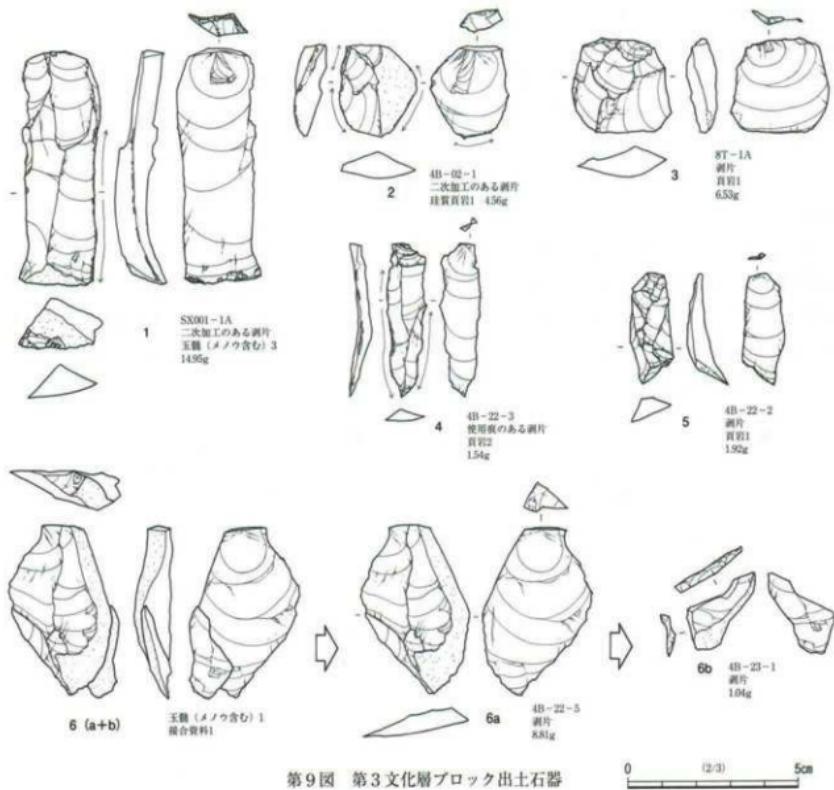


〈母岩別分布〉

- 植質貝1
- チャート1
- ▲ 玉器（メノウ含む）1
- ▼ 玉器（メノウ含む）2
- ▼ 玉器（メノウ含む）3
- 貝1
- 貝2
- 貝3
- 貝4



第8図 第3文化層ブロック遺物分布図



第9図 第3文化層ブロック出土石器

第2表 旧石器時代石器属性表

文化層	確定生息面	ブロック	採取番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	重量(g)	標高	備考
1	瓦層		1	1	2C-91	0001	使用痕のある剥片	黒曜石	1	4.71	17.692	単塊出土
2	瓦下部～V層	2	1	1B-42	0003	ナイフ形石器	黒曜石		2	1.54	18.432	単塊出土
3	瓦層	3	2	4B-02	0001	二次加工のある剥片	珪質頁岩	1		4.56	18.773	
3	瓦層	3	3	4B-12	0001	剥片	チャート	1		1.19	18.736	
3	瓦層	3	4B-13	0001	剥片	玉髓(メノウ含む)	2			0.51	18.825	
3	瓦層	3	4B-13	0002	剥片	頁岩	3			0.74	18.776	
3	瓦層	3	4B-22	0001	剥片	頁岩	1			0.24	18.735	
3	瓦層	3	4B-22	0002	剥片	頁岩	1			1.92	18.755	
3	瓦層	3	4	4B-22	0003	使用痕のある剥片	頁岩	2		1.54	18.752	
3	瓦層	3	4B-22	0004	剥片	玉髓(メノウ含む)	5			0.87	18.750	
3	瓦層	3	4B-22	0005	剥片	玉髓(メノウ含む)	1	1		0.81	18.750	
3	瓦層	3	4B-22	0006	剥片	砂岩	1			2.24	18.765	
3	瓦層	3	4B-22	0007	剥片	玉髓(メノウ含む)	1			0.73	18.712	
3	瓦層	3	6b	4B-23	0001	剥片	玉髓(メノウ含む)	1	1	1.04	18.780	
3	瓦層	3	3	8T-1	0001A	剥片	頁岩	1		6.53		確認トレンチから出土
3	瓦層	3	8T-1	0001B	剥片	玉髓(メノウ含む)	2			2.64		確認トレンチから出土
3	瓦層	3	8T-1	0001C	剥片	頁岩	1			0.93		確認トレンチから出土
3	瓦層	3	8T-1	0001D	砂片	頁岩	1			0.07		確認トレンチから出土
3	瓦層	3	SK001	0001A	二次加工のある剥片	玉髓(メノウ含む)	3			14.95		側本塁から出土
3	瓦層	3	SK001	0001B	剥片	玉髓(メノウ含む)	4			0.80		側本塁から出土
3	瓦層	3	SK001	0001C	剥片	玉髓(メノウ含む)	1			0.97		側本塁から出土
3	瓦層	3	SK001	0001A	剥片	チャート	2			1.47		側本塁から出土
3	瓦層	3	SK001	0001B	剥片	玉髓(メノウ含む)	4			0.29		側本塁から出土
3	瓦層	3	SK001	0001C	剥片	頁岩	1			0.20		側本塁から出土

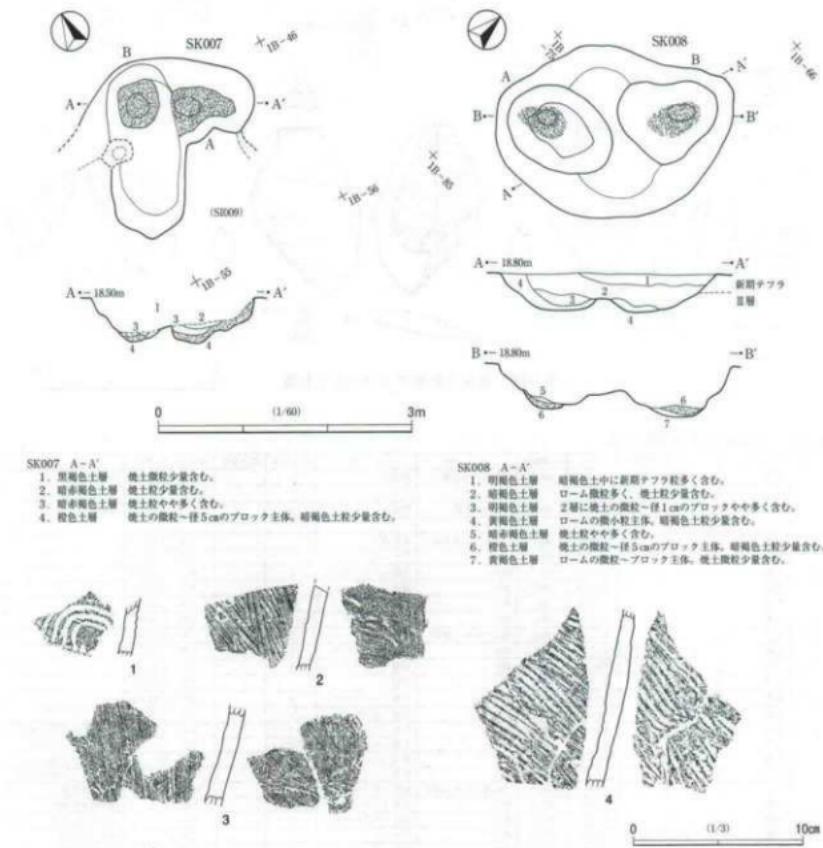
第2節 繩文時代

繩文時代の遺構は、早期炉穴2基、前期竪穴住居跡3軒、前期土坑1基である。調査区南部で検出され土坑としていたSK001は隣接するSX001と共に風倒木と判断したため、欠番とした。

1 炉穴

SK007 (第10図、図版4)

調査区北西端、1B-45グリッド他に位置する。繩文時代前期竪穴住居跡SI009の北東部と重複し、SI009調査中に検出された。よって、覆土上層の殆どはSI009覆土であるが、重複しない部分では焼土粒を少量含んでいた。2基ある火床部の内1基は切られた状況であり、2基の長楕円形の掘り込みのうち、東西に近い軸のものを南北に近い軸のものが切ったものと推測できる。旧炉穴Aは、主軸S-53°-E、長



第10図 SK007・008

軸1.8m・短軸0.8m・深さ0.55m、炉部分は長軸0.5m・短軸0.47mで、東側壁沿いにも焼土が堆積していた。新炉穴Bは、主軸N-22°-E、縦1.8m・横0.95m・深さ0.55mで、炉部分は長軸0.8m・短軸0.55mである。遺物は、SI009に切られた部分以外には出土しなかったが、SI009覆土及び周辺包含層中や南方3mの位置で検出された炉穴SK008に早期条痕文系土器片を含むので、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

SK008（第10図、図版4）

調査区北西部、1B-75グリッド他に位置し、住居跡SI009の南西側で検出された。主軸はS-33°-E、長軸2.9m・短軸0.97m・深さ0.3mであるが、火床部が2か所に存在することから、新旧2基の炉穴の重複の可能性が考えられる。西側の火床部Aは、主軸S-70°-W、長軸1.3m・短軸0.9m・焼土下までの深さ0.5mである。東側の火床部Bは、主軸N-20°-E、長軸1.15m・短軸0.95m・焼土下までの深さ0.58mである。特に火床部Aは南西部の壁面まで被熱化していた。

覆土中から出土した遺物で図化したものは、次のとおりである。1は多重の弧状沈線が施される。拓影下端に区画沈線とこれに沿った刺突文が認められる。鶴ガ島台式であろう。2は表裏とも浅い貝殻条痕が、3はフネガイ科とは異なる細かい貝殻条痕が表裏とも縦位方向に施される。4は表裏とも斜位方向の条痕が明瞭に施される。いずれも纖維の混入は少ない。

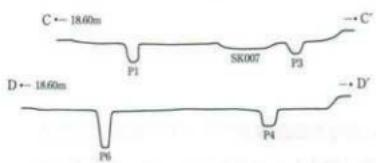
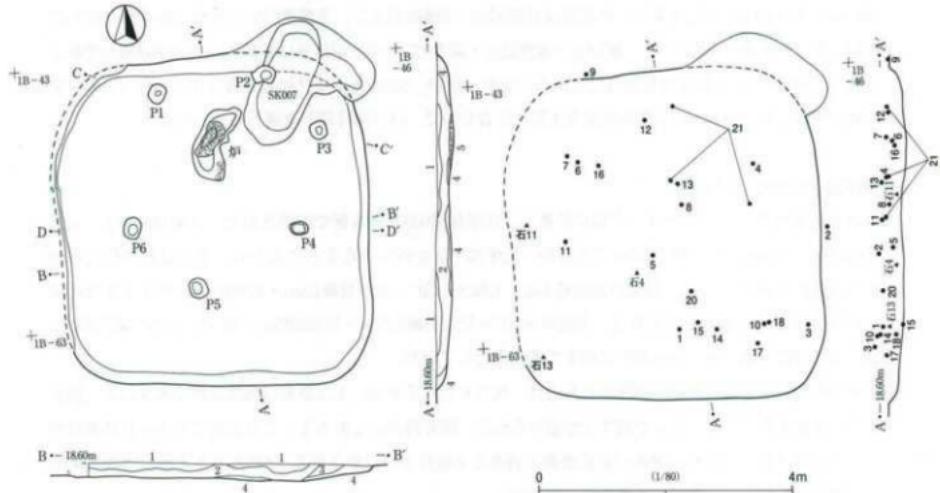
2 竪穴住居跡

SI009（第11・22・23図、図版4・13・16）

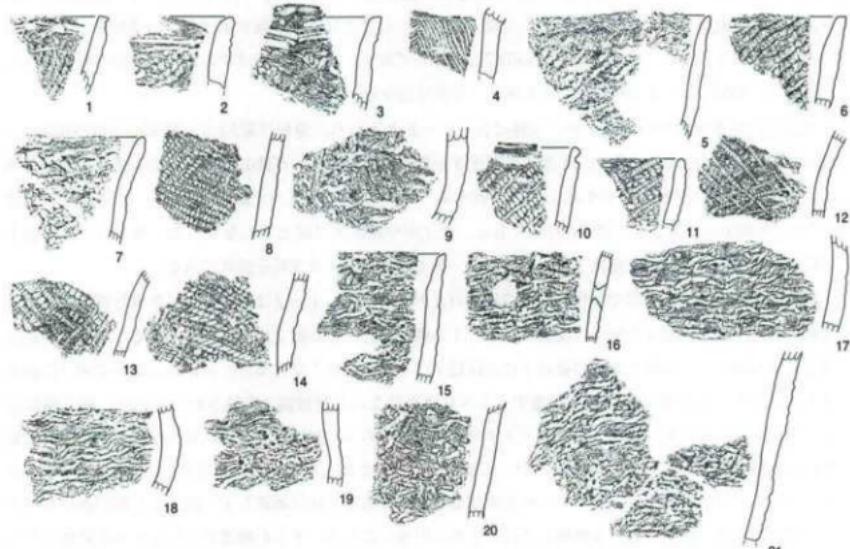
調査区北西端、1B-54グリッド他に位置する。西側の旧石器時代確認調査グリッドを拡張するため、新期テフラ層を掘り下げたところ。早期・前期縄文土器片が多く出土し、ソフトローム面で遺構プランが確認された。遺構プランより上層については、包含層としてグリッドで取り上げたが、遺構覆土上層にあたるものと考えられる。北東部は炉穴SK007と重複しており、調査時当初はその穴の性格が不明であったことから、SK007の壁まで検出してから図化・写真撮影を行った。

北寄りに位置する炉の位置から、主軸はN-3°-Eとみられ、規模は縦5.1m・横5.0m・深さ0.25m~0.28mである。主柱穴は6基で、北寄りに直径3m程の円状に廻り、直径0.2m程・深さ0.2m~0.55mである。炉は、柱穴の中心よりやや北寄りに位置する、やや長楕円形で、主軸はN-37°-E、規模は長軸1.17m・短軸0.4m~0.46m・深さ0.07mである。硬化面や周溝等は検出されなかった。覆土は、黒褐色土中にローム粒を少量含む暗褐色土が主体であり、最上層は新期テフラ粒を斑状に含む。

覆土中から出土した土器で図化したものは次のとおりである。1~2は口縁直下に半截竹管による平行沈線を引き、以下に縄文を施す。沈線は雜で、1の縄文はL、2の縄文は粗いLRである。3は粗い単節縄文地に多截に近い竹管内側を口縁直下に2段施す。4は器形のくびれ部分に引かれた細い沈線下に櫛歯状工具による集合沈線で鋸歯状文を施す。5~9は単節ないし無節縄文が施されたもので、縄文原体は5・6がL、7がLR、8が上半LR・下半RLの羽状である。9はRと思われる粗い縄文が多方向に施される。11は小片のため判断が難しいが、正反の合の縄文と思われる。右半はL、左半はRであろう。10・12~14は附加条縄文で、いずれも附加条第1種である。10は軸縄LR、附加した縄が細いLである。12・13は同一個体で上半が軸縄LRにR2本を附加したもの、下半が軸縄RLにL2本を附加したもので、羽状を構成する。14は軸縄LRにRを附加した原体を左半は横位回転、右半は縦位回転で施し、羽



SI009 A-A', B-B'
 1. 明褐色土層 テフラ粒度中に含む。
 2. 褐褐色土層 黒褐色中にロームの微小粒多く含む。
 3. 明褐色土層 2層と4層の中間層。
 4. 明褐色土層 褐褐色中にロームの微小粒多く含む。
 5. 赤褐色土層 塗膜状に褐褐色土粒少量含む。



第11図 SI009

状を構成する。15~21は結節の縄を多段に施したもので、15と16、17と18は同一個体と思われる。16には補修孔が認められる。いずれも前期中葉の黒浜式土器である。また、石器は、石錐（4）、小型磨製石斧（11）、敲石（13）が出土したが、詳細は別項で説明する（第22・23図）。

SI010（第12図、図版4・13・16）

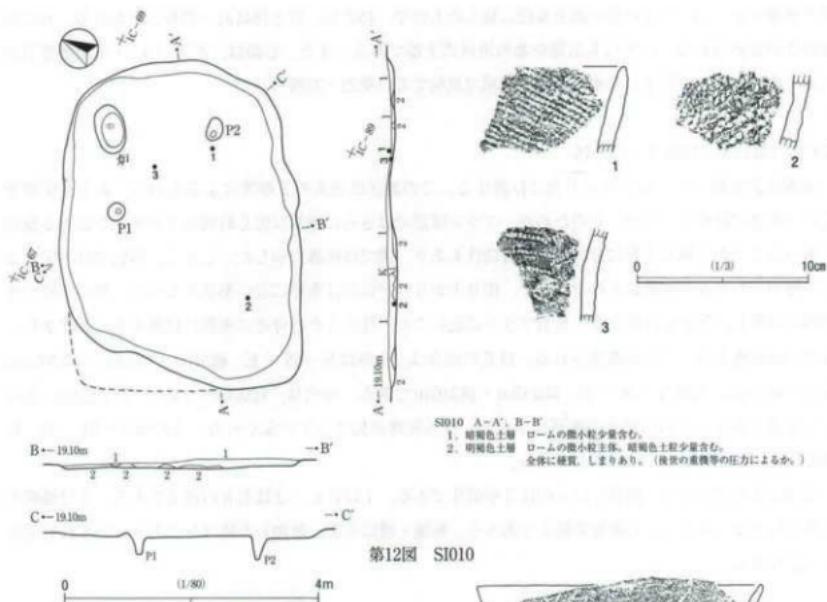
調査区北東端、1C-68グリッド他に位置する。この地区は過去の工事等によるものか、表土が圧縮を受けて非常に硬化していた。そのためか、プラン確認ではさらに西側に広く暗褐色土の覆土が広がる様相であったことから隅丸方形に近い形状の可能性もあり、図では破線で示した。しかし、西側では不完全ながら壁の立ち上がりが確認されたことで、掘り上がりの平面形は菱形に近い形状となった。炉の位置が北部隅に位置し、主軸も住居全体の菱形プランに近いこと、柱穴もその付近に東西に位置すること等から、後者の可能性が高いことが推測される。前者の場合は、主軸はN-65°-E、縦5.0m・横3.8m・深さ0.1m、後者の場合は、主軸N-28°-E、縦5.45m・横3.95mである。柱穴は、径0.3m~0.4m、深さ0.23m・0.34mの2基である。炉内は焼土の堆積は少なく、壁も被熱赤化はしていなかった。主軸はN-51°-E、長軸0.73m・短軸0.48m・深さ0.03mである。

遺物は非常に少なく、図化したものは3小破片である。1はR L、2はL Rの縄文である。3は軸縄の痕跡が見えないがおそらく附加条縄文であろう。軸縄・種は不明、附加した縄はLである。いずれも黒浜式土器である。

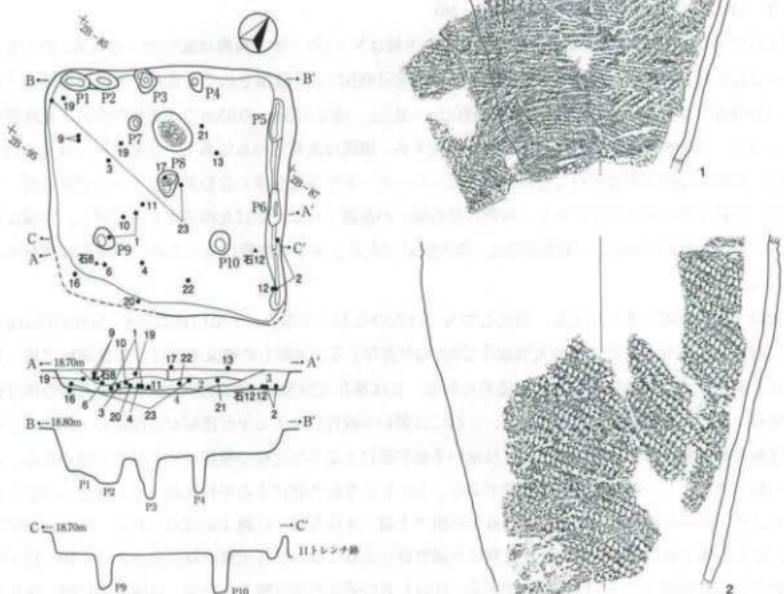
SI012（第13・14・22・23図、図版5・13・16）

調査区中央部、2B-86グリッド他に位置する。主軸はN-35°-W、規模は縦3.8m・横3.78mの不整形・深さは0.36mである。南側隅の壁は中・近世の溝SD005により破壊されているが、床面から壁の立ち上がりは残存していた。主柱穴は中央部に径0.2m~0.3m、深さ0.55m~0.65mで4基検出され、北西側壁沿いに4基、北東側壁沿いに2基の壁柱穴が存在する。周溝は北東辺のみにあり、2基の柱穴は長楕円形である。床面には硬化面は存在しない。覆土は、ローム・テフラ粒を多く含む黒褐色土が主であるが、下層はローム粒主体の明褐色土であり、短期の埋め戻しが推測される。炉は北西辺寄りに位置し、主軸はN-78°-W、規模は長軸0.7m・短軸0.52m・深さ0.1mである。焼土の堆積はあったが、火床部は被熱赤化はなかった。

遺物は、縄文土器が多く出土し、図化したものは次のとおりである。1は口径22.5cm、現存高15.4cmを測る口縁から底部付近にかけての大型破片で約1/2が遺存する。無節Lの縄文を横位、斜位回転で施し雜な羽状を構成する。一部にRの縄文も認められる。2は現存高26.5cm、最大径24.2cmを測る大型の体部破片である。粗いR Lの縄文を全面に施し、上端には細い半截竹管による平行沈線が2段認められる。3~9は沈線文様が施されたものである。3は細い半截竹管による平行沈線で粗雑な格子目文が描かれる。4はへら状工具による1本引きの斜行沈線である。5・6は半截竹管による平行沈線、7・8はへら状工具による沈線で粗雑な格子目が施される。6は小型の土器、8は沈線下に縄文が認められる。9も小型の土器で、R Lの縄文地に器形がくびれた位置に半截竹管による3条の平行沈線が雜に施される。10~13・16は単節ないし無節縄文が施されたものである。10はL Rの縄文を縦位施した後、口縁直下に同一原体を横位施して羽状を構成する。11は左半はL、右半はRを横位施して、12は同じく左半はL R、右半は



第12図 SI010



第13図 SI012 (1)

R Lを横位施文して羽状を構成する。13はL、16はRの縄文を施す。16には拓影上端に縄の末端と思われる押捺が認められる。14・15は同一個体である。附加条第1種の縄文で、軸縄はR L、附加した縄はLである。17も附加条縄文であるが、軸縄及び縄は不明で附加した縄はRの撚り戻りである。左半は縦位、右半は横位に回転施文し、羽状を構成する。18~20は結節を多段に施したものである。21は粗雑な撚りの縄文が浅く施されており、縄の原体はわからない。22・23はきわめて撚りのゆるい無節縄文を施文したものか、條らしきものが見える。いずれも黒浜式土器である。

石器・石製品は、打製石斧（8）・浮子（12）が出土した（第22・23図）。

3 土坑

SK005（第15図、図版5・13）

調査区西部中央、2B-40グリッド他に位置する。主軸はN-36°-E、規模は長軸1.32m・短軸0.95m・深さ0.32mの小規模な土坑であり、底部には径0.2m程・深さ5cm程の浅い窪みが2か所存在する。覆土はローム・テフラ微粒が多く含む暗褐色土で、縄文土器片が多く含まれていたため、当概期の土坑と判断した。

図化したものは次のとおりである。1・2は同一個体で、1には小波状の突起が2個、2には補修孔がそれぞれ認められる。太めのR LとL Rの縄文を菱形構成で施し、その上に半截竹管による平行沈線で方形区画文を描く。3・4はLの縄文、5はL Rの縄文が施される。3・5には縄の末端が現れている。3には少なくとも2段が明瞭に認められ、間隔は4.0cmある。いずれも黒浜式土器である。

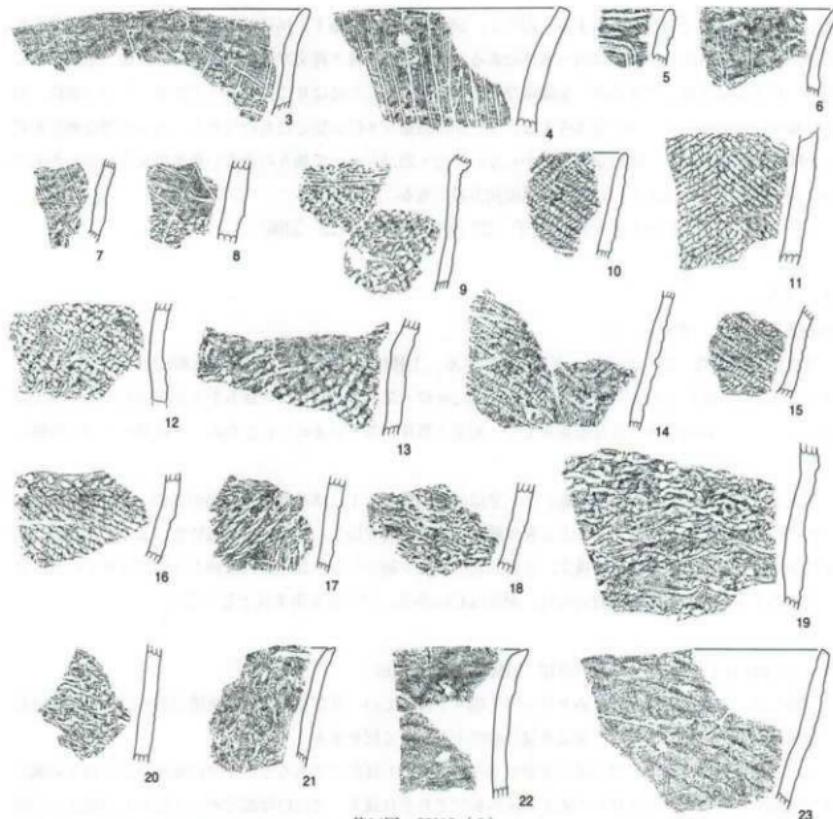
4 包含層出土土器・土製品（第16~21図、図版14~16）

本項では、遺構に伴わないためグリッドで取り上げたもの、並びに縄文時代遺構以外の奈良・平安時代住居跡等から出土した土器・土製品を包含層出土品として紹介する。

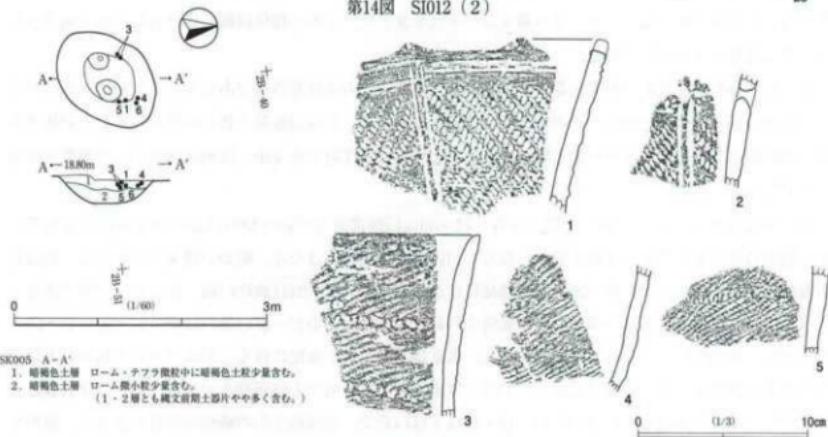
1~7は撚糸文土器で、出土量は少量である。いずれも夏島式であろう。1は口縁直下に無節Rの縄を横位回転で、その下に單節R Lの縄を斜位回転でそれぞれ施す。2は口縁部とその下にR Lの縄をやや向きを変えた斜位回転で施す。3~7の縄文はいずれもR Lで、4のみ縦位回転、他は斜位回転で施文される。7は底部付近の破片である。

8~13は早期茅山式系の有文土器で、13は鶴ガ島台式。その他は野島式であろう。8は微隆起線で、9~12は沈線でそれぞれ区画し、その中を集合沈線で充填する。12は口縁部と体部の境に作られた屈折する段の部位破片である。13は9~12と同じく区画文と充填文は沈線であるが、区画沈線に沿って刺突文が付くものである。

14~60は表裏面に条痕が付く土器である。14~30は口縁部破片で16~18の口端には刻みが施される。14・15の口端にも不明瞭な文様が認められる。14は絡条体圧痕ではなく、細かい縄文と思われる。15は貝殻腹縁の連続圧痕らしい。19・20の口縁端部には条痕が付く。21~24は波状口縁、25~30は平縁である。これら口縁部破片の条痕は表裏とも概ね横位から斜位に付けられるが、27の裏面は縦位に近い。31~53は条痕が付く体部破片である。31は表面が無文、裏面は浅い条痕が横位に付く。32はフネガイ科の貝とは異なる細かい条痕が表裏とも縦位に付く。33以下は表裏面とも条痕の方向が様々である。54・55は表裏とも条痕が付く尖底である。これらのうち、14・15は子母口式で、他は胎土中の繊維の含有が少なく、細砂を



第14図 SI012 (2)



第15図 SK005

SK005 A-A'

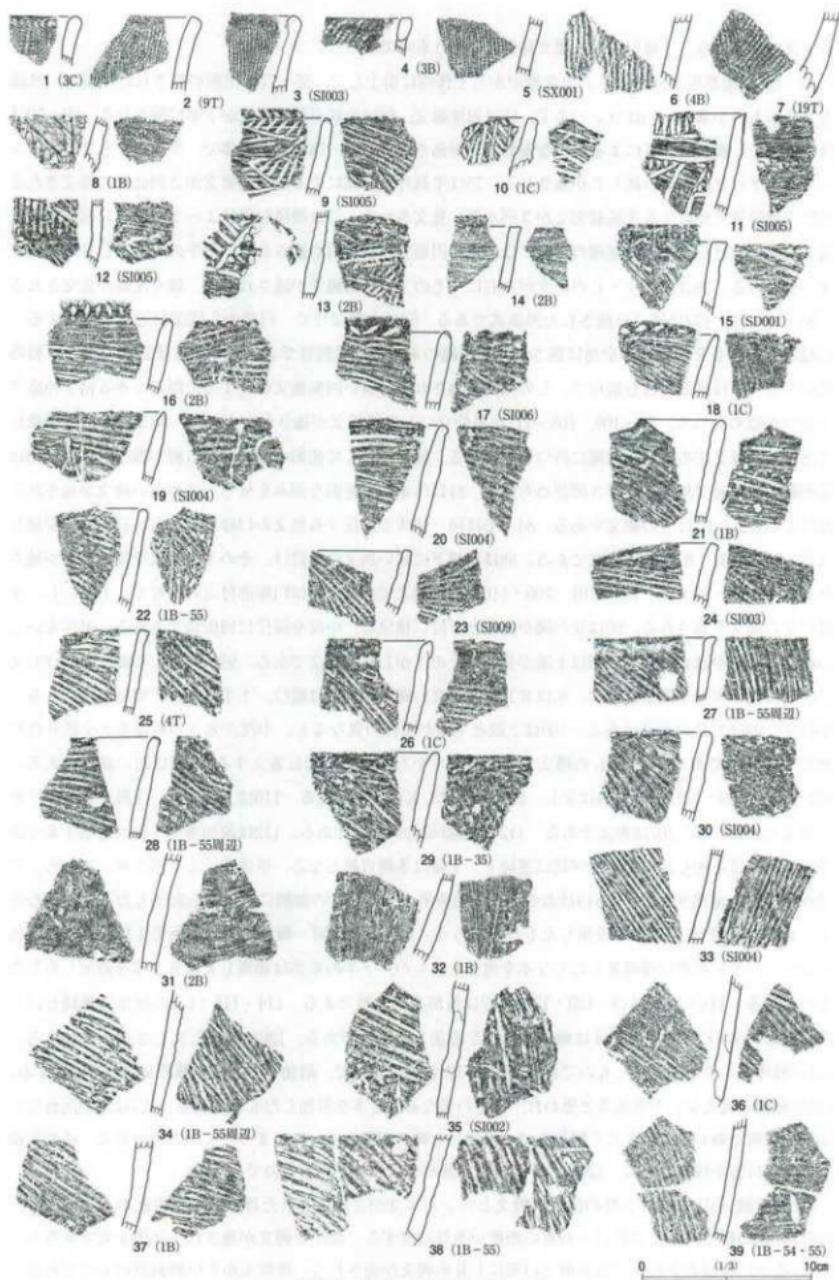
1. 喬褐色土層 ローム・テフラ微粒中に暗褐色土層少量含む。
2. 喬褐色土層 ローム・テフラ微粒少量含む。
(1・2層とも褐色前期土層片や多く含む。)

多く含む特徴から、子母口式から縄文島台式に伴うものであろう。

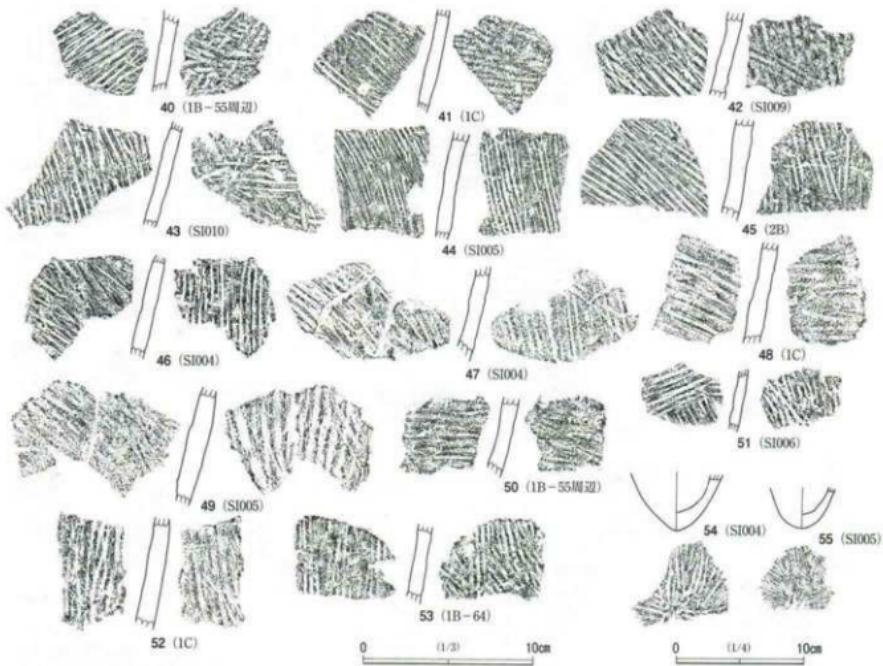
56～132は前期黒浜式である。包含層中から主体的に出土した。58～71は沈線の施された土器で、乱雜な文様のものが多い。63はコンバス文、65は短沈線文、66は波状平行沈線文が丁寧に施される。69・70は同一個体で、櫛歯状工具による細かな菱形文様が施される。72～74は同一個体で、少なくとも2段のコンバス文の下に2段の反の繩L Lが施される。75は半截竹管内側による連続刺突文が2列弧状に施される。76は半截竹管外側による連続刺突文が3列水平に施される。77は微隆起線によって右周りに収束する渦巻文が貼り付けられ、微隆起線の両側には小型の円形竹管刺突列が施される。下半の繩文はLRのループ文と思われる。78は無節RとLの繩文が左右に、その下に結節繩文が施された後、雑な沈線が施される。

56・57・79～132は繩文の施された黒浜式である。56は大型破片で、口縁から底部付近まで遺存する。口縁直下からLRの繩文が全面に施されるが、繩の末端が6段観察でき、その間隔は3.2cmを測る。補修孔がある。57は底部を含む破片で、Lの繩文が施される。強い回転施文が終了した際にできる粘土の盛り上がりが認められる。79～106、108～111は単節ないし無節繩文が施されたもので、88までが口縁部破片である。79は2尖の突起を口縁に持つと思われる。繩文はRLで拓影中段に他繩自縛が観察される。80は節が粗大なLRで原体末端が3段認められる。81は口端に不規則な刻みを付し、Rの太い繩文が施される。82は太いRL、83はLの繩文である。84・85は同一個体で外反する無文の口縁部下に太いRの繩文が施される。86はRL、87はRの繩文である。88は口縁下に狭い無文帯を設け、その下に粗大な節のLRが施される。89・90・92・97・100・101・106・110は羽状繩文である。89は口縁部付近の破片で、上段にL、下段にRの繩文が施される。90はRの繩が上段と下段に横位に、中段を縦位に回転施文される。91は太いLの繩文で結節が認められる。92は上端がRL、その下がLRの繩文である。93・94はLの繩文、95はLRで中段に繩の末端が観察される。96はRL、97はRの繩文が上半は縦位、下半は横位に回転施文される。98はR、99はLRの繩文である。100は上段と下段が原体の異なるR、中段が太さの異なるrを撚り合わせたLの繩文である。101はLの繩文で、下半はやや右上がりに回転施文する。105は同一個体である。102・103・109・111はR、104はRL、106・108はLRの繩文である。110は上段がL、下段がおそらくRの繩文と思われる。107は無文である。112～125は附加条繩文である。112は附加条第1種の附加1条であるが、上端は附加した繩がループ状に連続し、下端は他繩自縛となる。原体復元を「第3章　まとめ」で試みたので、参照されたい。113はおそらく附加条第1種でRLの軸繩にL1本を附加したものと思われる。125も同じ撚りの原体を使用したものであろう。116・117は同一個体で、附加条第1種の繩文が羽状をなす。上半の原体は軸繩RLにL2本を附加したもの、下半の原体は軸繩LRにR2本を附加したものである。114・115・118・120・121・122は附加条第2種である。114・115・122の原体は軸繩LにLを附加したもので、118の原体は軸繩RにRを附加したものである。120は軸繩LにL2本を附加する。121は軸繩RにLを附加したものである。123・124は同一個体で、附加条第3種で軸繩Rにrを附加する。119は軸繩が見えないが附加条と思われ、太さの異なるL2本を附加したものである。127は条が乱れていたため判断が難しい。おそらく附加条で、附加した繩Rが撚り戻ってしまったものと思われる。拓影下端には他繩自縛が観察される。126・128～132は結節が多段に施されたものである。

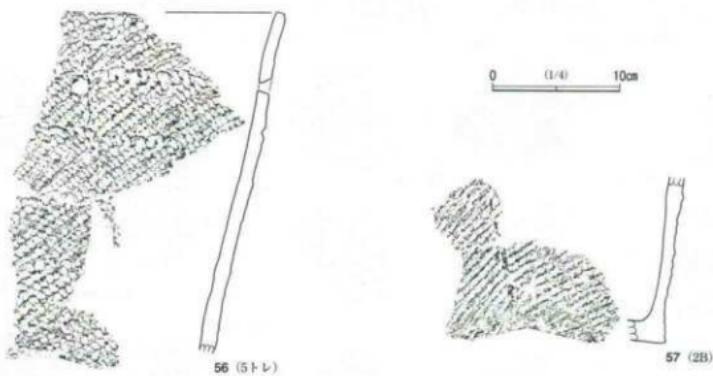
133は諸磯a式、134は小型の波状貝殻文とコンバス文が2段施された浮島式でも古式のものである。135は擬似口縁で、胎土に長石・石英の細礫が多量に混ざる。細かな繩文が施され、諸磯a式であろう。136は器面に輪積痕が残る。器表面と口端にLRの繩文が施される。前期末から中期初頭のものである。



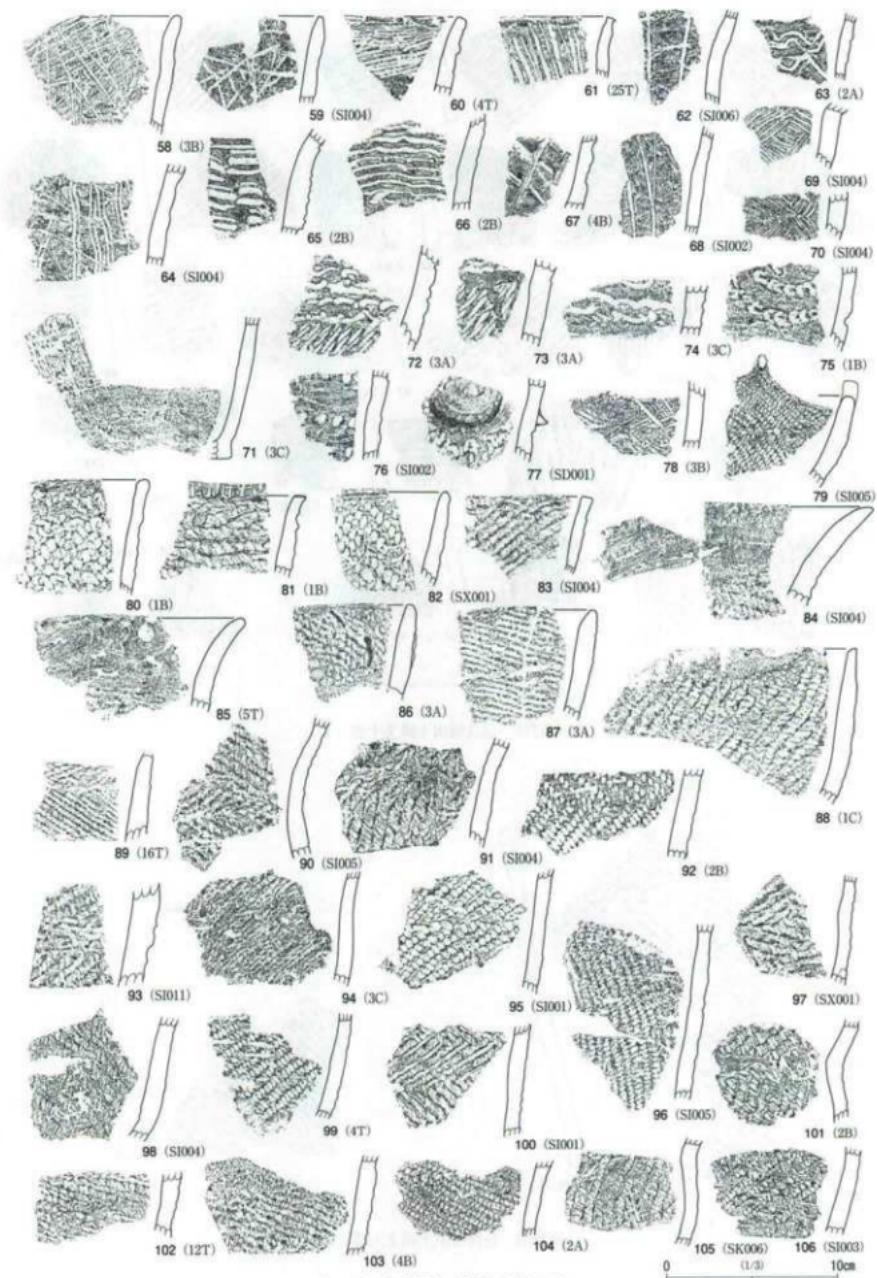
第16図 包含層出土繩文土器（1）



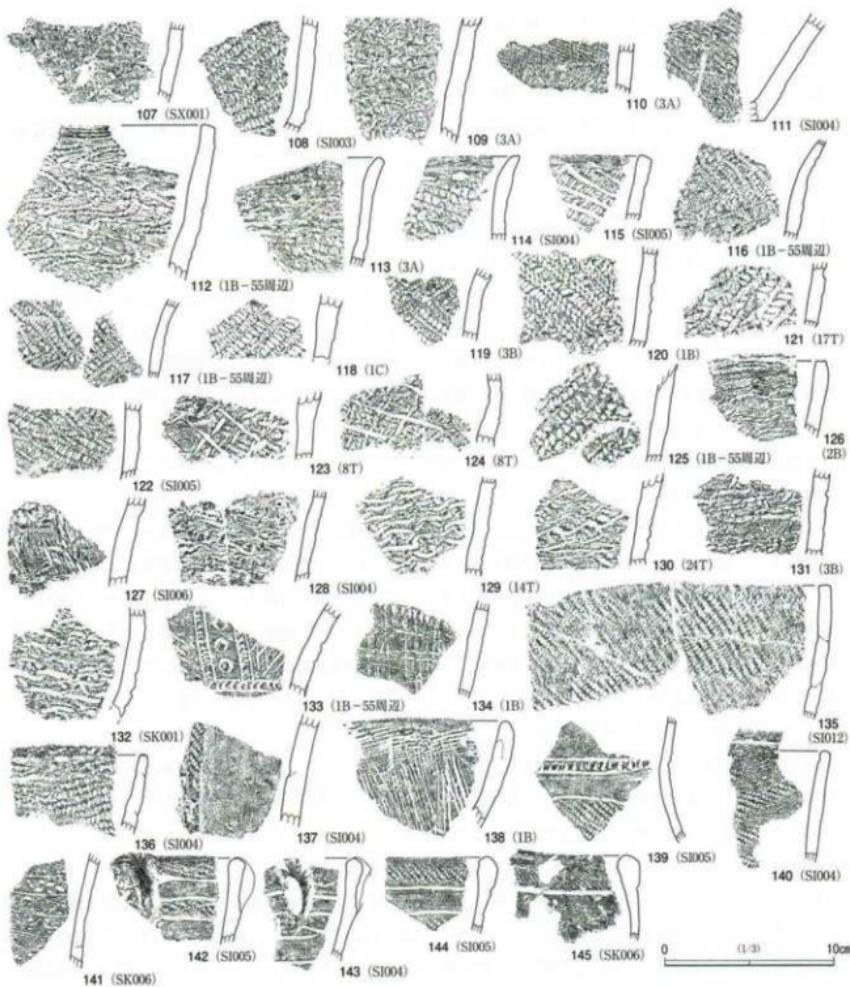
第17図 包含層出土繩文土器（2）



第18図 包含層出土繩文土器（3）



第19図 包含層出土繩文土器(4)



第20図 包含層出土縄文土器（5）



第21図 縄文時代土製品

137は拓影左端に微隆起線上に縄文が施された加曾利E4式であろう。138もほぼ同時期の櫛歯文が施されたものである。140・141は加曾利B式の粗製土器、139は加曾利B3式から安行1式にかけてのものである。142～144は安行1式で、142と143は同一個体である。145は安行2式から3式前半のものであろう。

第21図1は、撫糸文土器の破片の縁辺を打ち欠いて円形に仕上げた円板である。最大長31mm、最大幅36mm、厚さ6mm、重量8gを測る。RLの縄文が施される。夏島式であろう。

5 石器・石製品（第22・23図、図版16）

縄文時代石器・石製品については、本項で一括して紹介する。

1～3は石鏃である。1はチャート製で、脚部が破損している。先端部には入念に調整加工が施されている。2はホルンフェルス製で、脚部の抉りが浅く、左右非対称である。おそらく、左脚部が破損後に再生加工を行ったものと思われる。3はチャート製で、脚部の抉りがやや深い。左脚部が破損している。4は黒曜石製石錐である。左側縁には急角度の調整加工が連続的に施され、右側縁の腹面側に入念な兆歳加工が施されて、先端部が錐状を呈する。

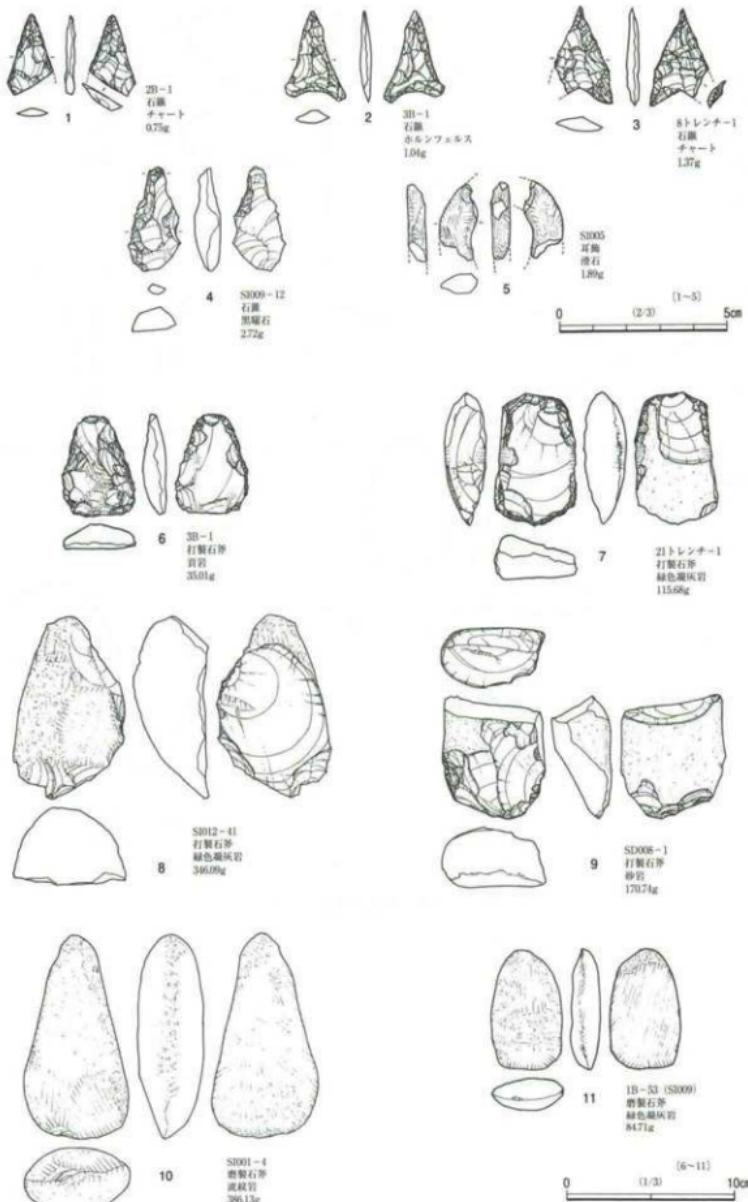
5は滑石製玦状耳飾と思われる。上部と下部が欠損しており、中間部の残存品である。上部は穿孔された部位付近から破損している。

6～9は打製石斧である。6は横長の分割礫（頁岩）を素材として、背面には器体全体に平坦な調整加工が施され、腹面の周辺部には階段状の調整加工が施されている。器体の下半部には使用による磨り痕がみられる。7は縦長の分割礫（緑色凝灰岩）を素材として、左側縁を折断することにより成形した後に、器体周辺に連続的に階段状の剥離を行っている。8は厚みのある楕円形礫（緑色凝灰岩）を素材として、腹面左上部から大きく剥離して、器体を成形した後に、右側縁中間部から下端部にかけて、交互剥離が行われている。9は楕円形礫（砂岩）を素材として、表面下端部から大きく3枚の剥離によって成形した後に、下端部に交互剥離が行われている。

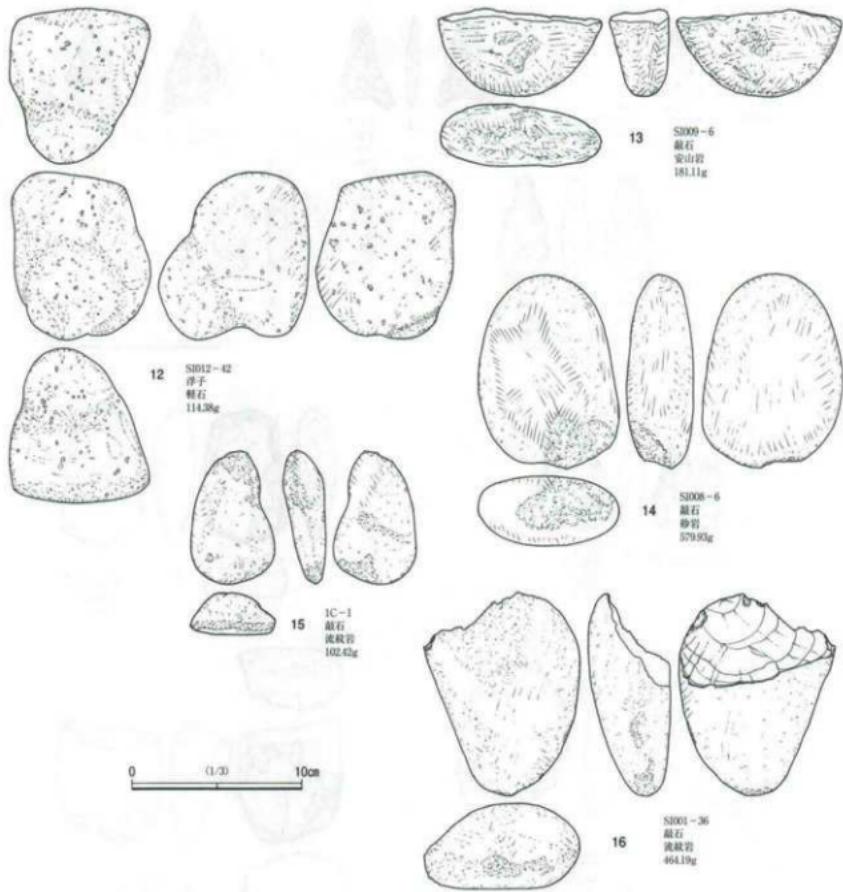
10・11は磨製石斧である。10は楕円形礫（流紋岩）を素材として、表面下端部に数枚の調整加工を行った後に研磨をして刃部を作出している。11は扁平な楕円形礫（緑色凝灰岩）を素材として、裏面の上下両端部に調整加工を施した後に、下端部に顕著な研磨を施して、刃部を作出している。

12は軽石製浮子である。研磨により表面下部に瘤状の突出を作出している。

13～16は敲石である。13は扁平な楕円形礫（安山岩）の周辺部に敲打痕がみられる。14は楕円形礫（砂岩）を素材として、表面下端部に敲打痕がみられる。15は不定形な円礫（流紋岩）を素材として、表面下端部に敲打痕がみられる。16は先端が細長の楕円形礫（流紋岩）を素材として、表面下部の細長の部位に敲打痕がみられる。



第22図 繩文時代石器 (1)



第23図 繩文時代石器（2）

第3節 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡9軒であり、調査区北半分に集中して検出された。出土した土器・土製品に関しては、遺物観察表（第3・4表）に詳しく述べ、「第3章まとめ」でも触れるので、本節では概略に留める。挿図中の土器の基本的な並び順は、須恵器杯・壺、土師器杯・壺であり、須恵器杯は常陸産→武藏産とし、須恵器・土師器杯とも基本的には器形・整形の変化の傾向を踏まえた。

1 竪穴住居跡

SI001（第24図、図版5・6・17）

調査区境西端部、2A-89グリッド他に位置し、カマドは2基北西側に並ぶ。竪穴の主軸はN-38°-W、規模は縦2.83m・横3.2mで、深さは浅く0.2m程度である。柱穴は検出されなかった。周溝は2基のカマドの手前と北東辺に掘られ、西辺側には不完全な周溝とも考えられる浅い落ち込みがある。カマドを中心として、焼土と柱材に推測できる炭化材が散布し、床面の一部は被熱硬化している。硬化面はカマドから中央部にかけて認められた。

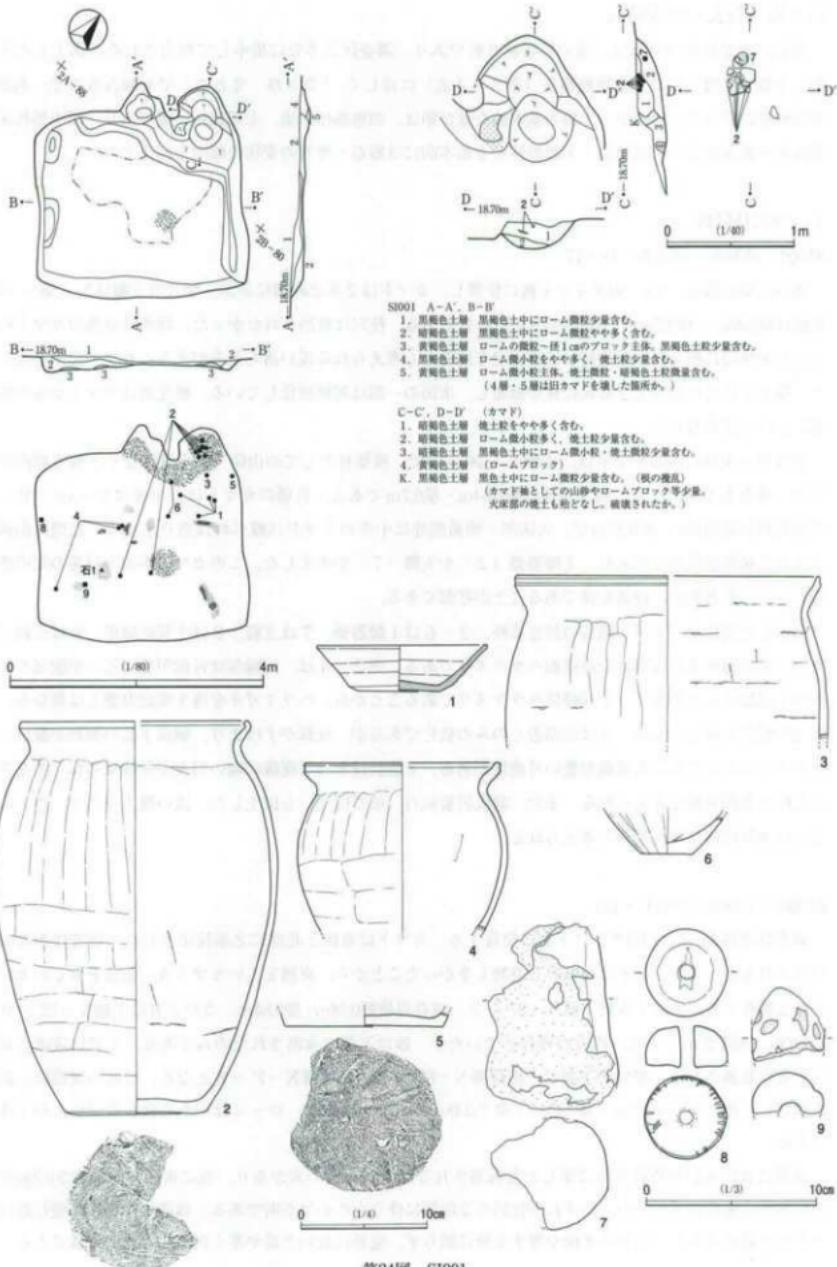
北西辺中央部にあるカマドは、主軸N-38°-Wで、構築材としての山砂・粘土等ではなく、袖も検出されず、遺物も少量であり、残存規模は縦0.64m・横0.7mである。右隅のカマドは、主軸はN-33°-W、残存規模は縦0.63m・横0.97mで、火床部・煙道部等は中央のカマドに較べれば造りが良く、左側に山砂を入れた袖部が残存しており、土師器壺（2）や支脚（7）が出土した。このカマド手前と周溝の間の空間も広く、前者が旧、後者が新であることが推測できる。

図示した遺物は、1は土師質の須恵器杯、2～6は土師器壺、7は支脚、8は土製紡錘車、9は土錘である。須恵器杯1の底部は全面回転ヘラケズリである。壺2～4は、口縁部は常総型壺に近いが胴部の整形が上部継位ヘラケズリ、下部横位ヘラケズリであることから、ヘラミガキを施す常総型壺とは異なる。在地の製品と考えられる。6は底部近くのみの破片であるが、底部がすばまり、胴部下部の整形が継位ヘラケズリであることから武藏型壺の可能性がある。土製紡錘車は下面縁に細い刻みが多数見られ、糸を絡めた際の使用痕跡と考えられる。また、凝灰岩製砥石（第37図1）も出土した。浅い覆土なので、以上の全ては本住居跡に伴う遺物と考えられる。

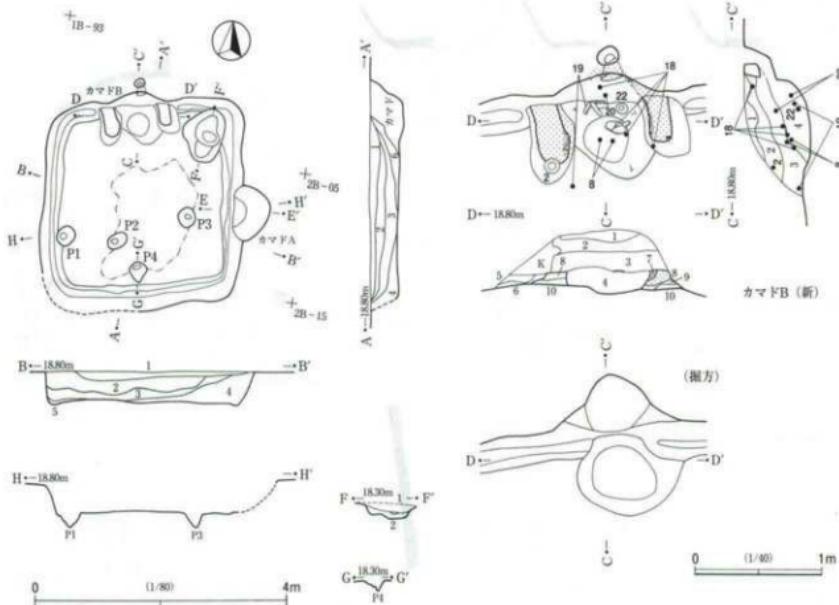
SI002（第25図、図版6・17）

調査区北西部、2B-03グリッド他に位置する。カマドは東側と北側に2基検出された。前者は袖等が検出されなかったが、後者には残存し遺物も多かったことから、東側を古いカマドA、北側を新しいカマドBと判断した。カマドAは主軸N-87°-E、残存規模縦0.58m・横0.84m、カマドBは主軸N-12°-W、縦1.03m・横1.27mであり、煙道が残存していたが、砂は下部で検出されたのみであり、上部は破壊されたことが推測される。竪穴の主軸は、旧段階N-83°-E、新段階N-7°-Wとなる。竪穴の規模は、新段階での計測値は、縦3.2m・横3.15m・深さ0.48mである。覆土は、ローム粒を多く含む暗褐色土が主体である。

南側には出入口用階段等を設置したと推測される深さ0.2m程の穴があり、他に東西方向に深さ0.2m程の柱穴が3基検出されたが、いずれが住居の2段階に伴うものかは不明である。周溝は全周し、硬化面は中央部に認められた。遺物は床面や覆土上層に限らず、完形に近い土器が多く出土した点が特徴である。



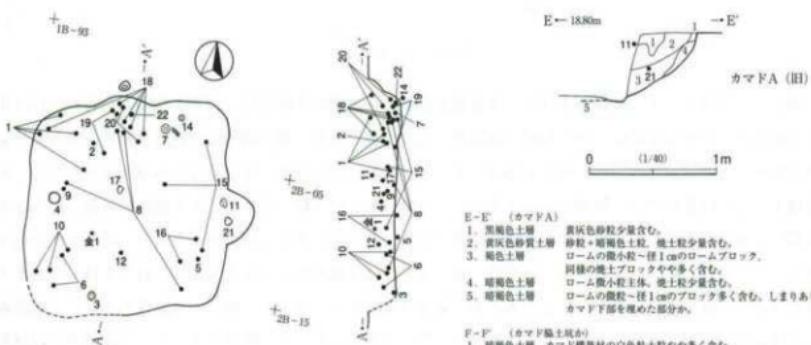
第24回 SI001



SI002 A-A', B-B'

1. 黒褐色土層 黒褐色土中にローム微小粒少量含む。
2. 墓園色土層 黒褐色土中にローム微小粒やや多く含む。
3. 黒褐色土層 黒褐色土中にローム微小粒少量含む。地表に微量含む。
4. 墓園色土層 黒褐色土中にローム微小粒やや多く含む。
5. 明褐色土層 墓園色土中にロームの微小粒多く含む。
6. 灰褐色土層 カマド下壁基材の山砂少量含む。

- C-C', D-D': (カマドB)
 1. 黒褐色土層 黃灰色砂粒少量含む。
 2. 貧灰褐色砂質土層 黃褐色土・黄灰色砂粒。地表粒少量含む。
 3. 細褐色土層 黄褐色砂粒・燒土粒少量含む。
 4. 赤褐色土層 燃成の微粒・径1cmプロック+墓園色土粒・黄灰色砂粒。
 5. 黄灰色砂質土層 2号と同様。径1cmのロームプロック少量含む。
 6. 墓園色土層 黄褐色砂粒少量含む。
 7. 赤褐色砂層 砂粒が被熱色化した部分。
 8. 貧灰褐色砂質土層 砂粒主部・黄褐色土粒・燒土粒少量含む。
 9. 灰褐色砂質土層 砂粒+ローム微小粒。
 10. 黄褐色土層 ローム中に砂粒少量含む。
 (7~10層は施築成土)



- E-E': (カマドA)
 1. 黒褐色土層 黃灰色砂粒少量含む。
 2. 貧灰褐色砂質土層 ロームの微小粒・径1cmのロームプロック。
 3. 細褐色土層 同様の焼土プロックやや多く含む。
 4. 墓園色土層 ローム微小粒主部・燒土粒少量含む。
 5. 黄褐色土層 ロームの微粒・径1cmのプロック多く含む。しまりあり。
 カマド下壁を埋めた部分。
- F-F': (カマド壁基材)
 1. 墓園色土層 カマド下壁基材の白色粘土粒やや多く含む。
 2. 明褐色土層 墓園色土中にロームの微粒・径5cmのプロック多く含む。白色粘土粒・燒土粒少量含む。

第25図 SI002 (1)



第26図 SI002 (2)

図示した遺物は、1～3が須恵器杯、4が須恵器蓋、5～13が土師器杯、14が土師器高台付杯、15・16が土師器蓋、17が須恵器壺、18～21が土師器壺、22が支脚である。須恵器杯は白色針状物質を含む南比企窯産2を含む武藏産とみられ、外面下部は、1・2が回転ヘラケズリ、3が手持ちヘラケズリである。底部は1・2が回転糸切り後外周回転ヘラケズリ、3は回転糸切り離してある。土師器杯の外面は、5が中央部に指頭痕が連続し、相模型杯の可能性が考えられ、7・10が下部手持ちヘラケズリ、6・8が回転ヘラケズリ。他はロクロナデである。底部は、6～10・12は全面回転ヘラケズリ、5・11は手持ちヘラケズリである。土師器杯13は外面に墨書があるが、文字は不確実で「布」や「田」の可能性がある。土師器蓋15・16は或いは盤の可能性もある。須恵器壺は、雲母を多く含むので常陸産であろう。土師器壺は口縁形状・橙色・薄い断面・胴部上部横位ヘラケズリ・下部継縫ヘラケズリ等から、武藏型壺であろう。また、覆土上層から刀子（第38図1）も出土した。本住居跡に本来伴う遺物は、旧カマドAから出土した土師器

杯11、土師器壺21、新カマドBから出土した須恵器杯2、土師器杯8、土師器壺18~20、支脚22、床面近くから出土した須恵器杯3、土師器杯7、14、土師器蓋15と考えられる。

SI003 (第27図、図版7・18)

調査区北部中央寄り、1B-87グリッド他に位置する。カマドは東南東側に設置され、竪穴の主軸はS-70°-E、規模は縦2.8m・横2.68m・深さ0.3mである。覆土は、下層がローム粒を多く含む明褐色土、上層がローム粒を含む黒褐色土である。柱穴は西寄りに径0.2m~0.4m、深さ0.18m・0.24mのものが2基掘られる。周溝はカマド部分以外で全周する。硬化面は南寄りとカマド手前に認められる。東側壁からカマド先端部は、中・近世溝SD011に破壊されている。

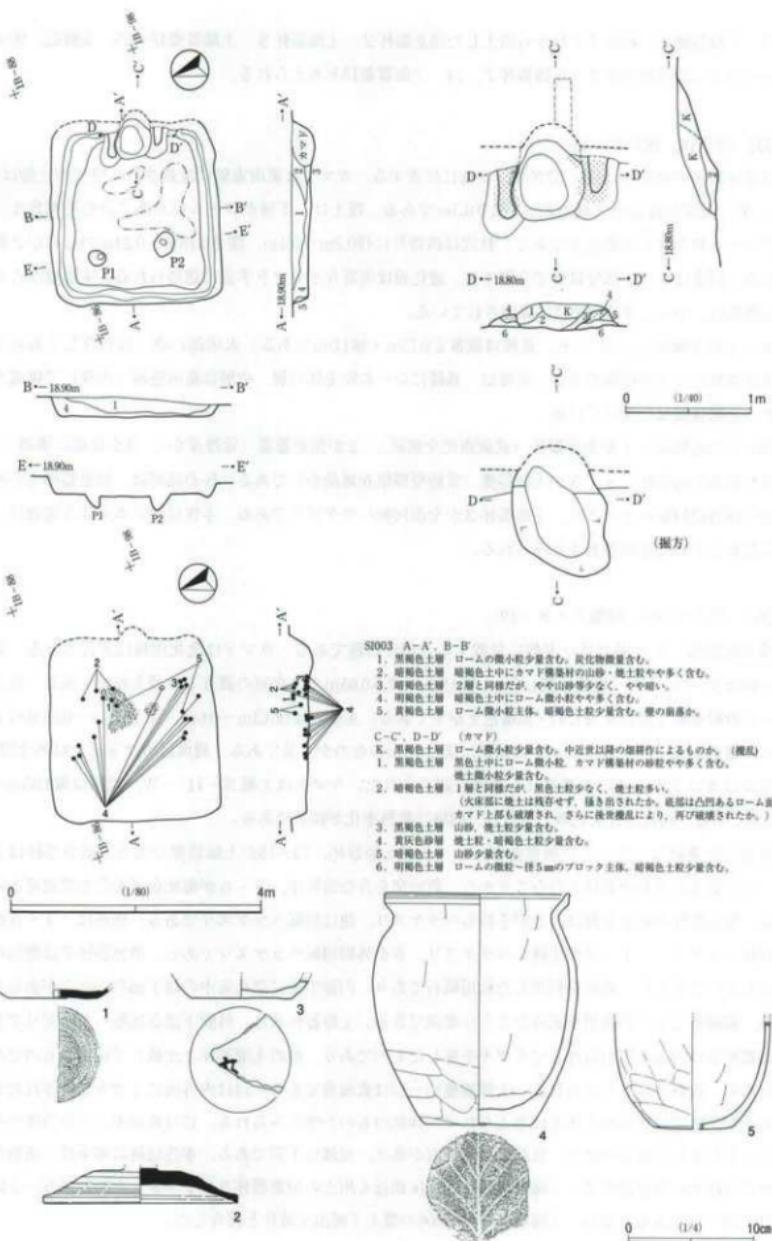
カマドの主軸はS-67°-E、規模は縦推定0.75m・横1.0mである。火床部に焼土は残存しておらず、掻き出されたことが推測できる。両袖は、基礎にローム粒主体の層、中層は黄灰色砂（山砂）で構成されるが、上層は攪乱を受けている。

図示した遺物は、1が須恵器杯（武藏南比企窯産）、2が須恵器蓋（常陸産か）、3が底部に墨書「立」が書かれる土師器杯、4・5が土師器壺（常総型模倣在地産か）である。杯の底部は、須恵器杯1が回転糸切り後外周回転ヘラケズリ、土師器杯3が全面回転ヘラケズリである。本住居跡に本来伴う遺物は、床面に散布していた土師器壺4とみられる。

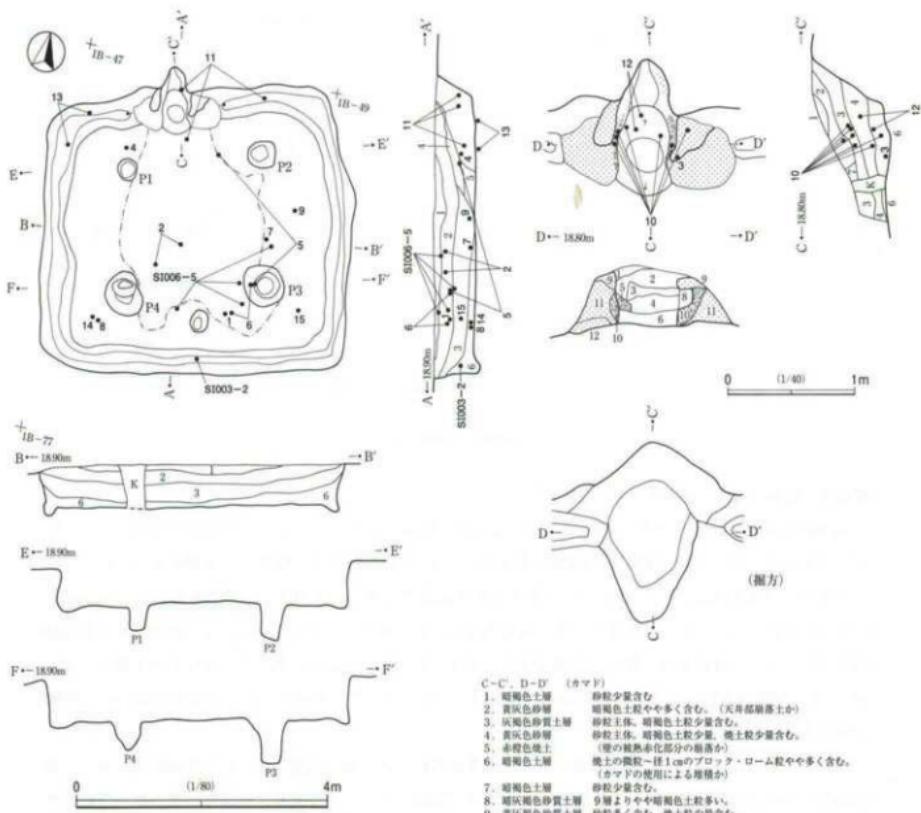
SI004 (第28・29図、図版7・8・19)

調査区北部、1C-58グリッド他に位置する大型住居跡である。カマドは北北西側に設置される。竪穴の主軸はN-11°-W、規模は縦4.45m・横4.9m・深さ0.65mで、今回の調査では最大規模である。覆土は、ローム微粒や焼土微粒を含む暗・黒褐色土が主である。主柱穴は径0.3m~0.6m、深さ0.4m~0.66mの4基、出入口施設関連とみられるピットは南側に深さ0.2mのものが1基である。周溝はカマド部分以外全周し、硬化面はカマドから柱穴に囲まれた範囲に認められた。カマドは主軸N-11°-W、規模は縦1.05m・横1.26mである。両袖は黄灰色砂で造られ、内壁は被熱赤化が顕著である。

図化した遺物は、1~7が須恵器杯、8・9が土師器杯、10~15が土師器壺である。須恵器杯は1~4・7が胎土に長石や雲母を含むことから、新治窯を含む常陸産、5・6が南比企窯を含む武藏産とみられる。須恵器杯の外面下部は、2が手持ちヘラケズリ、他は回転ヘラケズリである。底部は、4・5が全面回転ヘラケズリ、1・3が手持ちヘラケズリ、6が外周回転ヘラケズリである。須恵器杯7は底部周囲を打ちかいて丸くし、底面を利用した転用砥石であり、内面中央に穿孔途中の径1mm程の窪みがあることから、筋錘車として再利用を試みたことが推測できる。土師器杯8は、外面下部が回転ヘラケズリである。土師器杯9は内面を黒色処理してミガキを施したものであり、他の土師器杯と比較して後出のものであることから、流れ込みと考えられる。土師器壺10~13は武藏型である。14は内外面にミガキが施されたものであるが、底部の厚みから杯とは考えられず、鉢状のものか壺とみられる。15は乾燥不十分な段階でヘラケズリ整形をした粗製の壺で、底部には木葉痕があり、产地は不明である。本住居跡に本来伴う遺物は、カマド内出土の須恵器杯2、土師器壺10・12、床面近く出土の須恵器杯3・7・8、土師器杯9、土師器壺11・13・14である。なお、土師器杯5はSI006の覆土下層出土破片と接合した。



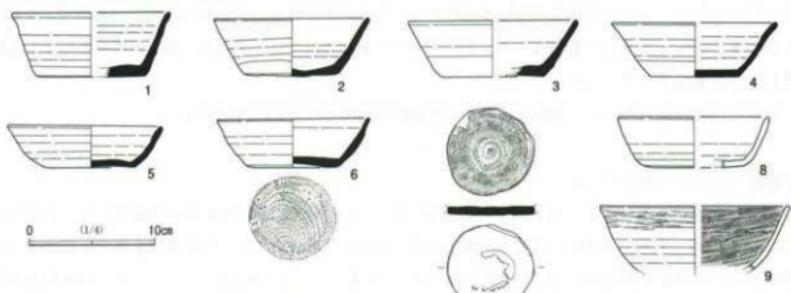
第27図 SI003



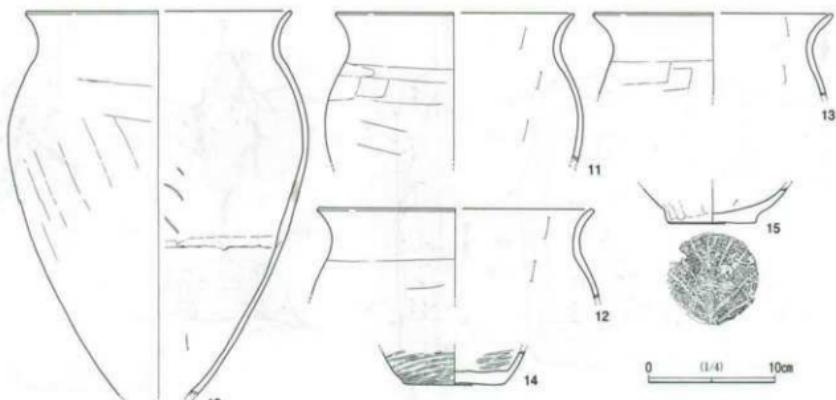
C-C', D-D' (カマド)
 1. 黒褐色土層 鮎粒少量含む。
 2. 黄灰褐色土層 黒褐色土粒や多く含む。(天井部崩落土)
 3. 黄褐色砂質土層 砂粒主体。黑褐色土層少量化。
 4. 黄灰褐色土層 砂粒主体。黑褐色土粒少量化。黒褐色少量化含む。
 5. 黑褐色土層 (壁の崩落) 壁の崩落-1cmのブロック・ローム粒やや多く含む。
 6. 黑褐色土層 (壁の崩落による埋積か)
 7. 黑褐色土層 鮎粒少量化含む。
 8. 黄灰褐色砂質土層 9層よりやや細粒黑褐色土粒多い。
 9. 黄灰褐色砂質土層 砂粒多く含む。地盤少量化含む。
 10. 黑褐色砂質土層 12層の被熟変化部分。
 11. 黑褐色土層 地盤少量化含む。
 12. 黄灰褐色砂質土層 8層と同様だが、砂粒多い。

SI004A 斜面 (概況)
 K. 灰褐色土層
 1. 黑褐色土層 ローム微小粒やや多く含む。
 2. 黄褐色土層 ローム微小粒。
 3. 黑褐色土層 ローム微小粒。地盤微粒やや多く含む。黒褐色。
 4. 从黑褐色土層 3層中に2マド機器材の微粒少量化含む。
 5. 从黑褐色土層 3層中に2マド機器材の微粒多く含む。
 6. 黑褐色土層 黑褐色土層にロームの微小粒やや多く含む。

P1, P3, P4. 黄褐色土層 ロームの塊粒-径2cmのブロックやや多く含む。
 P2. 黄褐色土層 ロームの塊粒-径2cmのブロックやや多く含む。
 P5. 黑褐色土層 ロームの塊粒-径5mmのブロックやや多く含む。



第28図 SI004 (1)



第29図 SI004 (2)

SI005 (第30・31図、図版8・19・20)

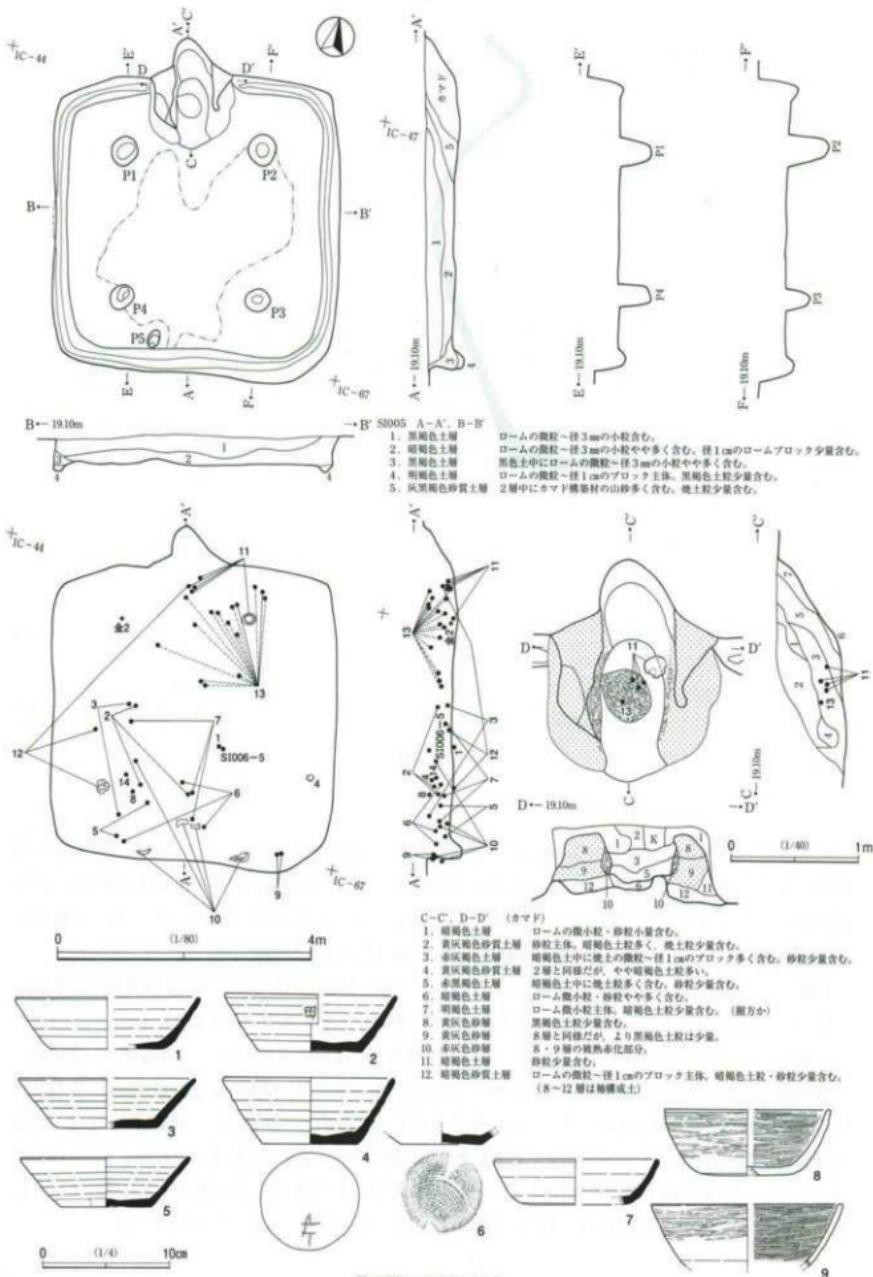
調査区北東部、1C-55グリッド他に位置する大型住居跡である。カマドは北北西側に設置される。竪穴の主軸はN-11°-W、規模は縦4.55m・横4.48m・深さ0.45mである。覆土は、下層がローム粒・ブロックを多く含む暗褐色土、上層がローム粒を含む黒褐色土である。主柱穴は、直径0.4m・深さ0.38m～0.64mの4基であり、出入口関連ピットは南辺西寄りの深さ0.22mの穴と考えられる。周溝はカマド部分以外で全周する。硬化面は、柱穴の内側でP2とP4を結ぶ方向で顯著であった。カマドの主軸は、N-15°-W、規模は縦1.7m・横1.31mである。両袖はロームブロックの基礎の上に黄灰色砂で造られ、内壁は被熱赤化が顯著である。

図化した遺物は、1～7が須恵器杯、8・9が土師器杯、10が須恵器壺、11～14が土師器壺である。須恵器杯の外面下部は、1・4～6が回転ヘラケズリ、他はロクロナデである。底部は、1～6が回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリで、胎土からも新治窯を含む常陸産とみられるが、7は火拂が顯著で、胎土・色調等から市原市永田不入窯の可能性がある。2の口辺部には「田」の字が線刻される。土師器杯は2点共内外面が磨かれ、9は内面黒色処理するものである。時期的には他の須恵器杯より後出のものと見られるので、流れ込みと考えられる。須恵器壺10は常陸産（木葉下窯群か）と見られる。土師器壺11～13は武藏型、14は小型壺でこれも武藏型の範疇と見られる。また、工具の可能性がある鉄製品（第38図2）も出土した。本住居跡に本来伴う遺物は、カマド内出土の土師器壺11・13、床面近く出土の須恵器杯1、土師器壺12、金属製品1と考えられる。

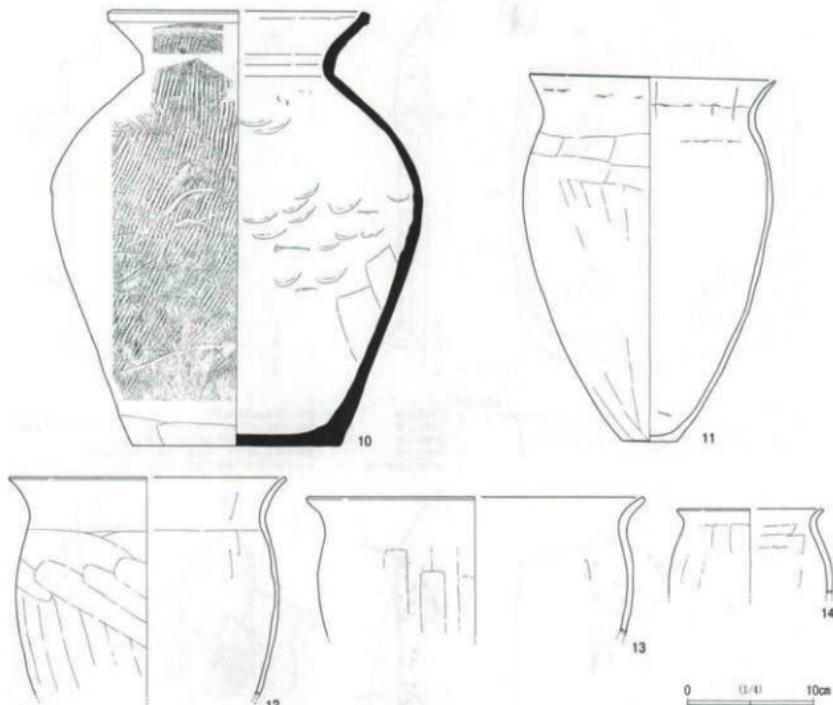
住居の規模は最も大きく、規模・構造及び遺物群の様相もSI004に近似している。

SI006 (第32図、図版9・20)

調査区北部中央寄り、1C-81グリッドに位置する。カマドは北側で西寄りに設置される。竪穴の主軸はN3-1°-W、規模は縦4.0m・横推定3.92m・深さは浅く0.28mである。西側及び東側壁上部が中・近世溝SD001、SD008で破壊されている。覆土は、ローム微粒を含む暗褐色土である。主柱穴は検出されず、



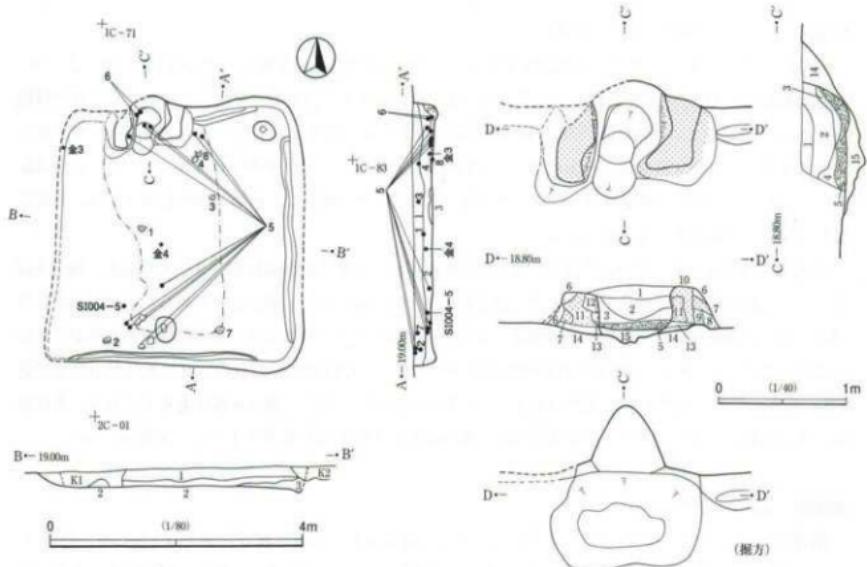
第30図 SI005 (1)



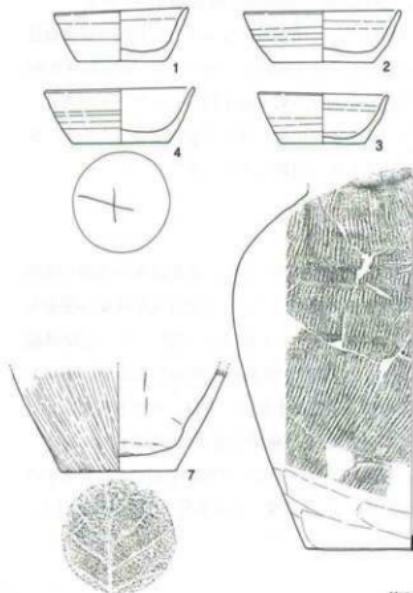
第31図 SI005 (2)

南辺寄りに検出された径0.3m～0.4m、深さ0.27mの穴が出入口関連ピットであろう。他に北東隅に径0.3m～0.4m・深さ0.1mの深いピットがあるが、機能不明である。周溝は西辺が溝SD001で破壊されたと思われ、カマド部分及び四隅を除いて全周するようである。カマドの主軸はN-9°-W、規模は縦0.92m・横1.4mである。両袖は黄灰色砂で構成され、内側は被熱赤化が顕著であった。

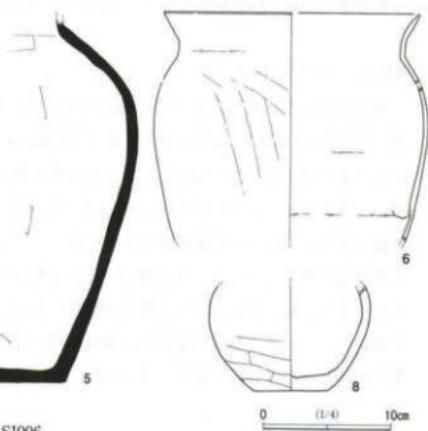
図化した遺物は、1～4が土師器杯、5が須恵器甕、6～8が土師器甕である。土師器杯4は底部に「十」字状の線刻がある。土師器杯の外面下部は1～4が回転ヘラケズリ、底部は2・4が回転ヘラ切りで、最終的には全てが全面回転ヘラケズリである。須恵器甕5は常陸産と見られ、土師器甕6は武藏型、7は外面がヘラミガキされ、底部に木葉痕がある常総型、8は焼成がやや不良な小型甕在地のものであろうか。また、滑石製鉗車の未製品（第37図2）・刀子（第38図3）・鉄製工具（第38図4）も出土した。本住居跡に伴う遺物は、カマド内出土の須恵器甕5、土師器甕6、床面近く出土の土師器甕8、及び鉄製品であろう。須恵器甕5は、SI006の覆土上層出土破片とSI004の須恵器杯がSI006覆土上層破片と接合したことから、SI006が使用されている時点でSI004は埋没途中段階であったことが推測できる。



- C-C', D-D' (カマド)
1. 灰暗褐色土層 カマド構造物の山砂や多く含む。他土粒少含む。
 2. 喀爾色土層 山砂少、他土粒や多く含む。
 3. 喀爾色土層 2層中に他土粒を多く含む。
 4. 灰暗褐色土層 喀爾色土中に山砂、他土粒（一往1cm）多く含む。
 5. 喀爾色土層 土粒1mm以上5mm以下ブロック主。
 6. 喀爾色土層 カマド構造物の山砂や多く含む。
 7. 黑褐色細砂質土層 山砂+喀爾色土粒、他土粒や多く含む。
 8. 黑褐色細砂質土層 喀爾色土粒や含む。
 9. 黑褐色細砂質土層 喀爾色土粒や含む。
 10. 黑褐色細砂質土層 鉄多く、他土粒少含む。
 11. 黑褐色細砂質土層 右端のカマド内側方面は被他赤化。
 12. 喀爾褐色土層 黑褐色土中に他土の微塊→径5mmのブロック多く含む。
 13. 黑褐色土層 12層と同様だが、黒褐色土粒少量。
 14. 喀爾褐色土層 ローム微小粒+喀爾色土+砂粒。
 15. 喀爾褐色土層 黑褐色土中に砂粒、他土粒、ローム較少含む。 (掘方か) (6~9、11~14層は袖構成土か)



第32図 SI006



SI007 (第33図、図版9・10・20・21)

調査区北東部、2C-16グリッド他に位置する。カマドは北側に設置される。竪穴の主軸はN-2°-W、規模は縦3.5m・横3.7m・深さ0.5mである。覆土はローム粒を多く含む暗・明褐色土である。主柱穴は検出されず、南辺近くに径0.3m~0.5m・深さ0.17mの穴が出入口関連ビットであろう。周溝はカマド部分以外は全周する。硬化面は北西部と南部の一部以外に認められた。カマドの主軸はN-2°-W、規模は縦1.05m・横1.6mである。袖はロームブロックを含む黒褐色土を基礎とし、中層に黄灰色砂を入れ、上層に砂粒を多く含む暗褐色土を載せている。

図化した遺物は、1・2が須恵器杯、3~7が土師器杯、8が土師器脚付盤、9が土師器蓋、10が支脚であり、壺は小破片しか出土しなかった。須恵器杯1・2は常陸産で、新治窯産と見られる2の底部には墨書「新」が書かれる。土師器杯の底部は、全て全面回転ヘラケズリである。8は口縁部の形状が蓋状であるが、脚部として続くと推測される曲面があることから、脚付盤と見られる。9は天井部中央に墨書「立」が書かれる。天井部下は凹凸が大きいことから蓋と判断したが、盤の可能性も考えられる。本住居跡に伴う遺物は、カマド内出土の須恵器杯1、床面近く出土の土師器杯3・4・7、支脚10である。

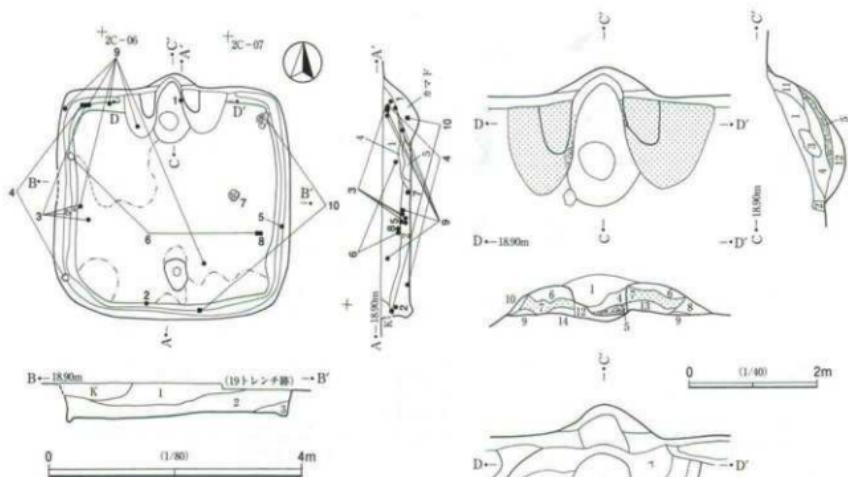
SI008 (第34図、図版10・21)

調査区中央部、3B-27グリッドに位置する。カマドは北西側に設置される。竪穴の主軸はN-42°-E、規模は縦3.22m・横3.69mで、深さは0.2mと浅い。覆土は、ローム微小粒を含む暗・明褐色土である。住居のはば中央が中・近世溝SD001で、カマドの西側が土坑状の擾乱で破壊されている。柱穴は東側で径0.2m・深さ0.2mのものが1基のみ確認され、他はSD001で破壊された可能性がある。周溝は北東辺以外の3辺に遡るが深いものである。カマドの主軸はN-50°-E、規模は縦推測0.9m・横現状1.1mである。

図化した遺物は、1~3が土師器杯であるが、1・2は褐色を呈し須恵器的である。4が須恵器高台付壺、5~8が土師器壺、9~11が土錐である。土師器杯の外面は全て下部回転ヘラケズリ、底部は1が回転糸切り後外周回転ヘラケズリ、2が全面回転ヘラケズリ、3が回転糸切り後手持ちヘラケズリである。須恵器高台付壺は内面底部に自然釉がかかる。土師器壺は5が常総型模倣、6・7が武藏型であろう。8は小型壺である。浅い覆土なので、以上の全ては本住居跡に本来伴う遺物と考えられる。

SI011 (第35図、図版10)

調査区東端部、3C-14グリッド他に位置する。位置としては、昭和47・48年に調査済みの第29号住居址（国分式期）に重なる部分が大きかったが確認のため掘り下げた結果、カマドの袖等及び床面の貼床も除去された状況で検出された。カマドは北西側に設置される。竪穴の主軸はN-35°-W、規模は縦3.8m・横3.78m・深さ0.36mである。主柱穴は4基または6基で、深さは0.4m~0.58mであるが、カマド両脇の2基も主柱穴の可能性が考えられる。ただし、概報の図（遺物出土状況）では、カマド両側のビットは図化されておらず、P4に相当する穴を貯藏穴としている。出入口施設関連ビットはP7であろう。床面の他の土坑状の落ち込みは貼床の掘方と考えられる。周溝は、カマド部分以外は全周する。カマドの主軸はN-3°-W、規模は縦1.3m・横は不明である。概報の図・写真では、土師器杯・壺が多く出土し、覆土中層に多くの貝殻が廃棄されている。

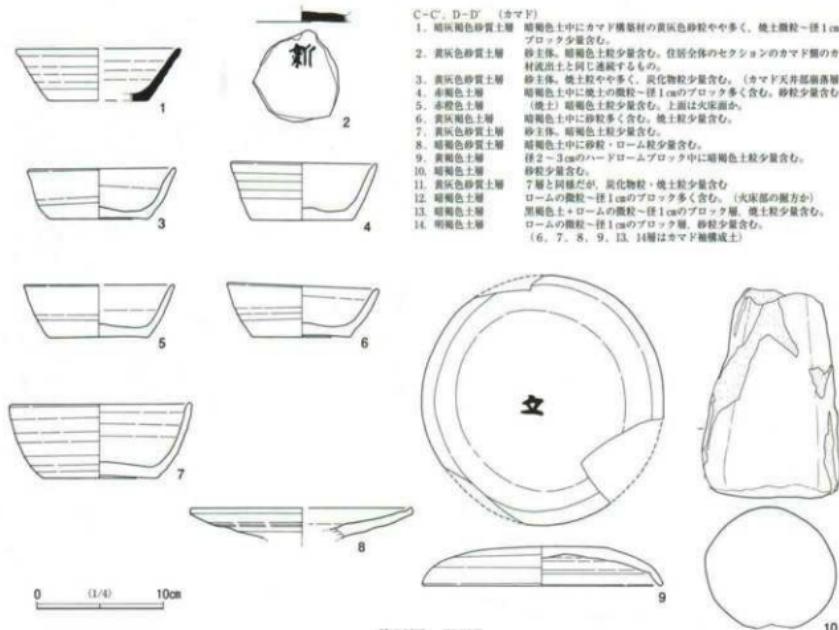


SI007 A-A', B-B'

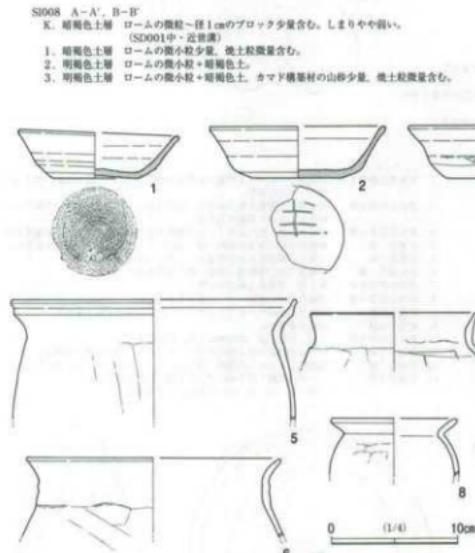
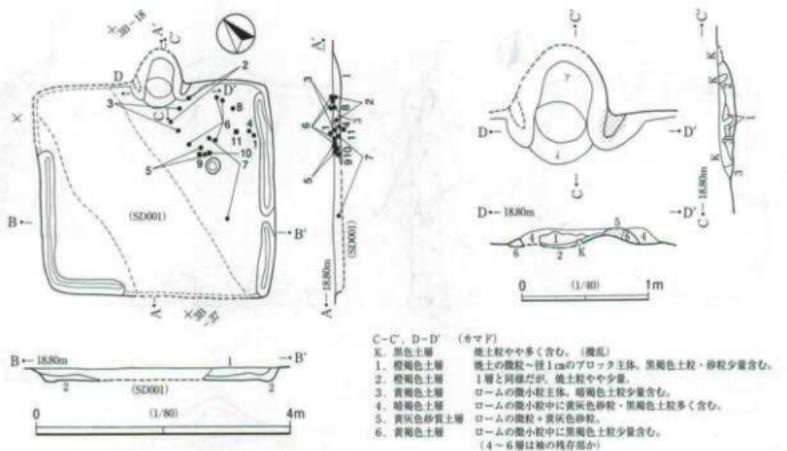
- 暗褐色土層 ロームの微粒～径3mmの小粒や多く含む。黒褐色土粒少量含む。
- 明褐色土層 ロームの微粒～径3mmの小粒、1層より多く含む。
- 暗褐色土層 ロームの微粒～径3mmの小粒少量含む。1層より黒褐色土粒や多く含む。
- 灰褐色砂質土層 2層中にカマド構築材の山砂少量含む。
- 黄灰色砂質土層 カマド構築材の山砂主体。暗褐色土粒少量含む。炭化物粒微量含む。

C-C', D-D' (カマド)

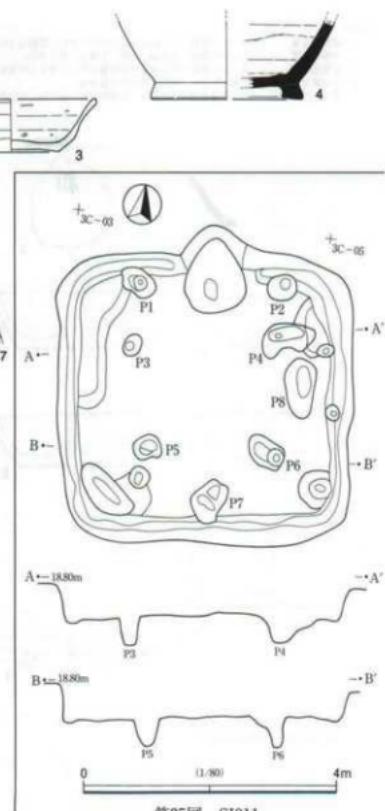
- 暗褐色砂質土層 細粒褐色土中にカマド構築材の黄褐色砂粒や多く、他土粒～径1cmのブロック少量含む。
- 暗褐色砂質土層 細粒褐色土中に塊状の微粒～径1cmのブロック多く含む。砂粒少量含む。
- 黄褐色砂質土層 砂主体。他土粒や多く、炭化物粒微量含む。(カマド天井部崩落層分)
- 赤褐色土層 細粒褐色土中に塊状の微粒～径1cmのブロック多く含む。砂粒少量含む。
- 赤褐色土層 (燃土) 細粒褐色土粒少量含む。上面は火床面か。
- 黄褐色土層 細粒褐色土粒少量含む。砂主体。細粒褐色土粒少量含む。
- 黄褐色土層 細粒褐色土中に砂粒～ローム粒少量含む。
- 黄褐色土層 径2～3cmのパラドロームブロック中に暗褐色土粒少量含む。
- 黄褐色土層 7層と同様だが、炭化物粒・焼土粒少く含む。
- 黄褐色砂質土層 ロームの微粒～径1cmのブロック多く含む。(火床部の掘方分)
- 黄褐色土層 黑褐色土粒～ロームの微粒～径1cmのブロック層。他土粒少量含む。
- 明褐色土層 ロームの微粒～径1cmのブロック層。砂粒少量含む。
- 黄褐色土層 6, 7, 8, 9, 13, 14層はカマド構築成土。



第33図 SI007

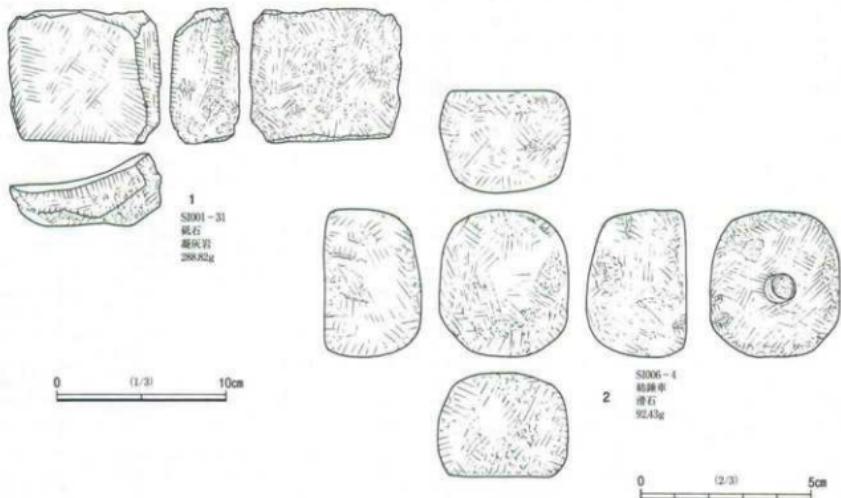


第34図 SI008

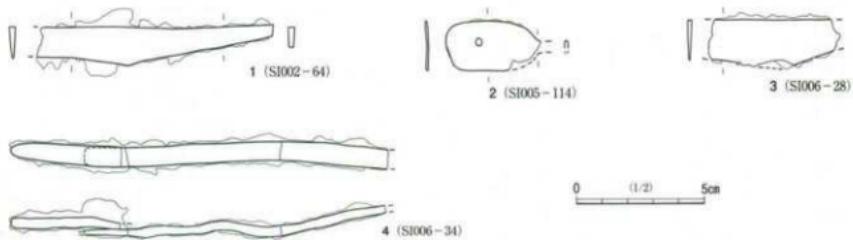




第36図 包含層出土奈良・平安時代土器



第37図 奈良・平安時代石製品



第38図 奈良・平安時代金属製品

第3表 奈良・平安時代土器観察表

遺物 番号	測定 番号	実測 番号	器質	器形	遺物番号	計測値(cm)	遺存率 (%)	色調		胎土	焼成	調査		備考			
								内面	外面			内面	外面				
S001	1	1	粗底器	杯	5.121417.38	13.5	6.4	3.8	60	黒褐色 (SYR3-6), 黒 褐色(SYR2-1)	微鉄粒生透, 白 色鉄粒微量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S001	2	2ab	土器器	甕	2.43.22.27.44, 45.46.49.50.51	37.7	10.1	29.8	90	に, に, 黒褐色 (SYR6-4)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-4)	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S001	3	3	土器器	甕	27	—	(23.7)	—	(24.6)	に, に, 黑褐色 (SYR6-4)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-4)	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S001	4	4	土器器	甕	4.30.34.40	(35.4)	—	(22.8)	30	に, に, 黑褐色 (SYR6-4)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-4)	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S001	5	5	土器器	甕	19	—	—	12.6	(1.1)	に, に, 黑褐色 (SYR6-4)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-4)	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S001	6	6	土器器	甕	10.11	—	—	4.0	(3.9)	底面100	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	1	15	粗底器	杯	1.10.12.14.66	12.2	7.4	3.7	60	黄褐色 (SYR7-3)	微鉄粒少量 (他刷)	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	2	14	粗底器	杯	80	—	—	11.8	6.7	3.6	100	黄褐色 (SYR7-1), 黄褐色 (SYR8-2)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面
S002	3	13	粗底器	杯	73	—	—	11.9	5.2	3.5	100	黄褐色 (SYR7-1), に, に, 黑褐色 (SYR6-4)	鉄粉や少ない	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面
S002	4	16	粗底器	甕	69	—	—	4.6	100	灰色(SYR1-6)	鉄粉少量 (SYR1-1)	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 上部 鉄粉ハケズリ,	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	5	9	土器器	杯	3.6.32	(14.0)	(8.0)	3.8	35	に, に, 黑褐色 (SYR7-4)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	6	4	土器器	杯	4.49.53	10.9	7.8	4.1	80	褐色 (SYR6-6)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 上部 鉄粉ハケズリ,	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	7	2	土器器	杯	71	—	—	12.9	8.9	4.4	90	に, に, 黑褐色 (SYR7-4), 青褐色 (SYR6-1)	鉄粉普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 手持もハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面
S002	8	9	土器器	杯	1.2.3.35.68, 26.77	—	—	12.8	8.8	5.1	60	青褐色 (SYR7-6), 明褐色 (SYR7-4)	鉄粉粒や多い	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面
S002	9	8	土器器	杯	3.67	(22.0)	(9.0)	4.2	20	に, に, 黑褐色 (SYR7-4)	鉄粉少量 (SYR7-4)	悪い	ロクロナダ	ロクロナダ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	10	3	土器器	杯	4.30.51.65	12.5	8.3	4.2	90	に, に, 黑褐色 (SYR7-4), 青褐色 (SYR6-6)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	11	1	土器器	杯	39	—	—	11.3	7.6	4.5	100	青褐色 (SYR7-4)	鉄粉普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ	全面回転ハケズ リ 土器表面
S002	12	6	土器器	杯	3.45	(22.6)	(9.0)	4.4	25	に, に, 黑褐色 (SYR7-4)	鉄粉粒や多い	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 下部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	13	23	土器器	杯	2	—	—	—	—	に, に, 黑褐色 (SYR7-4)	鉄粉少量 (SYR7-4)	良い	ロクロナダ	ロクロナダ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	14	10	土器器	高台付杯	72	(18.2)	6.8	4.9	90	に, に, 黑褐色 (SYR7-4), 青褐色 (SYR6-6)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	15	11	土器器	蓋・盤	23.18.29.30	(18.1)	—	(3.0)	30	に, に, 黑褐色 (SYR7-4), 青褐色 (SYR6-6)	鉄粉普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 上部 回転ハケズリ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	16	12	土器器	蓋・盤	1.2.3.35.68 —	—	(1.0)	35	に, に, 黑褐色 (SYR7-4), 青褐色 (SYR6-6)	鉄粉粒や多い	良好	ロクロナダ	ロクロナダ	全面回転ハケズ リ 土器表面			
S002	17	21	粗底器	甕	70	—	—	(3.4)	5	灰褐色 (SYR5-1)	鉄粉少量 (SYR5-1)	良い	ロクロナダ	ロクロナダ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S002	18	19	土器器	甕	6.67.79.85.86	(19.6)	—	(20.6)	10	褐色 (SYR6-6)	褐色 (SYR6-6)	微鉄粒や多い 少 量	良好	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-6)	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-6)	全面回転ハケズ リ 土器表面	
S002	19	18	土器器	甕	3.75.81	(20.6)	—	(3.7)	20	褐色 (SYR6-6)	に, に, 黑褐色 (SYR6-4)	鉄粉粒や多い	良好	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-6)	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-6)	全面回転ハケズ リ 土器表面	
S002	20	20	土器器	甕	37.82.85	(19.6)	—	(7.0)	15	褐色 (SYR6-6)	褐色 (SYR6-6)	鉄粉粒や多い 少 量	良好	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-6)	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-6)	全面回転ハケズ リ 土器表面	
S002	21	17	土器器	甕	88	—	—	(4.5)	(7.0)	15	に, に, 黑褐色 (SYR6-4)	に, に, 黑褐色 (SYR6-3)	鉄粉粒や多い	良好	ロクロナダ	ロクロナダ, 清 水, 銀色, 青色 (SYR6-3)	全面回転ハケズ リ 土器表面
S003	1	2	粗底器	杯	24	—	—	(7.2)	(0.6)	20	灰色(SYR1-1)	灰色(SYR1-1)	良い	ロクロナダ	ロクロナダ	全面回転ハケズ リ 土器表面	
S003	2	3	粗底器	蓋	5.7.~23.33/ S004-334	154	—	(2.6)	70	灰色(SYR1-1)	灰色(SYR1-1)	良好	ロクロナダ	ロクロナダ	全面回転ハケズ リ 土器表面		
S003	3	1	土器器	杯	13	—	—	(9.0)	(1.0)	10	に, に, 黑褐色 (SYR7-4)	微鉄粒普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ	全面回転ハケズ リ 土器表面	

遺傳 番号	標識 番号	形質	器形	遺傳子番号	形質値 (cm)			遺傳度 (%)	色調		胚性	種成	調整			備考		
					口徑	底径	高さ		内面	外面			内面	外面	内面	外面		
S003	4	4	土壌器	黒	12.343.03.12 14.15.16.19.12 22.26.27.28.20 31.32	14.5	8.4	17.9	60 に赤い褐色 (7.5YR5/3) (7.5YR5/4)	に赤い褐色 (7.5YR5/3) (7.5YR5/4)	石英細小粒 母貝殻や多い	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	脚部底位ヘラナ ダ、脚部底位ヘラ ナダ	木葉板	常軸型根板か		
S003	5	5	土壌器	黒	11.12.25	—	(6.4)	(8.4)	30 に赤い褐色 (7.5YR5/3) 黄褐色 (2.5YR4-5)	褐色 (7.5YR7/6)	微細粒や少々 良石粒や多い	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	木葉板	常軸型根板か		
S004	1	7	根茎器	杯	3.4.40.69	(12.4)	7.3	4.9	25 黄褐色 (2.5YR4-1)	黄褐色 (2.5YR4-1)	良石粒や少々 良石粒や多い	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手持ちヘラナダ	手持ちヘラナダ	電離源か		
S004	2	5	根茎器	杯	5.91	(12.2)	7.5	4.4	60 黄褐色 (2.5YR5-1)	褐色 (7.5YR5-1)	良石粒・石英粒や 少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手持ちヘラナダ	手持ちヘラナダ	電離源 (新) 黒か		
S004	3	8	根茎器	杯	7	(13.4)	9.0	4.4	20 に赤い褐色 (10YR7/2)	褐色 (3.5Y7/2)	微細粒小粒・微 細粒や少々	やや 不良	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手持ちヘラナダ	手手持ヘラナダ	電離源か		
S004	4	6	根茎器	杯	3.4.3/S309- 36	(12.6)	7.0	4.2	15 褐色 (3Y5/1)	褐色 (3Y5/1)	石英粒や多 母貝殻や少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	電離源 (新) 黒か		
S004	5	4	根茎器	杯	2.59.5/58006- 430	12.1	7.0	3.3	35 褐色 (8Y6/1)	褐色 (8Y6/1)	白色 (N6/1)	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	S004/S3096の優合、 武藏系 (南北企画小)		
S004	6	3	根茎器	杯	3.4.45.60	12.0	6.7	3.8	60 褐色 (8Y6/1)	褐色 (8Y6/1)	白色 (N6/1)	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	電離源 (南北企画小)		
S004	7	9	根茎器	杯	74	—	6.7	7.0	0.6	底部100 褐色 (5Y5/1)	褐色 (5Y6/1)	灰白・石英粒や 少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	—	回転ヘラナダ		
S004	8	2	土壌器	杯	3.61	(11.6)	8.0	3.9	10 に赤い褐色 (2.5YR4-1)	褐色 (2.5YR6-6) 灰白 褐色 (3YR4/1)	微細粒少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	全面回転ヘラケズ リ		
S004	9	1	土壌器	杯	2.3.33.30	14.6	—	(5.2)	20 黑色 (DN2/1)	褐色 (7.5YR7/6)	微細粒少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	口物語 - 内面体部黑色 地塊		
S004	10	10	土壌器	黒	5.79.60.85.88. 89.90.92	(20.6)	—	(29.5)	25 褐色 (5YR5-6), 黑色 (2.5YR4-1), 黑褐色 (5YR5-4)	褐色 (5YR6-6)	微細粒普通	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、脚部底位合 部のヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	全面回転ヘラケズ リ		
S004	11	11	土壌器	黒	2.5.28.78.87	(18.0)	—	(11.5)	20 に赤い褐色 (3YR5/4)	に赤い褐色 (3YR5/4)	微細粒や多い	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	全面回転ヘラケズ リ		
S004	12	13	土壌器	黒	2.5.82.84	(21.6)	—	(7.6)	15 に赤い褐色 (3YR4-4)	に赤い褐色 (3YR4-4)	微細粒や多 少	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	全面回転ヘラケズ リ		
S004	13	12	土壌器	黒か	12.12.20	(18.6)	—	(6.4)	20 褐色 (5YR6-6)	褐色 (5YR6-6)	微細粒や多 少	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	全面回転ヘラケズ リ		
S004	14	14	土壌器	黒	4.60	—	8.0	(2.5)	10 褐色 (7.5YR7/6), (7.5YR7/6), (7.5YR7/6), (7.5YR7/6)	に赤い褐色 (2.5YR3-4), 赤 褐色 (7.5YR4-1)	微細粒や多い、 持子コア少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	品出し・先部持 子、先コア少々	ヘラケズリ強めガ リ	ヘラケズリ		
S004	15	15	土壌器	黒	53	—	7.0	(2.2)	底部100 褐色 (7.5YR3-1)	に赤い褐色 (7.5YR3-1)	微細粒普通	やや 不良	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	粘土未発達状態 ナタナミ	木葉板	外側にカマドの山筋・ 粘土付着。武藏型。	
S005	1	5	根茎器	杯	1.12.6	(14.4)	9.0	4.0	20 に赤い褐色 (3YR5/4)	に赤い褐色 (3YR5/4)	微細粒や多 少	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	全面回転ヘラケズ リ	雷遁	
S005	2	4	根茎器	杯	3.6.36.89	(13.4)	8.0	4.5	60 褐色 (5Y5/1)	褐色 (5Y5/1)	微細粒普通、黑 色微細粒多い	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	根筋「田」か 実物 系	
S005	3	8	根茎器	杯	4.35.59	(13.8)	8.0	3.7	20 褐色 (5Y5/1)	褐色 (5Y5/1)	石英・石英粒や 少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	電離源 (新) 黒か	
S005	4	3	根茎器	杯	1.33	(13.3)	7.6	5.0	70 褐色 (7.5YR3/1)	褐色 (7.5YR3/1)	微細粒、葉層 持子少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	全面回転ヘラケズ リ	電離源 (新) 黑か	
S005	5	7	根茎器	杯	2.47.68	(13.2)	7.3	4.0	20 褐色 (5Y5/1)	褐色 (5Y5/1)	石英・石英粒や 少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	手手持ヘラナダ	全面回転ヘラケズ リ	電離源 (新) 黑か	
S005	6	14	根茎器	杯	80.88.92	—	6.2	(1.1)	10 褐色 (5Y6/1)	褐色 (5Y6/1)	石英微細粒多 少	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	下園回転ヘラケズ リ	全面回転ヘラケズ リ	電離源か	
S005	7	6	根茎器	杯	1.4.36.90.106	(12.6)	(8.6)	3.7	30 灰白色 (5Y7/1)	灰白色 (5Y7/1)	微細粒や少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ、下園 手手持ヘラナダ	ロロナダ	全面回転ヘラケズ リ	火打さき通り 木脚不人蔵か	
S005	8	2	土壌器	杯	57	(12.0)	(7.2)	5.1	10 明赤褐色 (2.5YR5-6)	明赤褐色 (2.5YR5-6), 黒 褐色 (5Y3/1)	微細粒少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ミオキ ナダ、ミオキ ナダ	ナダ、ミオキ ナダ	口持ヨコナ ド	口持ヨコナ ド	
S005	9	1	土壌器	杯	1.6.11.17	(14.0)	—	(4.0)	20 黑色 (NL5/1)	黑色 (NL5/1)	微細粒少々 (精 度を感じ)	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ナダ、ミオキ ナダ	ナダ、ミオキ ナダ	口持ヨコナ ド	口持ヨコナ ド	
S005	10	13	根茎器	黒	2.5.54.129.130. 131.132	(19.6)	16.4	33.3	60 に赤い褐色 (3YR5-2)	褐黃色 (3YR5-2)	石英・石英粒、 母貝殻微小粒 少々	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、作業部基 盤少々、頭部 底位ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	電離源 (木本底 層)	電離源 (木本底 層)	
S005	11	9	土壌器	黒	4.13.15.137. 139.140.144	19.3	4.4	28.1	60 褐色 (5Y6/6), に赤い褐色 (5Y5/4)	褐色 (5Y6/6)	微細粒普通	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、作業部基 盤少々、頭部 底位ヘラナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	口持ヨコナ ド	外側にカマドの山筋・ 粘土・スズ付着。武 藏型	
S005	12	10	根茎器	黒	1.2.23.134.137	(21.8)	—	(16.7)	20 褐色 (5Y6/6)	褐色 (5Y6/6)	微細粒や多 少	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ	ロロナダ	—	武藏型	
S005	13	11a	土壌器	黒	20.66/非実測 11/偏重21.8 12.20.21.8/解剖 67.68.11.6/解剖 13.39.44.6/69. 10.0.142	(26.8)	—	(16.6)	10 黒褐色 (7.5YR3/1)	黒褐色 (7.5YR3/1)	微細粒や多 少	良好	口 調整ヨコナ 脚部底位ヘラナ ダ、ヘラナダ	ロロナダ	ロロナダ	—	武藏型	

造物番号	博物番号	実施番号	部類	器形	遺物番号	計測値 (mm)			裏皮 (%)	色調		測定			備考		
						口径	底径	高さ		内部	外部	助土	被成	内部	外周	底部	
S005	14	12	土師器	小型壺	153	11.4	—	9.6	5	にぶい・黒褐色 (SYR5-4)	微砂粒普通	良好	口沿部ヨコナダ、 側面縦縫合・ハラケズ リ入り	口沿部ヨコナダ、 側面縦縫合・ハラケズ リ入り	—	武藏型か	
S006	1	3	土師器	杯	113	10.4	7.0	4.2	80	褐色	微砂粒普通、 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズリ	全面縫合・ハラケズ リ	—	
S006	2	1	土師器	杯	33	12.2	8.0	4.0	90	褐色 (SYR6-6)	微砂粒普通、 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズリ	全面縫合・ハラケズ リ	—	
S006	3	4	土師器	杯	18	(16.2)	6.6	3.9	60	黒褐色 (SYR6-3)	微砂粒・エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	全面縫合・ハラケズ リ	—	
S006	4	2	土師器	杯	15	11.8	7.6	4.2	90	褐色 (SYR6-6)	微砂粒やや多い	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズリ	全面縫合・ハラケズ リ	—	
						16.17.26.27.29. 30.31.32.33. 68.52001-2. 53347.4837/ 53009-94										二次焼成のため、外側 の半分剥離。下方スス 付着。難航。	
S006	5	8	土師器	壺	—	16.5	(27.9)	45	灰褐色 (SYR5-2)	微砂粒 (SYR5-1). 赤褐色 (SYR5-6)	石英粒やや多 い。微砂粒少 量	良好	ヘラナダ	ヘラナダ	頭部ヨコナダ、 側部タキナ、下部 縫合部にハラケズリ	頭部ヨコナダ、 側部タキナ、下部 縫合部にハラケズリ	難航か
S006	6	7	土師器	壺	15.4931	(189)	—	(17.3)	縫合部	褐色 (SYR6-6) (SYR6-4)	微砂粒やや多い。 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ、 ヘラナダ	ロクロナダヨコナ ダ、側面縫合・ハラ ケズリ入り。下部 縫合部にハラケズリ ナダ	ロクロナダヨコナ ダ、側面縫合・ハラ ケズリ入り。下部 縫合部にハラケズリ ナダ	—	外南ス付着 武藏型
S006	7	6	土師器	壺	24	—	9.0	(7.0)	縫合部10 底部10	褐色 (SYR6-6) (SYR6-4)	微砂粒やや多い。 エコリヤ少量	良好	ヘラナダ	頭部に近い段に ガサ	本垂直、ヘラナダ	電照	
S006	8	5	土師器	小型壺	23.43	—	5.6	(8.4)	縫合部5 底部10	褐色 (SYR6-6) (SYR7-4)	微砂粒やや多い。 エコリヤ少量	良好	ナダ	上部ロクロナダ、 下部縫合に近い段に ガサ	ヘラケズリ後ナダ	—	
S007	1	8	土師器	杯	26	(12.9)	(7.0)	3.9	30	灰褐色 (SYR7-2)	微砂粒少 量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズリ	ヘラエリ	電照	
S007	2	10	土師器	杯	17	—	(7.2)	(8.7)	底部5	灰褐色 (SYR6-1)	微砂粒少 量	良好	ロクロナダ	下部ハラケズリ 下持もハラケズリ	唐唐「新」企 電照「新」(新出)	難航	
S007	3	2	土師器	杯	56.14.2933	11.6	8.9	3.8	75	褐色 (SYR7-6)	微砂粒 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	—	—	
S007	4	3	土師器	杯	6.30	11.4	8.0	4.5	90	褐色 (SYR7-6)	褐色 (SYR7-6)	微砂粒やや多い。 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	—	—
S007	5	4	土師器	杯	22	(11.8)	(7.6)	4.0	50	褐色 (SYR7-6) 2-8	微砂粒 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	—	—	
S007	6	1	土師器	杯	21.28	11.8	7.8	4.1	90	褐色 (SYR6-6)	微砂粒 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	—	—	
S007	7	5	土師器	瓶	32	14.3	9.1	5.8	90	褐色 (SYR7-6)	微砂粒 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	—	—	
S007	8	7	土師器	甕付鉢	13.5.21	(17.4)	—	(2.0)	15	褐色 (SYR7-6)	微砂粒 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	下部縫合・ハラケ ズリ引抜空ゲザ	—	—	
S007	9	6	土師器	甕付小壺	67.9.20.27.29	18.2	—	31	80	褐色 (SYR7-6)	微砂粒 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、上部 縫合部にハラケズリ	—	器「J」企	
S008	1	3	土師器小	杯	7	(12.5)	6.7	3.7	50	褐色 (SYR6-4) (SYR6-3)	微砂粒普通 縫合部	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	全面縫合・ハラケズ リ	二重焼成で表面に 剥離・剥離あり。外周 縫合部にハラケズ リ付着。規則的。	
S008	2	2	土師器小	杯	34.43	(13.7)	(7.0)	3.9	40	にぶい・黒褐色 (SYR7-3)	微砂粒多 い	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	—	電照「新」企 電照「J」企	
S008	3	1	土師器	杯	23.1.42	(13.3)	(7.4)	4.0	30	灰褐色 (SYR6-4)	微砂粒少 量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	—	—	
S008	4	8	土師器	高台付鉢	12	—	(11.9)	(6.0)	縫合部10 底部2-7	灰褐色 (SYR6-6)	微砂粒普通	良好	ロクロナダ	ロクロナダ	底部内面(見込)に 自然焼け跡りかかる。	—	
S008	5	5	土師器	甕	26.27	(22.2)	—	(9.2)	縫合部 底部5	灰褐色 (SYR7-6)	微砂粒やや多い	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	骨盤横幅か	—	
S008	6	4	土師器	甕	23.18.19.23.29	(19.8)	—	(3.0)	縫合部50	褐色 (SYR6-6)	微砂粒普通 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	—	武藏型	
S008	7	6	土師器	甕	32.28	(12.9)	—	(4.0)	縫合部50	灰褐色 (SYR5-2)	微砂粒普通 エコリヤ少量	良好	ロクロナダ	ロクロナダ、下部 縫合部にハラケズ リ	—	武藏型か	
S008	8	7	土師器	小型壺	17	(16.0)	—	4.4	5	にぶい・黒褐色 (SYR6-6)	微砂粒普通	良好	ミコナダ	ロクロナダ	—	内外面二重焼成によ る内壁付着。	
3B	1	1	土師器	甕	1	—	(17.8)	9.8	5	にぶい・黒褐色 (SYR7-3)	にぶい・黒褐色 (SYR6-3)	石英粒少 量、良 好	根室ナダ	根室ナダ、下部 縫合部にハラケズリ	電照か	—	

第4表 奈良・平安時代土製品観察表

造物番号	博物番号	実施番号	器形	遺物番号	計測値 (mm)			裏皮	色調		測定			備考		
					最大径	最小径	高さ		内部	外部	助土	被成	外周			
S001	7	7	支脚	43	(142.0)	—	105.5	—	—	925	有	にぶい・黒褐色 (SYR7-4)	微砂粒普通、縫 合 (スカ) 入り	不良	手づくね→根室ナ ダ	—
S001	8	8	縫合革	35	—	34.0	48.0	48.0	9.5	58.9	無	にぶい・黒褐色 (SYR7-3)	微砂粒や少 量	良好	手づくね→根室ナ ダ	—
S001	9	9	土踏	29	(43.1)	—	(43.0)	—	(1.5)	31.8	有	にぶい・黒褐色 (SYR7-3)	微砂粒や少 量	良好	手づくね→根室ナ ダ	—
S002	32	22	支脚	87	197.0	—	96.0	—	—	1295	無	にぶい・黒褐色 (SYR7-4)	微砂粒多 い	良好	手づくね→根室ナ ダ	—
S002	10	11	支脚	19.31	160.0	—	108.5	—	—	1445	有	にぶい・黒褐色 (SYR7-4)	微砂粒普通	良好	手づくね→根室ナ ダ	—
S002	9	9	土踏	2.25	92.0	—	40	—	—	107.6	有	にぶい・黒褐色 (SYR7-4)	微砂粒普通 エコリヤ少 量	良好	手づくね→根室ナ ダ	—
S002	10	10	土踏	21	149.5	—	96.0	—	—	112.0	有	褐色 (SYR7-4)	微砂粒多 い	良好	手づくね→根室ナ ダ	—
S002	11	11	土踏	11	39.5	—	11.5	—	(3.5)	38	有	褐色 (SYR7-4)	微砂粒少 量	良好	手づくね→根室ナ ダ	—

2 包含層出土土器（第36図）

調査区内では、遺構外からも全城から縄文土器片が出土したが、奈良・平安時代土器も少量出土した。それらは、遺構内出土分も含めて種類別に重量を計測し、「第3章　まとめ」で記載した。ここで図化したもののは、調査区南西部3Bグリッドで出土した須恵器壺胴部下部破片である。外面胴部はタタキ目、底部近くはヘラナデで整形される。雲母微粒を多く含むことから、常陸産とみられる。

3 石製品（第37図、図版22）

1はSI001で出土した凝灰岩製砥石である。厚い板状石材の一面が主に使用され、凹面を呈する。他の面も裏面中央部や側面の一部を除いて使用されている。2はSI006で出土した滑石製紡錘車である。裏面は研磨によってほぼ水平に加工されており、中央部に径約6mmの円形の穿孔が約5mmの深さまで達している。表面以外の部位は、敲打により成形した後に研磨が行われているが、加工途中である。

4 金属製品（第38図、図版22）

全て鉄製品である。1はSI002出土の刀子で、刃部（左）は現長37mm・最大厚2.5mm、茎部（右）は現長57mm・最大厚3.0mm、重量13.95g、最大幅は刃部と茎部の境で15mmである。2はSI005出土の不明鉄製品で、幅19mm・長さ36mm・厚さ1mmの薄いヘラ状の板に径2.5mmの穴があり、割れ口から、片端に厚さ2mm・幅4mmの茎状のものが付くことが推測でき、匙状の鉄製工具とみられる。重量は3.03gである。3・4はSI006出土である。3は刀子で、現長52mm・最大幅2mm・最大厚2mm・重量5.49gである。4は幅7mm・厚さ2.5mm～4mm・現長120mmのものと43mmの棒状のもの2本が付着した状態の工具とみられる。重量は24.2gである。

第4節 中・近世

中・近世の遺構は、土坑3基（SK002～004）、井戸1基（SK006）、柱穴群（SB001）、溝11条（SD001～011）である。溝は、上層確認調査段階で近世～近代と判断したため、全体ではプランを確認したのみである。また、調査中に該期の土坑とみられたプランが散在していたが、部分的精査により覆土や壁の状況によって、近世～近代の耕作痕や植物の擾乱と判断したものが多い。なお、調査段階では縄文時代及び奈良・平安時代とした遺構もあったが、整理段階で中世遺物の出土が確認されたこと等により、所属時期を変更した遺構もある。

1 土坑

SK002～004は、3A-70・80グリッドに位置し、調査区西側境で検出されたため、全掘していない。表土からの土層を記録したので記す。ソフトローム面の上の厚さ5cm程の明褐色土層は新期テフラ層とみられ、その上の20cm～25cmの黒褐色土層（4）が近世の畑耕作土と考えられる。その上の厚さ10cm～20cmの暗褐色土層（3層）が現代の畑耕作土。その上に厚さ35cm前後の盛土（2層）があり、調査区西側の現代の土手に連続するものであろう。各土坑の上部は近世の畑耕作土に切られた形である。

SK002（第39図、図版10）

規模は縦1.0m以上・横0.52m以上、深さは0.38mである。底部からの深さ0.22mのピットがある。覆土は比較的しまりがあり、縄文土器・土師器小片が出土した。奈良・平安時代の土坑の可能性もある。

SK003・SK004（第39図、図版10）

SK003は、規模は縦0.66m以上・横0.5m以上、深さは0.57mである。SK004は、規模は縦0.87m以上・横0.7m以上、深さは0.56mである。覆土は、いずれもややしまりの弱い黒褐色土が主体であり、遺物は出土しなかった。中・近世の土坑と考えられる。

2 井戸

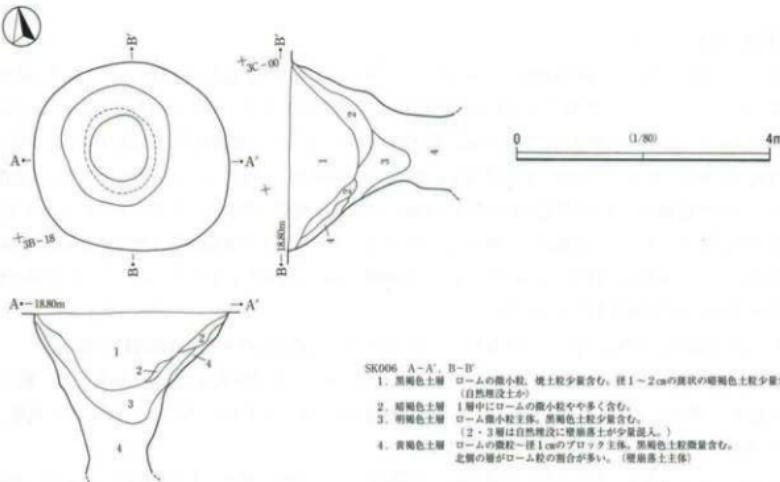
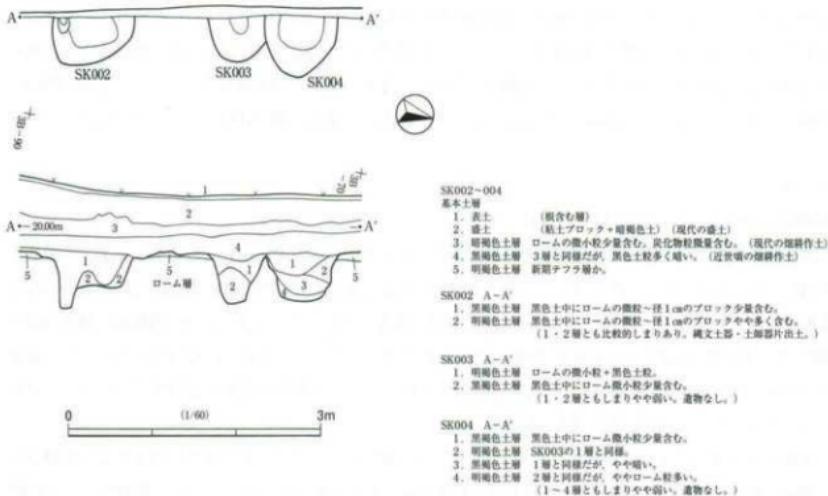
SK006（第39図、図版11）

調査区中央部、3B-09グリッド他に位置する。上端の形状は梢円形で、平面規模は長軸3.25m・短軸2.9mである。確認面から2.5mまでは土層断面を記録できたが、ピンポールは更に1.1m以上は潜ることが確認されたため、深さは3.6m以上である。覆土は下層はロームブロックを多く含むことから人為的埋土が主体で、最後はしまりのやや弱い黒褐色土がレンズ状に堆積し、自然埋没したことが推測される。遺物は、縄文土器片、奈良・平安時代土師器・須恵器片が主に出土したが、深さ2m程で中・近世瀬戸・美濃播鉢片（図版22）1点出土したため、中・近世の井戸と考えられる。

3 柱穴群

SB001（第40図、図版11）

調査区北西部、2B-24グリッド他に東西8m・南北7mの範囲で12基のピットが検出された。ピットの規模は、径40cm前後、深さは45cm前後が多いが、P6は62cmと深い。覆土は、しまりがやや弱い黒褐色土主体であるが、形状的には原始・古代の竪穴住居跡の柱穴同様、壁・底とも整っており、植物の根の痕跡ではない。遺物は、P6から中世と推測されるカワラケ片（第42図1）、P8から土師器片が出土した。



第39図 SK002～004・006

北西部のピットは、奈良・平安時代竪穴住居跡SI002の覆土に紛れて検出できなかった可能性もあり、それも想定すると、幅2.3m程ではほぼ平行したピットが主軸N-23°-Eで並ぶ（P3～5及びP6～8,11,12）掘立柱建物または柵列状の組み合わせで、南側はそれがハの字状に開く様な形状である。ただ、柱間は90cm・120cm・160cm等不統一で、直線上でもないことから、図上では建物や柵列は敢えて組んでいない。

4 溝

SD001～011（第3・41図、図版2・11）

調査区中央を南北に走るSD001は、上層確認調査トレンチ10で部分的に精査した結果、表土下の畑耕作土同様の土が入り、凹凸のある浅いもので、近世陶磁器類が混入していたこと、調査区北側の畑内の道と連続する様な状況から、近世～近代の道或いは側溝と推測され、それに直行する様なSD002・004・006・007等も、同時期の道跡或いは畑造成痕跡と考えられたため、プランを確認した程度である。なお、南部のSD001～002についてはトレンチを入れ、縄文～奈良・平安時代遺構と重複する箇所については、それらに合わせて整形した際に溝の覆土を観察した。

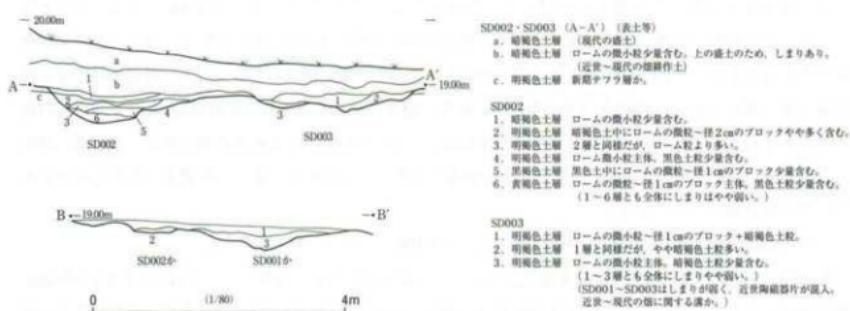
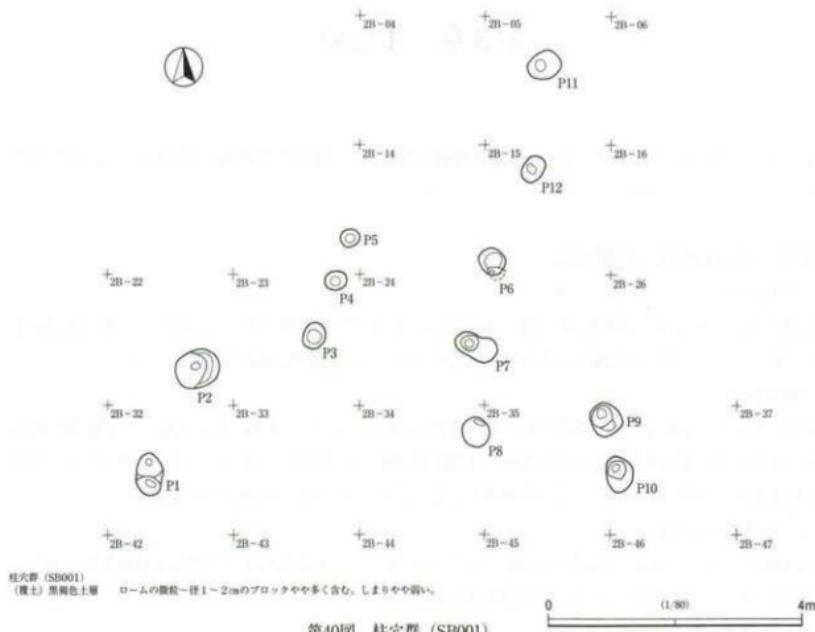
調査区南西部境に設置したトレンチ（A-A'）では、現代盛土の下に近世～近代の畑耕作土と推測される20cm～40cmの暗褐色土層が、SD002・003の上部を切る状況が確認された。よって、畑耕作より古い段階の溝であるが、SD002・003共に底は凹凸が激しく、覆土のしまりはやや弱く、ロームブロックを含む人為的な埋戻しが推測される。また、SD001とSD002の交差する箇所に入れたトレンチ（B-B'）では、SD001とSD002の新旧関係は不明瞭であったことから、これらは、ほぼ同時期の関連する溝であることが推測される。

5 遺物（第42図、図版22）

図化した遺物は、1が柱穴群SB001のP 6出土のカワラケ、2が調査区南端部4 B グリッド出土の青磁稜花皿である。これらは、整理段階で初めて確認できた中世遺物である。カワラケは底径5.6cm、底部は回転糸切り後ナデている。体部から底部の境に僅かな段がみられ、胎土は微砂粒・白色針状物質を少量含み、焼成は土師器に比較して不良、色調は内外面ともにぶい黄橙色（10YR7/4）で、中世カワラケの特徴を示す。青磁稜花皿は、口縁部を花卉状に整形し内面に唐草文を線描するものである。千葉県内では15世紀後半の城館跡で出土し、一般集落での出土例は少ないとされる。南方の花輪城跡と関連する遺構が近接して存在したことから、これらは、ほぼ同時期の関連する溝であることが推測される。4 B グリッドにはSD001～003の溝が存在するが、或いはこれらが中世にまで遡る溝である可能性も考えられる。

なお、図版22には、図化しないものも含めて、本遺跡出土の代表的な中・近世陶磁器類を並べた。
(上段) 青磁稜花皿、瀬戸・美濃志野皿、瀬戸・美濃鉄釉皿、瀬戸・美濃灰釉丸皿、京・信楽系碗、瀬戸・美濃灰釉鉢、(中段) 瀬戸・美濃灰釉徳利2点、肥前染付徳利、瀬戸・美濃鉄釉擂鉢、備前(か)擂鉢、(下段) 埋擂鉢、カワラケ、内耳土鍋2点、土器擂鉢

以上の内、青磁稜花皿、カワラケ、内耳土鍋、土器擂鉢は15世紀代、瀬戸・美濃志野皿、鉄釉皿、灰釉皿は17世紀初頭、他は18世紀代を中心とするものである。



第41図 溝断面

- SD002・SD003 (A-A') (表土等)
- 暗褐色土層 (現代の盛土)
 - 暗褐色土層 ロームの微粒少～多量含む。上の盛土のため、しまりあり。
 - 暗褐色土層 (近世～現代の堆積作土)
- SD003
- 暗褐色土層 ロームの微粒少～多量含む。
 - 明褐色土層 暗褐色土層中にロームの微粒～径2cmのブロックやや多く含む。
 - 明褐色土層 ロームの微粒少～多量含む。
 - 明褐色土層 ロームの微粒少～多量含む。
 - 黒褐色土層 黒色土中にロームの微粒～径1cmのブロック少～多量含む。
 - 黄褐色土層 ロームの微粒～径1cmのブロック主体。黑色土粒少～多量含む。(1～6層とも全体にしまりやや弱い。)
- SD003
- 明褐色土層 ロームの微粒～径1cmのブロック+暗褐色土粒。
 - 明褐色土層 1層と同様だが、やや暗褐色土粒多い。
 - 明褐色土層 ロームの微粒少～多量含む。(1～3層とも全体にしまりやや弱い。)
 (SD001～SD003はしまりが弱く、近世陶器類が混入、近世～現代の層に関する調査。)
- SD001・SD002 (B-B')
- 暗褐色土層 黒色土粒少～多量含む。
 - 明褐色土層 暗褐色土中にロームの微粒～径1cmのブロックやや多く含む。
 - 暗褐色土層 暗褐色土中にロームの微粒～径1cmのブロック少～多量含む。
 (1～2層ともしまりやや弱い。)
 (SD001とSD002の新旧関係は見られない。)



第42図 中世遺物

第3章 まとめ

隣接区の旧下花輪第二遺跡¹⁾（現：下花輪荒井前遺跡内）と合体した全体図を作成した（第43図）ので、上層遺構の参考とされたい。

第1節 旧石器時代～古墳時代

1 旧石器時代

IX層の黒曜石製使用痕のある剥片1点、IV層下部～V層の黒曜石製ナイフ形石器1点、III層上部の玉髓・頁岩・チャート製の二次加工のある剥片等22点からなる3文化層が検出された。

2 繩文時代

繩文時代早期（条痕文系期）炉穴2基（新旧関係も含めると4基）、前期（黒浜式期）竪穴住居跡3軒、前期（黒浜式期）土坑1基が検出された他、遺物は遺構外の包含層中からも黒浜式土器主体として、少量の早期土器片、微量の中～晚期の土器片が出土した。以下、注目される土器について記す。

（1）鶴ガ島台式土器

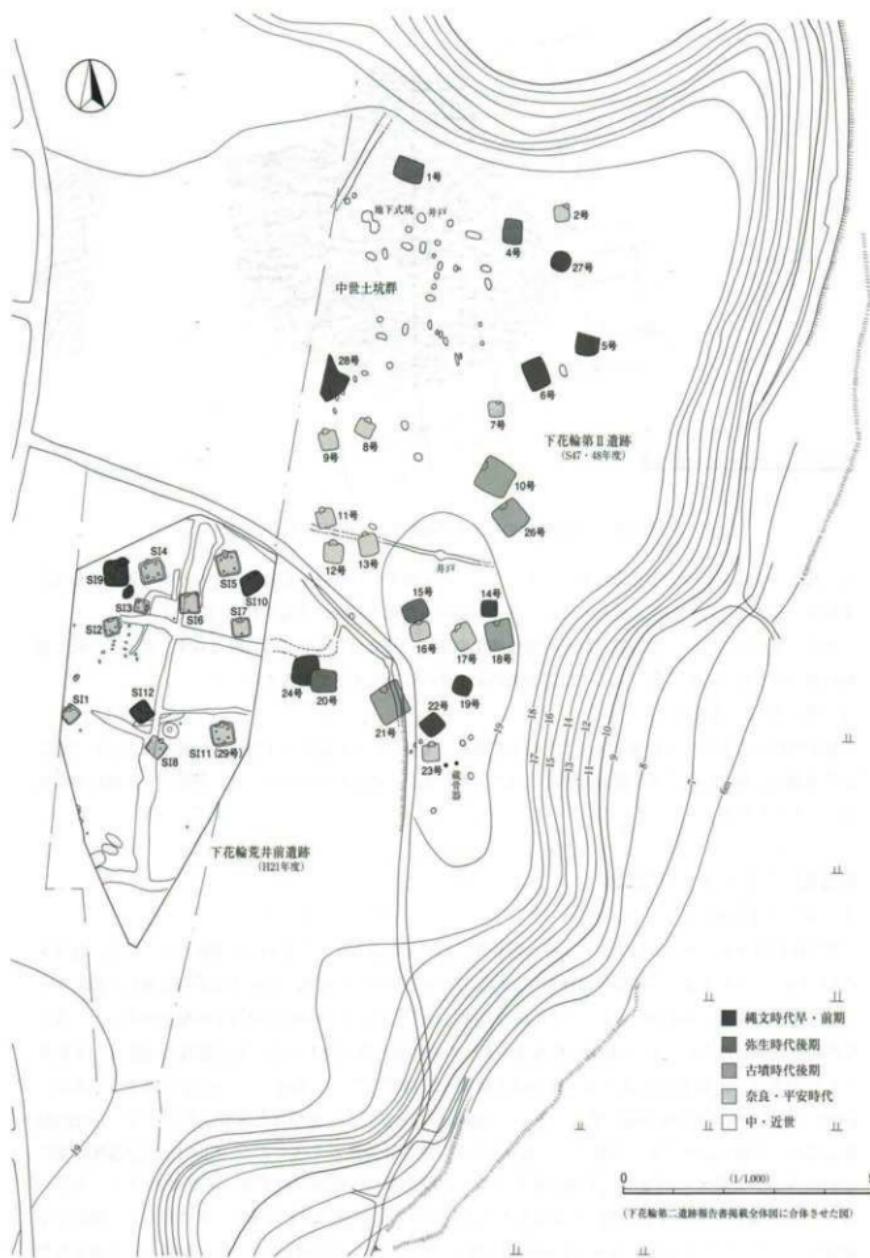
SK008出土の1（第10図）及び包含層出土の13（第16図）は、東京都八王子市神谷原遺跡V群C類²⁾に相当する。県内では出土例は少なく、西関東的な土器と思われる。

（2）黒浜式土器

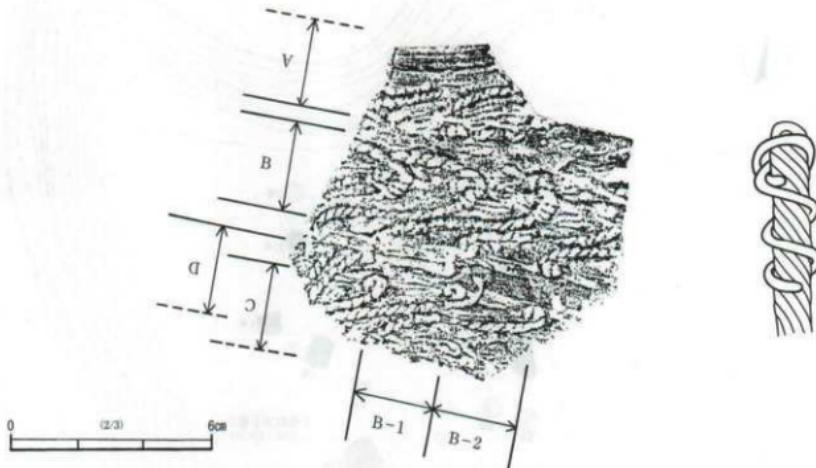
ややまとまって出土したSI009、SI012、包含層中とも文様組成に大差がなく、ほぼ同一時期のものと思われる。組成内容は各種の繩文施文の土器を主体に少量の沈線文様を持つ土器を伴う。繩文は粗い纖維を燃り合わせた太めの無節・単節繩文による羽状構成（おそらく菱形構成）をとるもの、附加条繩文及び結節繩文から構成され、結節繩文の多さが指摘される。間山2式に多用された組紐は1点もなく、正反の合の繩文も1点のみであった。沈線文様を持つ土器にはへらや半截竹管による雑な格子目文、斜線文、短沈線文、波状文（植房式を含む）、コンバス文、櫛齒状工具による菱形文、竹管の刺突文、微隆起線文がある。黒浜式盛期のものであろう。

（3）包含層出土の特殊な附加条繩文について（第44図）

第20図112で提示した特殊な附加条繩文について、ここで原体復元を試みたい。第44図に2/3大の拓影と施文単位すなわち原体の長さの単位及び原体の径の長さの単位を示した。施文単位全体が観察できるのはBで、A・CはBの原体を上下逆にして施文しており、Aは下端が口縁直下のなで調整によって磨り消され、Cは上端が破損のため観察できない。また、DはCの施文前に同じ向きで施されたもので、拓影左下端に痕跡が残る。Bの原体の長さは2.5cmで、附加した繩Rが上端でループ状に連続し、S字状にくねって下端に達している。下端は他繩自縛で附加した繩を軸繩に固定している。他繩自縛の結び目はB-1、B-2が1単位でその長さは2.6cmを測る。したがって、この原体の直径は $2.6\text{cm} / \pi \approx 0.8\text{cm}$ となる。問題は軸繩に附加した繩をどのように絡げたかであるが、拓影右にその絡げ方を復元した。ループ状に圧痕が現れる部分は軸繩よりやや浮かし気味に巻き付けたものと思われる。なお、軸繩の圧痕は回転方向に対し左下がりの水平に近い角度で各所に現れ、条の太さは原体そのものの太さに対して非常に細い。したがつ



第43図隣接調査区合体図



第44図 包含層出土の特殊な附加条縄文 拓影及び復元原体

て、軸繩は0段多条のLと考えられる。おそらく、12条前後のrの繩をLに撚り合わせたものと思われる。条の傾きが水平に近い角度で現れるのは、原体がしなった状態で回転施文されたためであろう。

以上のように、この土器に施された特殊な縄文原体は、軸繩が異例であるのみならず、附加した繩の初めの絡げ方が特異であるが、ここでは附加条の第1種の変種と考えておきたい。

3 弥生時代～古墳時代

弥生時代の土器は、隣接調査区（下花輪第II遺跡）で後期宮ノ台式期の土器・住居跡が検出されているが、本遺跡では明確な弥生土器片は出土しなかった。また、古墳時代については、後期の土師器片が微量出土したのみである。

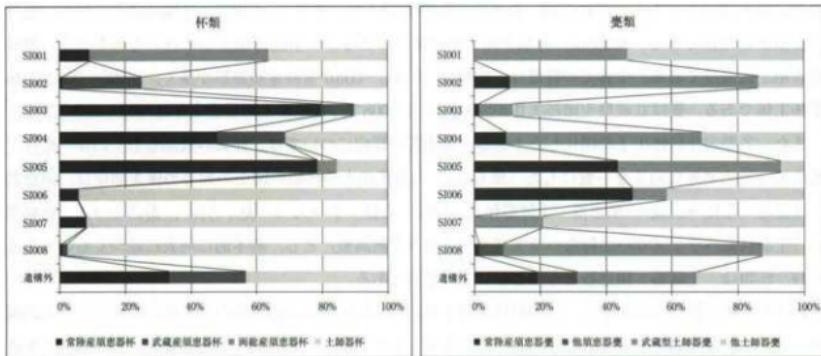
第2節 奈良・平安時代以降

1 奈良・平安時代

堅穴住居跡9軒が検出されたが、1軒は昭和47・48年度の調査されたものの可能性が高いので、残り8軒から出土した須恵器・土師器等は種類・産地別の重量を計測した結果、その組成から遺構毎の傾向がうかがえた（第5表、第45図）。なお、住居跡の遺物には、住居に伴うものと埋没後の廃棄があるが、大きな時期差はみられなかった。SI001は杯類は少ないため組成比較は難しいが、須恵器杯は常陸産と下総産のものがあり、土師器杯は4割弱、甕類は武藏型と常総型に似た在地産のものが約5割ずつである。SI002は須恵器杯は武藏産が他に較べて多く、土師器杯は8割近く、甕類は武藏型が主体である。SI003は須恵器杯は常陸産が8割程、武藏産と土師器が少量、甕は在地産が主体である。SI004は須恵器杯が常陸産が約5割、武藏産が約2割、土師器杯が3割、甕は武藏型土師器が約6割、在地産が3割である。SI005は須恵器杯が常陸産約8割、上総永田不入窯産が1点、2割弱が土師器杯、甕は復元した常陸産須恵器が1点あるので4割余、武藏産土師器が6割近くである。SI006は杯類は殆ど土師器、甕は復元した

第5表 奈良・平安時代土器重量組成表（単位：g）

種類	頸壺器								土師器								総計			
	器種	杯類				甕類				計	杯類				甕類					
		常陸	武藏	上越	下總?	計	宮代	他	計		武藏型	常陸型系	計	計	武藏型上師器	他土師器				
產地	國化					107	107			0	107				76	1,289	1,365	1,365	1,472	
	非國化	18					18			0	18	71	168	281	449	530	538			
	計	18	0	0	107	125	0	0	0	125	71	244	1,570	1,814	1,885	2,010				
SI001	國化						681	159		159	840	1,538	456		456	1,994	2,834			
	非國化	26	30				56	24		24	80	671	812	235	1,047	1,718	1,798			
	計	26	711	0	0	737	183	0	183	930	2,209	1,268	235	1,503	3,712	4,632				
SI002	國化	201	26				227			0	227	29			1,945	1,045	1,074	1,301		
	非國化	67	7				74	21		21	95	6	137	127	264	279	365			
	計	268	33	0	0	301	21	0	21	322	35	137	1,172	1,309	1,344	1,666				
SI003	國化	392	208				600			0	600	110	841	273	1,114	1,224	1,824			
	非國化	226	60				286	480		480	766	291	2,067	1,239	3,306	3,597	4,363			
	計	618	268	0	0	886	480	0	480	1,366	401	2,908	1,512	4,420	4,821	6,187				
SI004	國化	604		69			673	2,607		2,607	3,280	115	1,876		1,876	1,991	5,271			
	非國化	336					336	125		125	461	72	1,202	435	1,637	1,709	2,170			
	計	940	0	69	0	1,009	2,732	0	2,732	3,732	3,741	187	3,078	435	3,513	3,700	7,441			
SI005	國化						0	1,867		1,867	1,867	537	284	811	1,095	1,632	3,499			
	非國化	39	2				41	89		89	130	105	130	886	1,016	1,121	1,251			
	計	39	2	0	0	41	1,956	0	1,956	1,956	1,997	642	414	1,697	2,111	2,753	4,750			
SI006	國化	63					63			0	63	1,290			0	1,290	1,353			
	非國化	78	5				83			0	83	351	65	245	310	661	744			
	計	141	5	0	0	146	0	0	0	146	1,641	65	245	310	1,951	2,097				
SI007	國化						0	96	96	96	207	405	84	489	696	792				
	非國化	3	4				7	20	9	29	36	92	688	95	783	875	911			
	計	3	4	0	0	7	20	105	125	132	299	1,093	179	1,272	1,571	1,703				
SI008	國化						0	96	96	96	207	405	84	489	696	792				
	非國化	3	4				7	20	9	29	36	92	688	95	783	875	911			
	計	3	4	0	0	7	20	105	125	132	299	1,093	179	1,272	1,571	1,703				
計	2,053	1,023	69	107	3,252	5,392	105	5,467	8,749	5,485	9,207	7,045	16,252	21,737	30,486					
遺構外	281	195	0	0	476	451	279	730	1,206	365	843	769	1,612	1,977	3,183					
総計	2,334	1,218	69	107	3,728	5,843	384	6,227	9,965	5,850	10,050	7,814	17,864	23,714	33,669					



第45図 奈良・平安時代土器重量組成グラフ

第6表 奈良・平安時代堅穴住居別土器類向表

(產地→フォルム (口径/底径: 小→大, 器高: 小→大) →整形 (全面回転ヘラケズリ→手持ちヘラケズリ→糸切り無調整)

遺構	須恵器杯等				土師器杯等				土師器甕	年代観	
	坪田 番号	產地	底部整形	口径/ 底径	器高	坪田 番号	底部整形	口径/ 底径	器高		
SI001	1	土師?	全面回転ヘラケズリ	2.11	3.8					常能型模倣	9世紀Ⅱ～Ⅲ
SI002	1 2 3	武藏 武藏 武藏	外周回転ヘラケズリ 外周回転ヘラケズリ 糸切り廻し	1.65 1.76 2.29	3.7 3.6 3.5	5 6 7 8 9 10 11 12 14	(模擬型) 手持ちヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 手持ちヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 手持ちヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ (高台付)	1.43 1.40 1.45 1.45 1.50 1.51 1.51 1.58 1.50	3.8 4.1 4.4 5.1 4.2 4.2 4.5 4.4 4.9	武藏型	8世紀後半 (Ⅴか)
SI003	1	武藏	外周回転ヘラケズリ			3	全面回転ヘラケズリ			武藏型	8世紀後半(Ⅴか)
SI004	1 2 3 4 5 6	常陸 常陸 常陸 常陸 武藏 武藏	手持ちヘラケズリ 手持ちヘラケズリ 手持ちヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 外周回転ヘラケズリ	1.43 1.63 1.68 1.83 1.73 1.79	4.9 4.4 4.4 4.2 3.3 3.8	8 9	全面or外周回転ヘラケズリ (黒色処理, 磨き 流れ込みか)	1.45	3.9	武藏型	8世紀後半 (Ⅴか)
SI005	1 2 3 4 5 6 7	常陸 常陸 常陸 常陸 常陸 常陸 上毛	手持ちヘラケズリ 手持ちヘラケズリ 手持ちヘラケズリ 手持ちヘラケズリ 手持ちヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ	1.60 1.68 1.73 1.75 1.83 1.83 1.47	4.0 4.5 3.7 5.0 4.0 4.0 2.7	8 9	(黑色処理, 磨き) 手持ちヘラケズリ (内面磨き) (8・9共流れ込みか)	1.81	5.1	武藏型 常陸産須恵器	8世紀後半 (Ⅴか)
SI006						1 2 3 4	全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ	1.49 1.53 1.55 1.55	4.2 4.0 4.2 3.9	常能型 常陸産須恵器	8世紀後半 (Ⅴか)
SI007	1 2	常陸 常陸	不明 手持ちヘラケズリ (墨書き)	1.63		3 4 5 6 7	全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ 全面回転ヘラケズリ (墨)	1.30 1.43 1.51 1.51 1.57	3.8 4.5 4.0 4.1 5.8		8世紀後半 (Ⅴか)
SI008						1 2 3	外周回転ヘラケズリ (堅密的) 全面回転ヘラケズリ (堅密的) 全面手持ちヘラケズリ	1.87 1.96 1.80	3.7 3.9 4.0	常能型模倣	9世紀Ⅱ～Ⅲ

常陸産須恵器が1点あるので約5割, 在地産土師器甕が4割余である。SI007は杯類は殆ど土師器, 甕は約8割が在地産である。SI008は, 杯類が殆どが土師器であるが, 下総産須恵器に近いものも含み, 甕は約8割が武藏型である。全体での特徴は, 杯類は, SI003～005が常陸産須恵器が多く, SI006～008が土師器杯主体である。甕は武藏型土師器主体がSI002・004・008で, 在地産土師器甕主体はSI03・007である。

また, 各堅穴住居跡出土の図化した土師器・須恵器の傾向については, 杯類の底部整形, 口径/底径, 器高等, 甕の產地傾向等を一覧にした(第6表)。各遺構出土の杯類の図中の順番の優先順位は, 須恵器杯は產地(常陸→武藏), 須恵器・土師器杯共, 口径/底径: 小→大(=開く方向), 器高小→大, 底部整形(全面回転ヘラケズリ→手持ちヘラケズリ→糸切り後無調整)とし, 基本的に同表に基づくものである。なお, 杯類は, 土師器・須恵器とも殆どがロクロ整形である。

以上の組成や杯類の傾向から, 8世紀第3四半期から常陸国新治窯の製品が安定的に供給され, 北武藏産とくに南比古窯の製品も少量ながら若干時期をずらして供給されるという他地域産須恵器の傾向³⁾や流山市地域の土器編年研究⁴⁾を参考とした結果, 各遺構の年代を推測した。出土量が少量のものは判断が難しいが, 概ね, I期: 8世紀後半: SI002～SI007, II期: 9世紀中葉から後半: SI001・008と考えられる。ただ, 敢えて細分すれば, SI004とSI006の同一遺物の出土状況等から, Ia期: 8世紀第3四半期中心:

SI004・005、I b期：8世紀第Ⅳ四半期中心：SI002・003・006・007の時期的違い。または、住居形態の違いから同時期存在で性格の異なる住居の可能性も考えられる。

これに伴い、住居形態や集落の変遷は、8世紀後半には調査区北端部で大型でカマドや柱穴等が充実した2軒が並び、その南側に（或いは8世紀末には）調査区北部で柱穴が少ない4軒が東西に並び、半世紀以上の空白の後の9世紀後半に調査区中央部で住居が浅く柱穴も少ない2軒が造られたこと、つまり、調査区内では集落が南下したことが推測できる。なお、隣接区の奈良・平安時代の竪穴住居と連続する集落であることは明らかであるが、時期は「国分式土器」以上の記載はないため、全体では南下か拡散したのかは不明である。

なお、奈良・平安時代土器の産地・器種・年代観・墨書き解釈等については、栗田則久普及資料課長、今泉潔主席研究員、糸川道行上席研究員の教示を得たが、微妙な見解の相違があったため、組成や法量等を分析した結果、最終的には井上の判断によるものである。

2 中・近世

隣接する旧下花輪第二遺跡の北西部では、地下式坑2基・粘土貼土坑2基・竪穴建物跡と推測される竪穴2基等の中世遺構群が検出され、南部の近世とみられる溝も連続することがわかる。恐らく、旧第二遺跡西側と今回調査区の北部が、今回調査区の遺物から15世紀代の中世集落の中心部であることが推測できる。その後の16世紀代は空白となるが、近世は道や畑作関係とみられる溝と遺物等から、17世紀初頭から畑耕作が開始されて現代に至ったことが考えられる。

注1 下津谷達男 他 1973 「流山市大坪台・下花輪第二遺跡調査概報」下花輪第二遺跡調査団

2 佐々木克典・新藤康夫 他 1982『神谷原Ⅱ』八王子市柄田遺跡調査会

3 赤井博之「茨城県の須恵器編年」他 1997『古代生産史研究会'97シンポジウム 東国の須恵器』

古代生産史研究会

4 川根正教 他 2000『加地区遺跡群Ⅳ』流山市教育委員会、栗田則久 他 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器時代～奈良・平安時代）－』（財）千葉県教育振興財團

写 真 図 版



道路周辺航空写真 1975年撮影



調査前状況（南から）



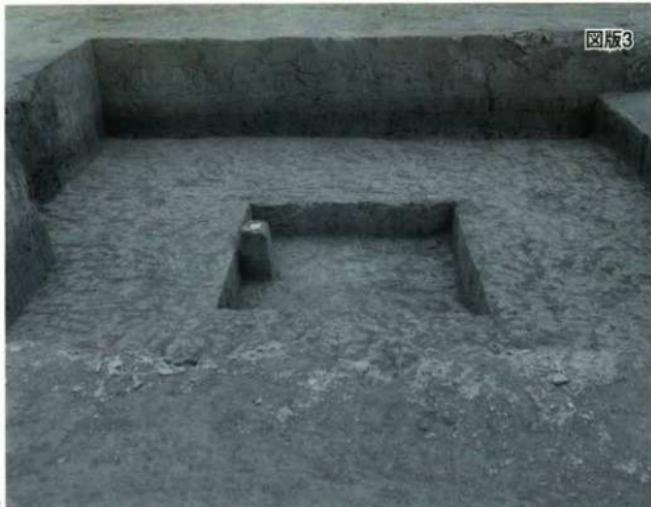
調査前状況（北から）



(左) 1トレンチ (土手, SI001)
(右) 17トレンチ (SI005)



(左) 19トレンチ (SI007)
(右) 10トレンチ (SD001)



下層第1文化層（2C-91）（南から）



下層第2文化層（1B-42）（南から）



下層第3文化層（4B-22他）（東から）

図版4



SI009, SK007・008全景（南から）



(左) SI009上層遺物出土状況
(右) SI009下層遺物出土状況



(左) SK007炉半裁（南から）
(右) SK008炉半裁（北西から）



SI010全景（南から）



SI012全景 (南から)

(左) SI012土層・遺物出土状況
(右) SK002全景 (東から)(左) SK005全景 (南東から)
(右) SK005遺物出土状況

SI001全景 (南東から)



SI001遺物出土状況





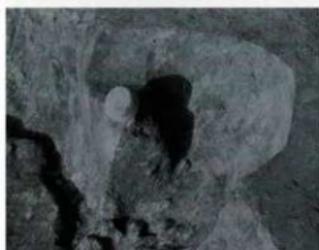
(左) SI001炭化物・焼土検出状況
(右) SI001カマド内遺物出土状況



SI002全景（南から）



(左) SI002土層、遺物出土状況（1）
(右) SI002遺物出土状況（2）



(左) SI002カマドA内遺物出土状況
(右) SI002カマドB断面



(左) SI002カマドB内遺物出土状況
(右) SI002カマドB掘方



SI003全景 (西から)

(左) SI003土層, 遺物出土状況
(右) SI003カマド袖断面

SI004全景 (南から)

(左) SI004土層, 遺物出土状況
(右) SI004カマド内遺物出土状況



(左) SI004カマド軸断面
(右) SI004カマド掘方



SI005全景（南から）



(左) SI005土層、遺物出土状況（1）
(右) SI005遺物出土状況（2）



(左) SI005カマド内遺物出土状況
(右) SI005カマド掘方



(左) 調査風景（1）
(右) 調査風景（2）



SI006全景（南から）

(左) SI006土層, 遺物出土状況 (1)
(右) SI006遺物出土状況 (2)(左) SI006カマド袖断面
(右) SI006カマド掘方

SI007全景（南から）



(左) SI007土層、遺物出土状況
(中) SI007カマド袖断面
(右) SI007カマド掘方



SI008全景（南西から）



SI008遺物出土状況



SI011全景（南から）



(左) SK002・003・004（南から）
(右) SK003・004（東から）

(左) SK006全景（南から）
(右) SK006上層



柱穴群 (SB001) 他 (南から)

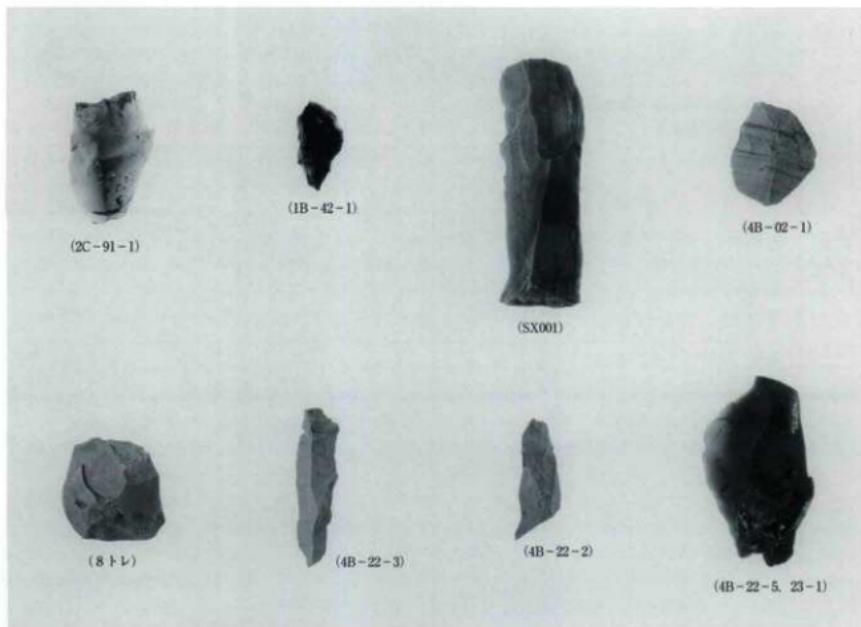


溝プラン他 (南から)

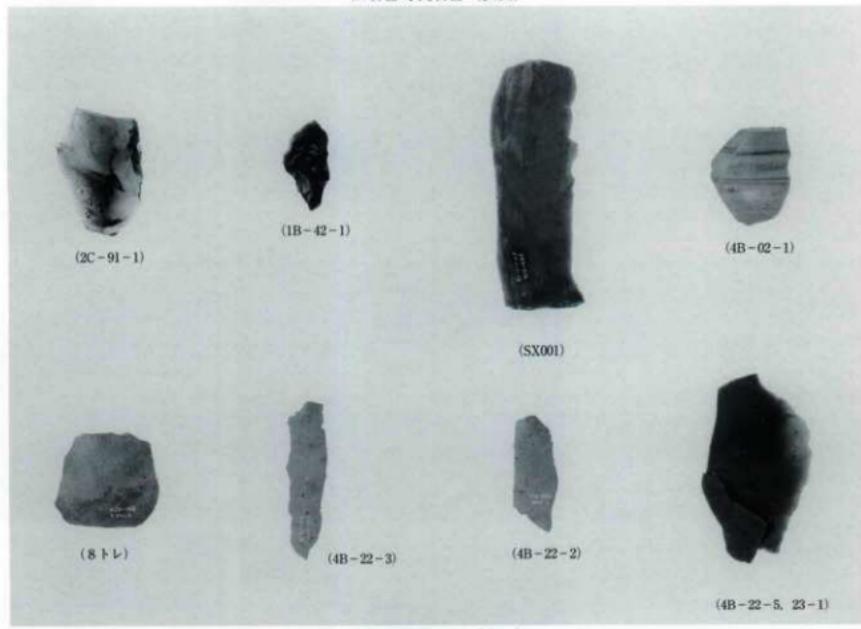


(左) SD002・003 (トレンチ)
(右) SD001・002 (トレンチ)

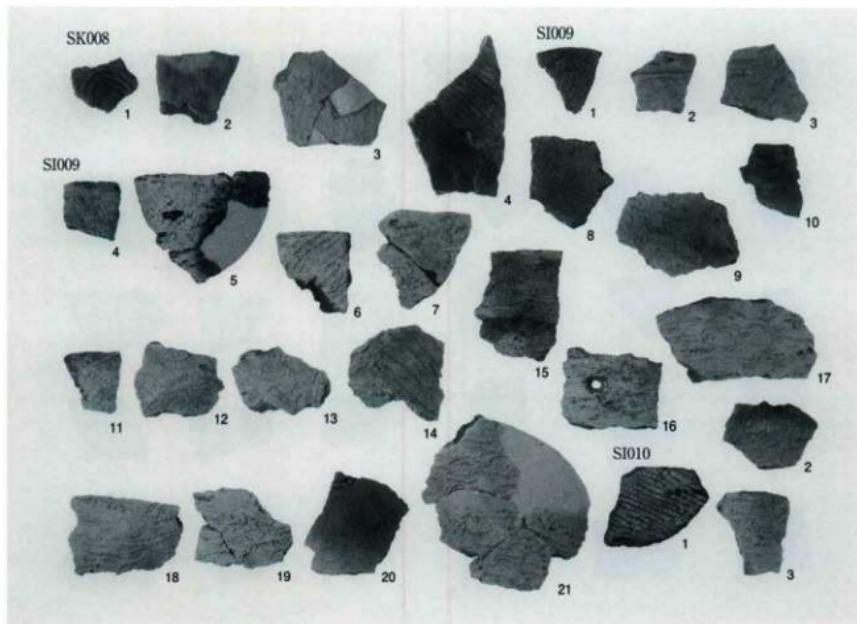




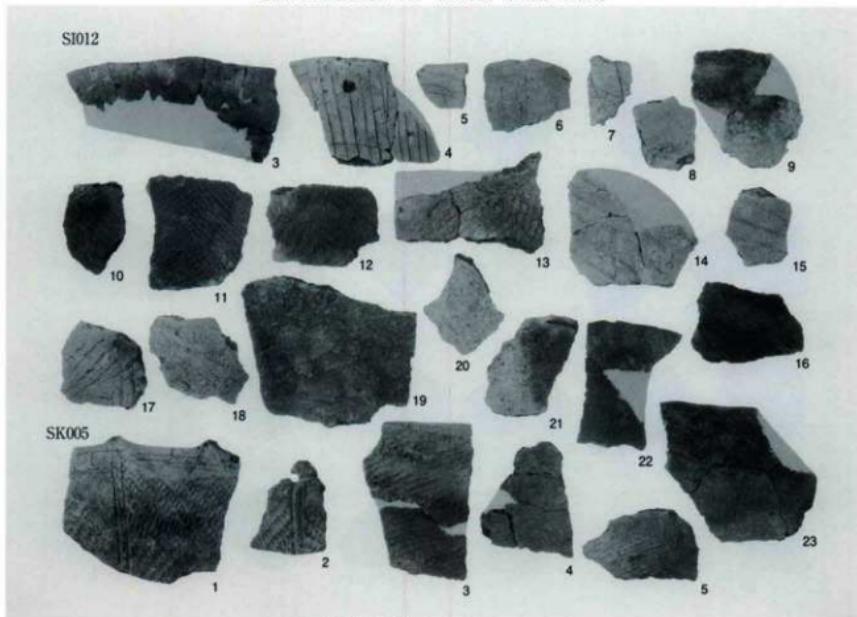
旧石器時代石器（表面）



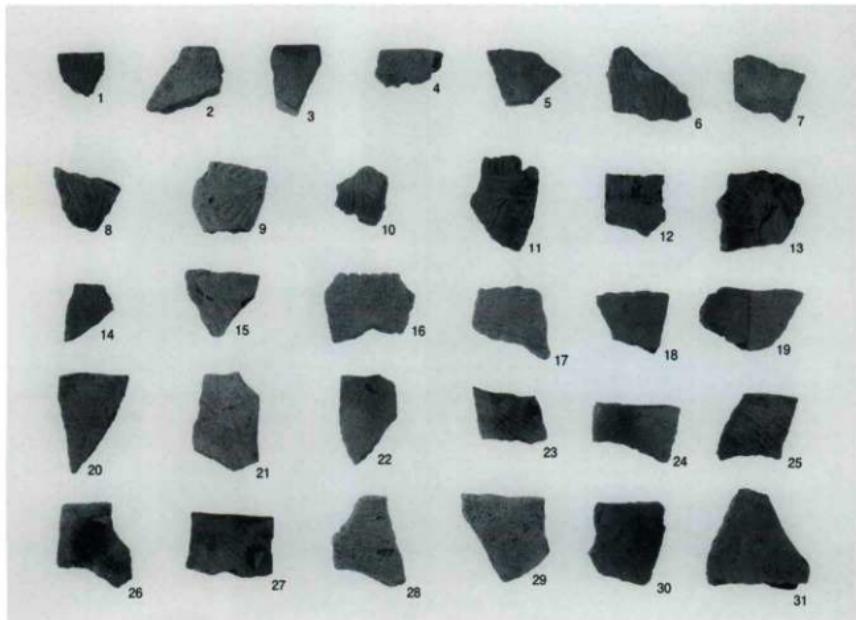
旧石器時代石器（裏面）



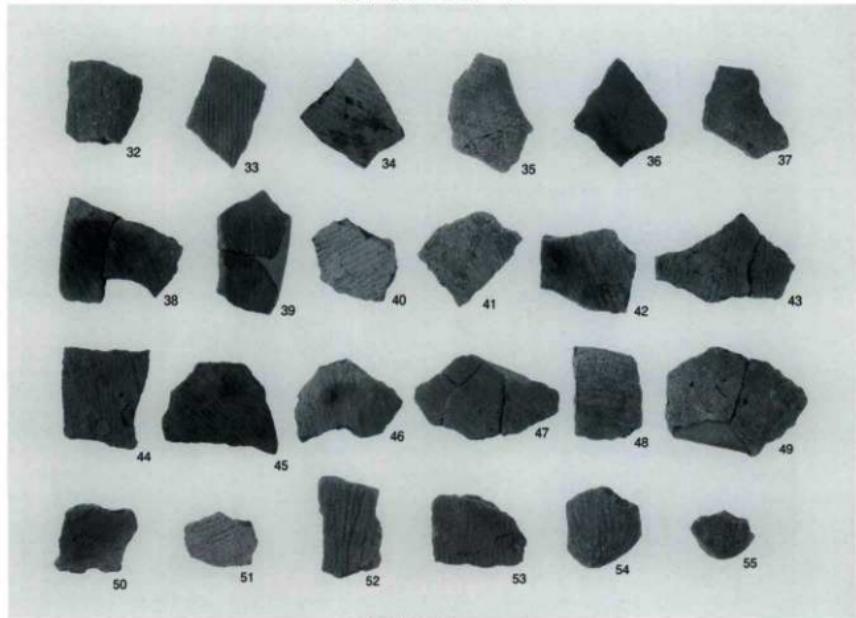
遺構出土縄文土器（1）(SK008, SI009, SI010)



遺構出土縄文土器（2）(SI012, SK005)



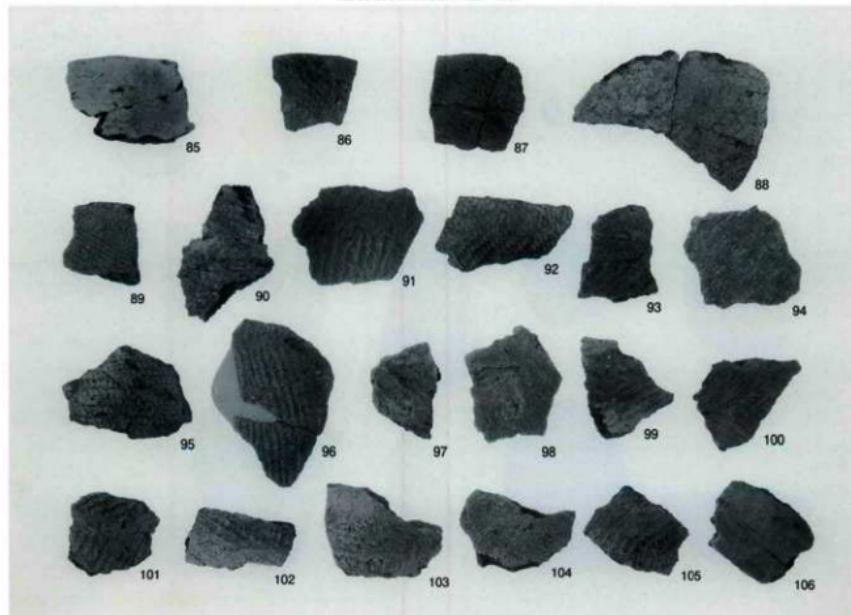
包含層出土繩文土器（1）



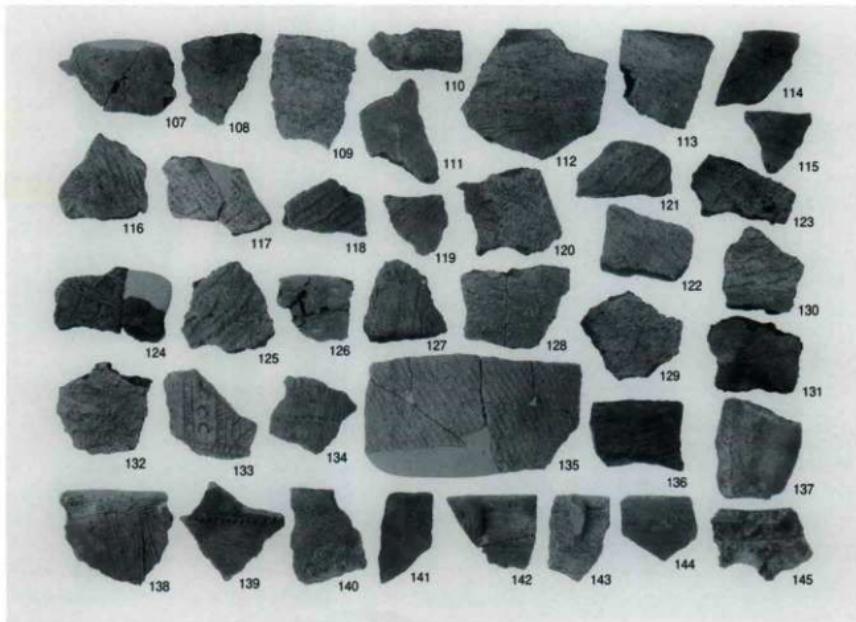
包含層出土繩文土器（2）



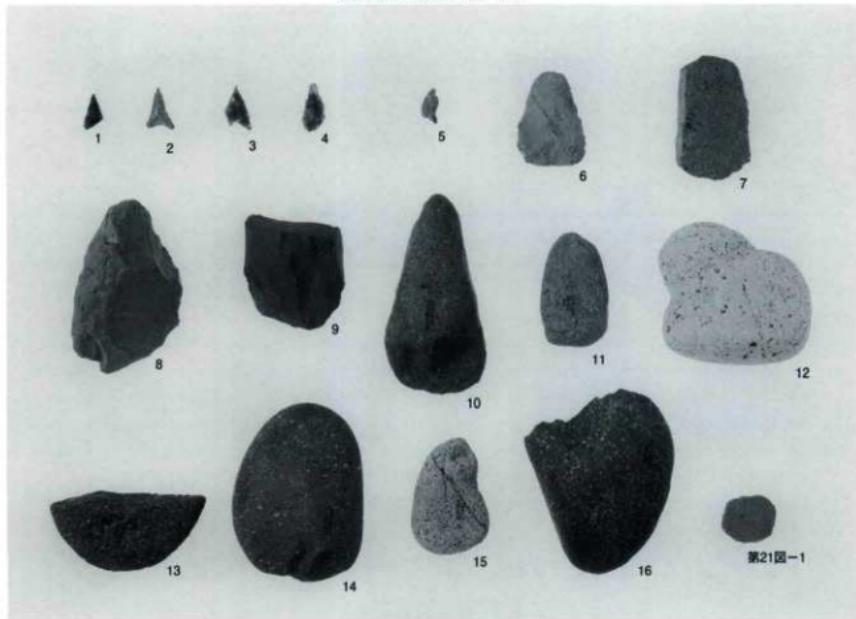
包含層出土繩文土器（3）



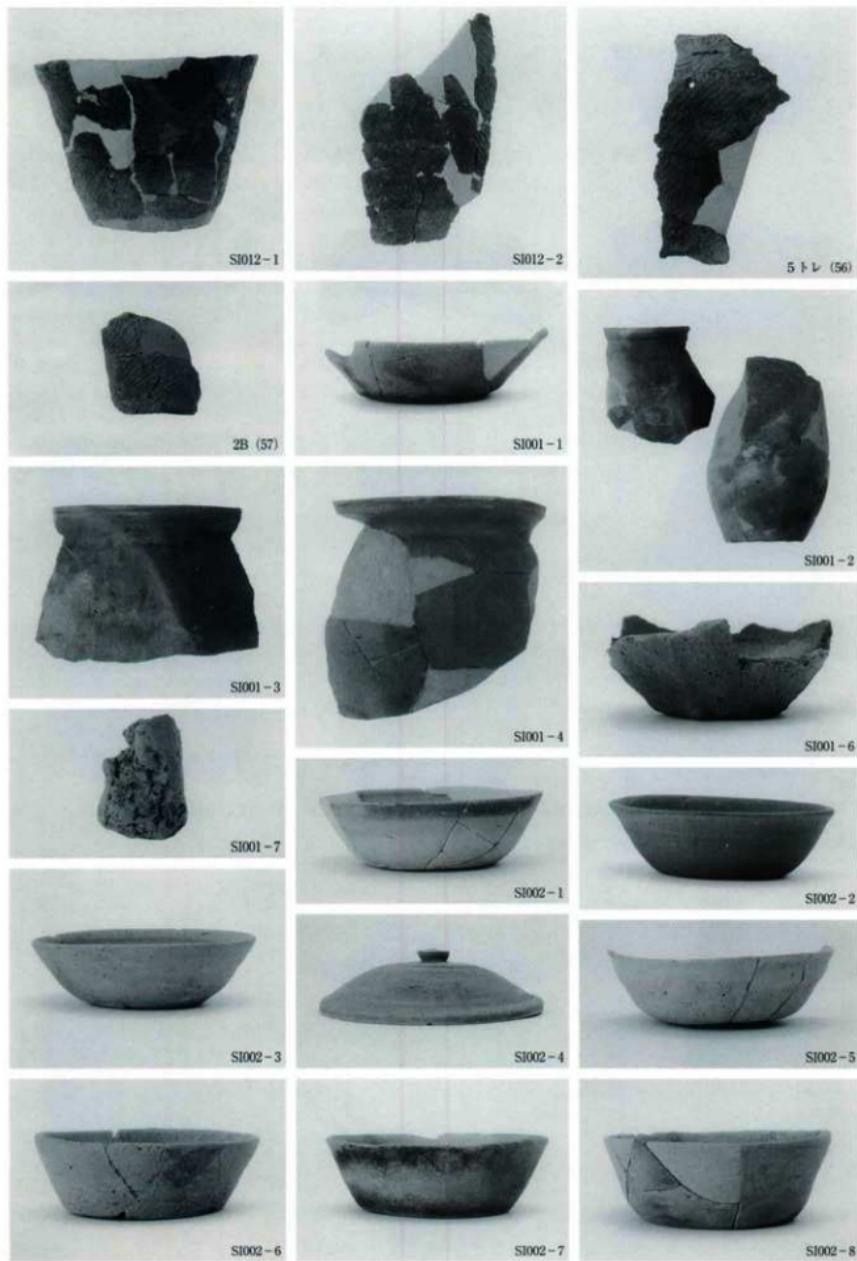
包含層出土繩文土器（4）



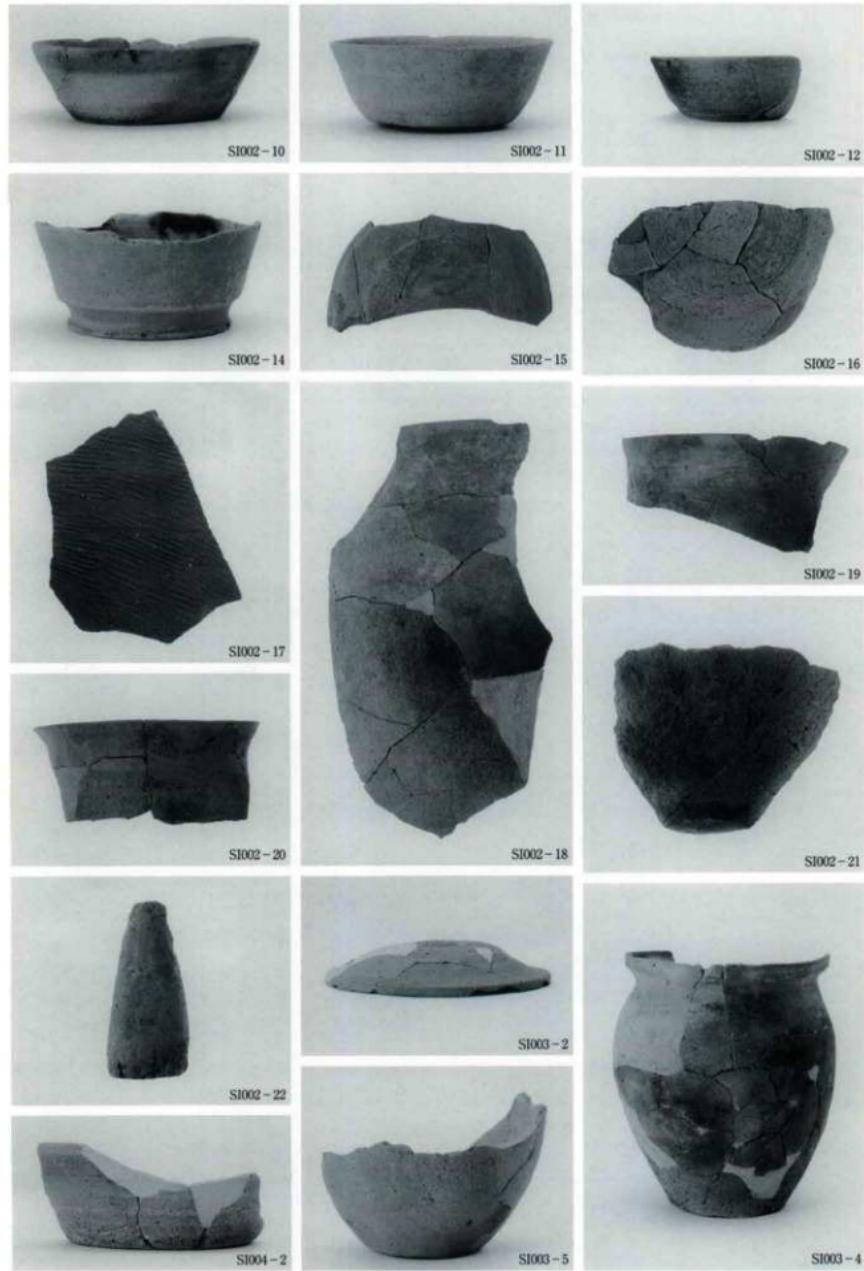
包含層出土繩文土器（5）



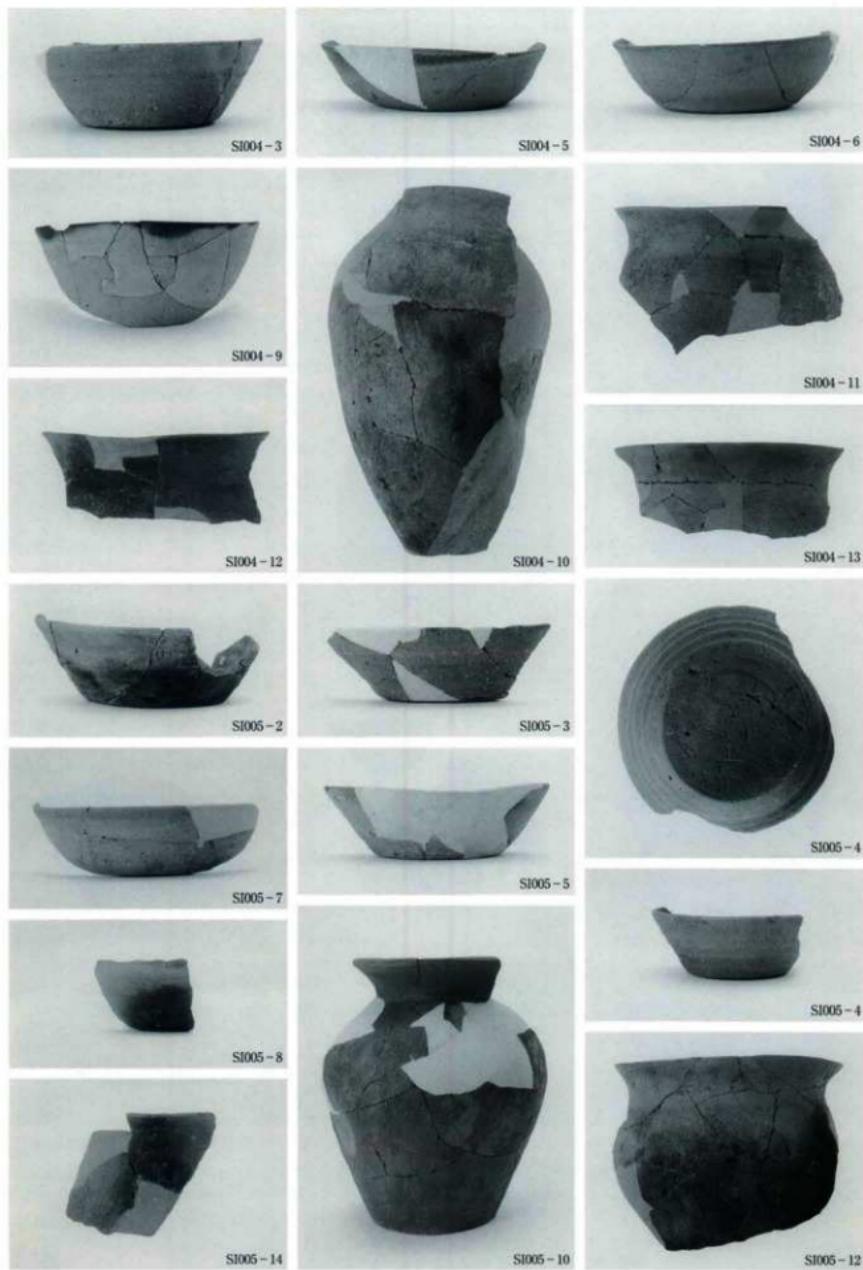
縄文時代石器・土製品



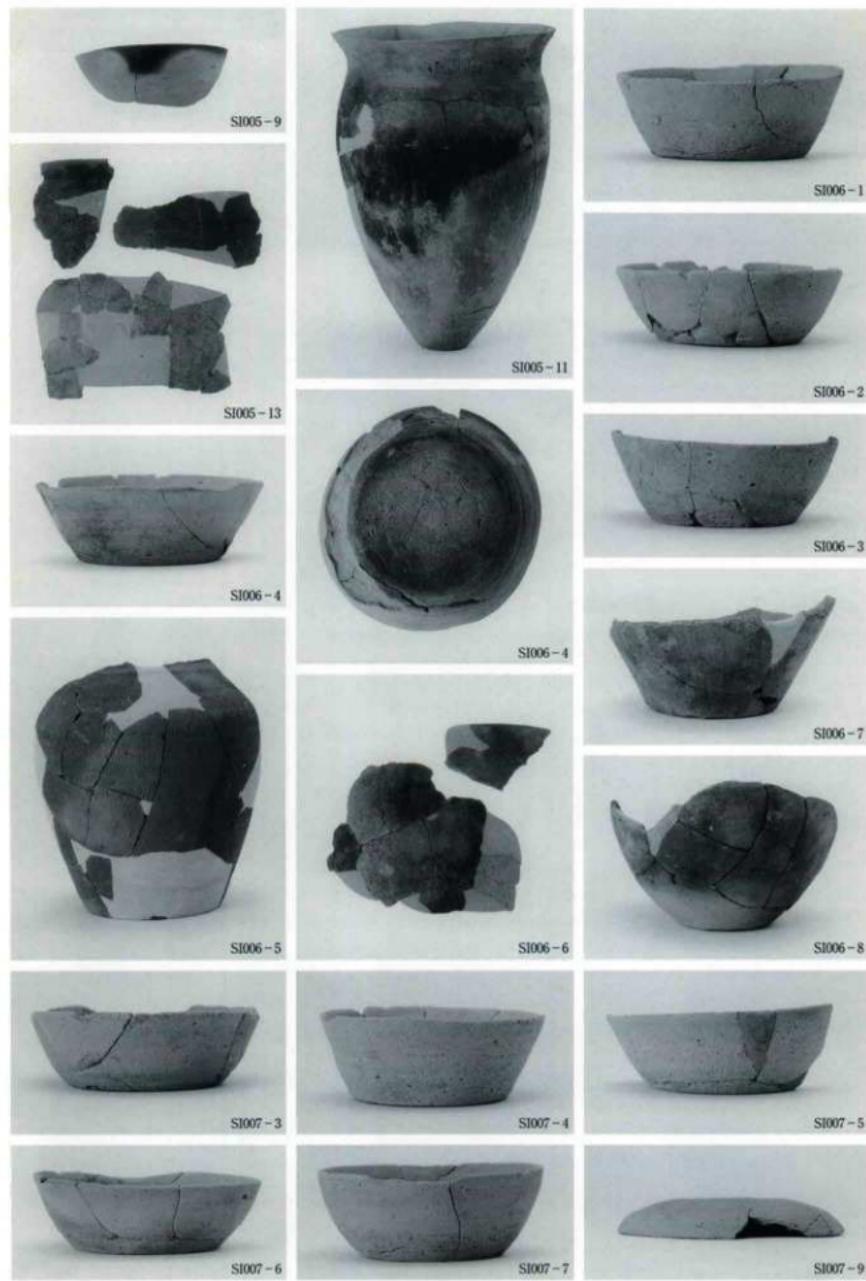
縄文土器、奈良・平安時代土器（1）



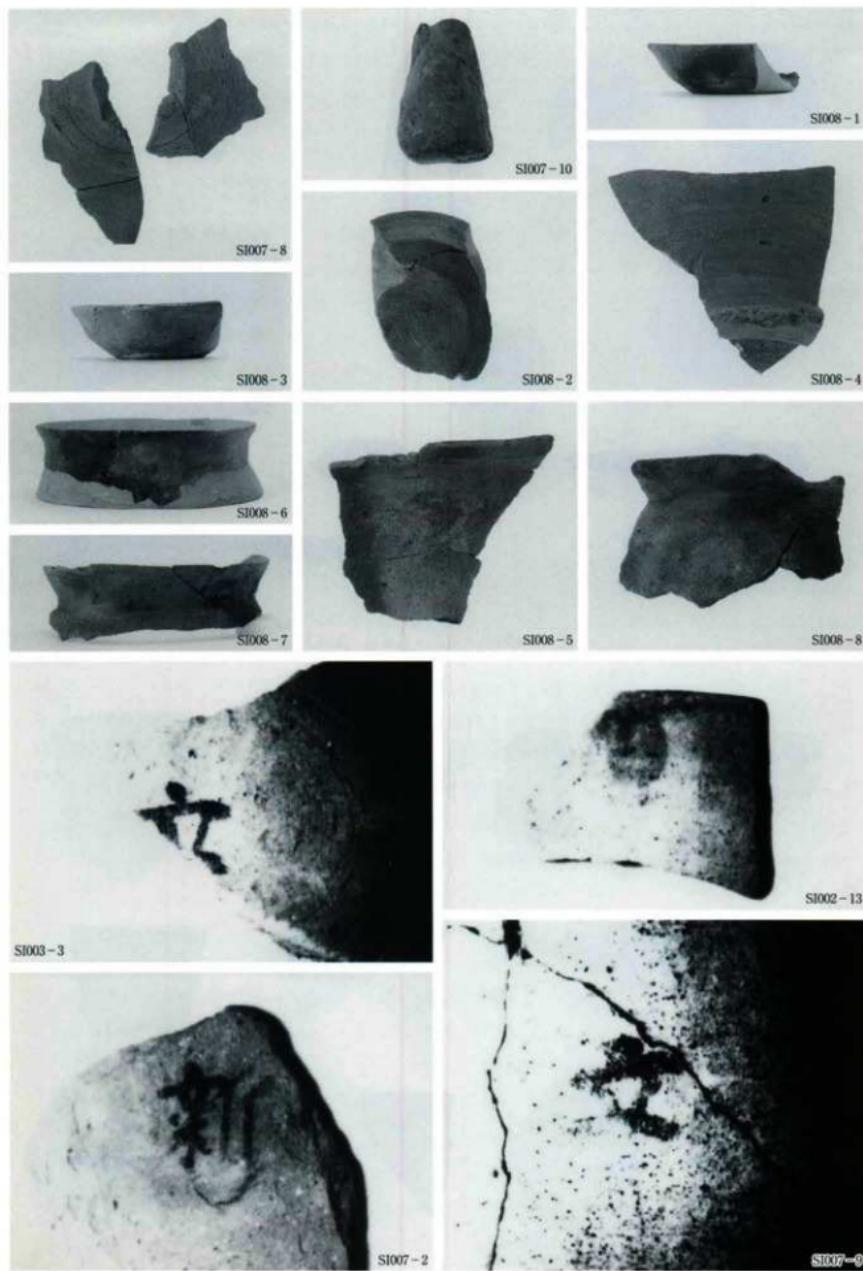
奈良・平安時代土器（2）



奈良・平安時代土器（3）

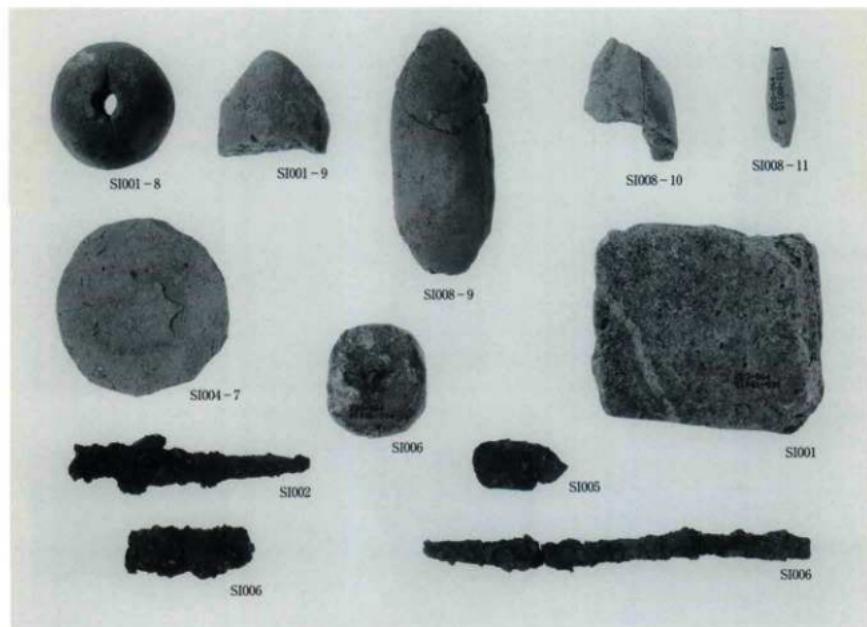


奈良・平安時代土器（4）

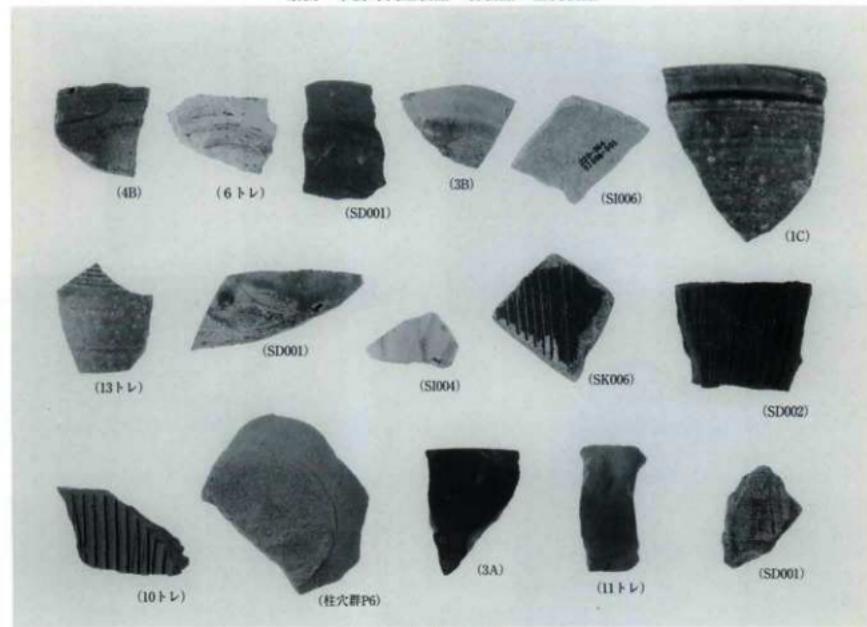


奈良・平安時代土器（5）

(下段=赤外線撮影)



奈良・平安時代土製品・石製品・金属製品



中・近世陶磁器類

報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第649集

流山市下花輪荒井前遺跡

—高度浄水施設建設関連埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成22年12月10日発行

編 集 財團法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

發 行 北千葉広域水道企業団
松戸市七右衛門新田540番地の2

財團法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1-10-6